

志木市の文化財 第76集

# 西原大塚遺跡 第216地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

埼玉県志木市教育委員会





601号住居跡出土の蔽石（601Y-40）



蔽石に見られる粘土付着痕（上端部）



蔽石に見られる粘土付着痕（下端部）



壺（601Y-2）に見られる土器細粒



甕（601Y-11）に見られる土器細粒



## はじめに

志木市教育委員会  
教育長 柚木 博

ここに刊行する『西原大塚遺跡第216地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が平成30年度に受託事業として実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、市内には、15カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

さて、今回報告する第216地点の調査内容ですが、縄文時代の住居跡1軒・炉穴2基・土坑31基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡2軒・掘立柱建築遺構1棟、中世以降の土坑12基・土坑墓1基などが発見されました。

縄文時代では、志木市内では発見例が少ない、縄文時代後期の住居跡1軒が発見され、多くの土器・石器が出土し、貴重な成果と言えます。また、弥生時代後期～古墳時代前期では、掘立柱建築遺構1棟の発見が目立ちます。この掘立柱建築遺構は8本の柱穴が八角形に配される特殊なタイプで、これまでに西原大塚遺跡では、このタイプのものが3棟発見されており、今回で4棟目となります。掘立柱建築遺構は当時の倉庫であったと推測されており、集落内で大きな役割を果たしていました。今回の発見は、集落の解明につながる貴重な発見だと考えられます。中世以降では、近世の土坑墓1基が発見され、人骨と共に六文銭が発見されました。

このように、今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者や土地所有者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

## 例 言

1. 本書は、平成30年（2018）度に発掘調査を実施した、埼玉県志木市に所在する遺跡である西原大塚遺跡第216地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘作業及び整理作業は、志木市教育委員会の受託事業として、土木工事主体者の株式会社住研コンサル（代表取締役社長 渡邊 清）から委託を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。  
大久保 聡 第2章第2節、第3節（2）・（4）・（6）石器、第4節（2）石器、  
第6節（1）石器、第3章第2節  
青木 修 第2章第3節（2）縄文土器、（3）・（4）、（6）縄文土器、  
第6節（1）の縄文土器
4. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・増田千春・林ゆき子・二階堂美知子・村田浩美・山口優子が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修・池野谷有紀が行った。写真撮影は青木が行った。
5. 本書に掲載した石器については、第34図40を大久保が実測し、それ以外を有限会社アルケーリサーチ（取締役社長 藤波啓容）に実測を委託した。
6. 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ（代表取締役 中村賢太郎）に委託した。
7. 基準点測量は、株式会社中野技術（代表取締役 兼光利之）に委託した。
8. 発掘作業における表土剥ぎ作業については、株式会社大塚屋商店（代表取締役 網島正人）に委託した。
9. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。
10. 調査組織（令和元年度）

教 育 長	柚木 博
教育政策部長	土岐隆一
教育政策部次長	北村竜一
生涯学習課長	原田謙二
生涯学習課主幹	中原敦也
生涯学習課主査	浅見千穂
〃	武井香代子
〃	尾形則敏
生涯学習課主任	松永真知子
〃	徳留彰紀
〃	大久保 聡
生涯学習課主事補	鈴木楓月
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
〃	深瀬 克（委員）

- ” 高橋 豊(委員)  
” 上野守嘉(委員)  
” 新田泰男(委員)

11. 発掘作業及び整理作業参加者

○発掘作業

- 調査担当者 大久保 聡・尾形 則敏  
調査員 青木 修  
調査補助員 星野恵美子・鈴木 浩子  
協力員 池野谷有紀・片山 望・二階堂美知子・林 ゆき子・増田千春・  
松浦 恵子・村田 浩美  
重機オペレータ 田中 三二(株式会社大塚屋商店)

○整理作業

- 調査員 深井 恵子・青木 修  
調査補助員 星野恵美子・鈴木 浩子  
作業員 池野谷有紀・片山 望・二階堂美知子・林 ゆき子・増田千春・  
松浦 恵子・村田 浩美・山口 優子

12. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である(敬称略)。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

江原 順・加藤 秀之・川畑 隼人・隈本 健介・齊藤 純・齋藤 欣延・斯波 治・  
鈴木 一郎・照林 敏郎・中岡 貴裕・野沢 均・早坂 廣人・堀 善之・前田 秀則・  
柳井 章宏・山本 龍・和田 晋治・渡辺 邦仁

13. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記のとおりである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)

平成30年7月26日付け 教文資第4-505号

○埋蔵物の文化財認定について(通知)

平成31年3月22日付け 教文資第7-208号

## 凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1:10,000「志木市全図」株式会社バスコ調製

第2図 1:2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行  
株式会社ゼンリン

2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。
3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
4. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
5. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
6. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
7. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。
8. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は〔 〕、推定値は（ ）を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚

9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

J＝縄文時代の住居跡 F P＝炉穴 Y＝弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡

D＝土坑 T＝掘立柱建築遺構 P＝ビット



# 目 次

巻頭図版／はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2章 西原大塚遺跡第216地点の調査	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 調査の経緯	8
第3節 縄文時代の遺構・遺物	15
第4節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物	63
第5節 中世以降の遺構・遺物	77
第6節 遺構外出土遺物	88
第3章 調査のまとめ	95
第1節 縄文時代の調査成果	95
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の調査成果	96
第3節 中世以降の調査成果	98

[付編] 自然科学分析

Ⅰ. 灰質物の材質分析	103
Ⅱ. 西原大塚遺跡第216地点から出土した炭化種実	105
Ⅲ. 西原大塚遺跡第216地点出土炭化材の樹種同定	107
Ⅳ. 601号住居跡の赤砂利層覆土の砂礫分析	109
Ⅴ. 蔽石の蔽打面付着物の成分分析	112
Ⅵ. 西原大塚遺跡第216地点766号土坑出土土人骨	114

図 版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2	第24図	ビット (1/60)	55
第2図	西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)	9	第25図	ビット出土遺物 (1/3)	56
第3図	確認調査時の遺構分布 (1/300)	10	第26図	遺物包含層遺物出土状態 (1/100・1/30)	57
第4図	遺構分布図・基本土層 (1/150・1/60)	14	第27図	遺物包含層出土遺物1 (1/3)	59
第5図	186号住居跡 (1/60)	17	第28図	遺物包含層出土遺物2 (1/3・2/3)	60
第6図	186号住居跡跡・埋裏 (1/30)	19	第29図	601号住居跡1 (1/60)	64
第7図	186号住居跡ビット土層断面1 (1/60)	20	第30図	601号住居跡2 (1/60)	65
第8図	186号住居跡ビット土層断面2 (1/60)	21	第31図	601号住居跡遺物出土状態 (1/60)	66
第9図	186号住居跡ビット土層断面3 (1/60)	22	第32図	601号住居跡出土遺物1 (1/4)	67
第10図	186号住居跡ビット土層断面4 (1/60)	23	第33図	601号住居跡出土遺物2 (1/3)	68
第11図	186号住居跡ビット土層断面5 (1/60)	24	第34図	601号住居跡出土遺物3 (1/3・1/2)	69
第12図	186号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)	27	第35図	602号住居跡 (1/60)	70
第13図	186号住居跡出土遺物2 (1/3・2/3・1/4)	28	第36図	602号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	71
第14図	炉穴 (1/60)	31	第37図	4号独立柱建築遺構 (1/60)	75
第15図	土坑1 (1/60)	39	第38図	4号独立柱建築遺構出土遺物 (1/3)	76
第16図	土坑2 (1/30・1/60)	40	第39図	ビット (1/60)	77
第17図	土坑3 (1/60)	41	第40図	土坑1 (1/30・1/60)	81
第18図	土坑4 (1/60)	42	第41図	土坑2 (1/60)	82
第19図	土坑出土遺物1 (1/4・1/3)	44	第42図	土坑出土遺物 (4/5・1/3)	83
第20図	土坑出土遺物2 (1/4)	45	第43図	ビット (1/60)	86
第21図	土坑出土遺物3 (1/4・1/3・2/3)	47	第44図	遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)	89
第22図	土坑出土遺物4 (1/4・1/3)	48	第45図	遺構外出土遺物2 (1/3)	90
第23図	土坑出土遺物5 (1/3)	49	第46図	遺構外出土遺物3 (1/3)	91

## 表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1	第5表	186号住居跡出土石器一覧	30
第2表	西原大塚遺跡第216地点の発掘調査工程表	12	第6表	縄文時代の土坑一覧	43
第3表	186号住居跡ビット一覧 (1)	25	第7表	縄文時代の土坑出土石器一覧 (1)	50
	186号住居跡ビット一覧 (2)	26		縄文時代の土坑出土石器一覧 (2)	51
第4表	186号住居跡出土石器一覧 (1)	29		縄文時代の土坑出土石器一覧 (3)	52
	186号住居跡出土石器一覧 (2)	30	第8表	縄文時代の土坑出土石器一覧	53

第9表	縄文時代のビット一覧	56	第24表	遺構外出土縄文土器一覧(1)	92
第10表	縄文時代のビット出土土器一覧	56		遺構外出土縄文土器一覧(2)	93
第11表	遺物包含層出土土器一覧(1)	61	第25表	遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期の土器	
	遺物包含層出土土器一覧(2)	62		一覧	94
第12表	遺物包含層出土土製品一覧	62	第26表	遺構外出土陶磁器・土器一覧	94
第13表	遺物包含層出土土器一覧	62	第27表	分析試料とその特徴	103
第14表	601号住居跡出土土器一覧(1)	72	第28表	灰質物中の白色塊と現生植物灰化試料	104
	601号住居跡出土土器一覧(2)	73	第29表	西原大塚遺跡第216地点から出土した	
	601号住居跡出土土器一覧(3)	74		炭化種実	105
第15表	602号住居跡出土土器	74	第30表	西原大塚遺跡第216地点出土炭化材の	
第16表	4号掘立柱建築遺構ビット一覧	76		樹種同定結果	107
第17表	4号掘立柱建築遺構出土土器一覧	76	第31表	分析試料とその特徴	109
第18表	弥生時代後期～古墳時代前期のビット一覧	77	第32表	処理重量と各部残渣重量	109
第19表	中世以降の土坑一覧	83	第33表	岩石組成	110
第20表	766号土坑出土銭貨一覧	84	第34表	葎石打面付着物の詳細	112
第21表	中世以降の遺構出土陶器・土器一覧	85	第35表	黄褐色の粒状付着物の点分析	112
第22表	中世以降のビット一覧	87	第36表	人骨所見	114
第23表	遺構外出土土器一覧	92			

## — 図 版 目 次 —

### 図版1 西原大塚遺跡第216地点

1. 確認調査風景 2. 調査区近景 3. 表土剥ぎ風景
4. 基本土層A-A' 5. 186号住居跡(北から)
6. 186号住居跡(西から) 7. 186号住居跡埋塵

### 図版2 西原大塚遺跡第216地点

1. 186号住居跡が跡 2. 186号住居跡が跡被熱断面
3. 73・74・75号ビット 4. 98号ビット遺物出土状態
5. 108・103号ビット 6. 104・105・112号ビット
7. 110号ビット遺物出土状態 8. 131号ビット

### 図版3 西原大塚遺跡第216地点

1. 135号ビット 2. 143・139・138号ビット
3. 776号土坑 4. 777号土坑 5. 780号土坑
6. 781号土坑 7. 782号土坑 8. 783号土坑

### 図版4 西原大塚遺跡第216地点

1. 785号土坑 2. 786号土坑遺物出土状態

3. 786・788号土坑 4. 787号土坑遺物出土状態
5. 787号土坑 6. 789号土坑 7. 790号土坑
8. 791号土坑

### 図版5 西原大塚遺跡第216地点

1. 792号土坑 2. 793号土坑 3. 794号土坑
4. 795号土坑 5. 796号土坑 6. 798号土坑
7. 800号土坑 8. 801号土坑

### 図版6 西原大塚遺跡第216地点

1. 802・803号土坑 2. 804号土坑 3. 805号土坑
4. 806号土坑 5. 807・808号土坑 6. 17号が穴
7. 18号が穴 8. 150号ビット

### 図版7 西原大塚遺跡第216地点

- 1～7. 601号住居跡遺物出土状態
8. 601号住居跡赤色砂利層検出状態

図版8 西原大塚遺跡第216地点

1. 601号住居跡貯蔵穴
2. 601号住居跡炉跡
- 3・4. 601号住居跡
5. 601号住居跡床下P6
- 6~8. 602号住居跡遺物出土状態

図版9 西原大塚遺跡第216地点

1. 602号住居跡炉跡
2. 602号住居跡貯蔵穴
- 3・4. 602号住居跡
5. 4号掘立柱建築遺構

図版10 西原大塚遺跡第216地点

1. 4号掘立柱建築遺構P1
2. 4号掘立柱建築遺構P2
3. 4号掘立柱建築遺構P3
4. 4号掘立柱建築遺構P4
5. 4号掘立柱建築遺構P5
6. 4号掘立柱建築遺構P6
7. 4号掘立柱建築遺構P7
8. 4号掘立柱建築遺構P8

図版11 西原大塚遺跡第216地点

1. 766号土坑人骨出土状態
2. 766号土坑
3. 767・768・769号土坑
4. 770号土坑
5. 771号土坑
6. 772号土坑
7. 773号土坑

図版12 西原大塚遺跡第216地点

1. 774号土坑
2. 775号土坑
3. 778号土坑
4. 779号土坑
5. 784号土坑
6. 8号ピット
- 7・8. 調査風景

図版13 西原大塚遺跡第216地点

- 186号住居跡出土遺物1

図版14 西原大塚遺跡第216地点

1. 186号住居跡出土遺物2
2. 土坑出土遺物1

図版15 西原大塚遺跡第216地点

- 土坑出土遺物2

図版16 西原大塚遺跡第216地点

- 土坑出土遺物3

図版17 西原大塚遺跡第216地点

1. 土坑出土遺物4
2. ピット出土遺物

図版18 西原大塚遺跡第216地点

- 遺物包含層出土遺物1

図版19 西原大塚遺跡第216地点

1. 遺物包含層出土遺物2
2. 601号住居跡出土遺物1

図版20 西原大塚遺跡第216地点

- 601号住居跡出土遺物2

図版21 西原大塚遺跡第216地点

1. 602号住居跡出土遺物
2. 4号掘立柱建築遺構出土遺物

図版22 西原大塚遺跡第216地点

1. 土坑出土遺物
2. 8号ピット出土遺物
3. 遺構外出土遺物1

図版23 西原大塚遺跡第216地点

- 遺構外出土遺物2

図版24 西原大塚遺跡第216地点

- 遺構外出土遺物3

図版25 西原大塚遺跡第216地点

- 分析試料と灰物質の偏光顕微鏡写真及び現生植物の灰化

図版26 西原大塚遺跡第216地点

- 西原大塚遺跡第216地点から出土した炭化種実

図版27 西原大塚遺跡第216地点

- 西原大塚遺跡第216地点出土炭化材の  
走査型電子顕微鏡写真

図版28 西原大塚遺跡第216地点

- 赤砂利層及び近辺の覆土中の砂礫の実体顕微鏡写真

図版29 西原大塚遺跡第216地点

- 覆土中の礫の実体顕微鏡写真

図版30 西原大塚遺跡第216地点

- 蔽石と蔽打面の黄色付着物の顕微鏡写真

図版31 西原大塚遺跡第216地点

- 蔽打面bの元素マッピング図

図版32 西原大塚遺跡第216地点

- 西原大塚遺跡第216地点766号土坑出土の人骨

# 第1章 遺跡の立地と環境

## 第1節 市域の地形と遺跡

### (1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.05㎢（註1）、人口約7万5千人の自然と文化の調和する都市である。

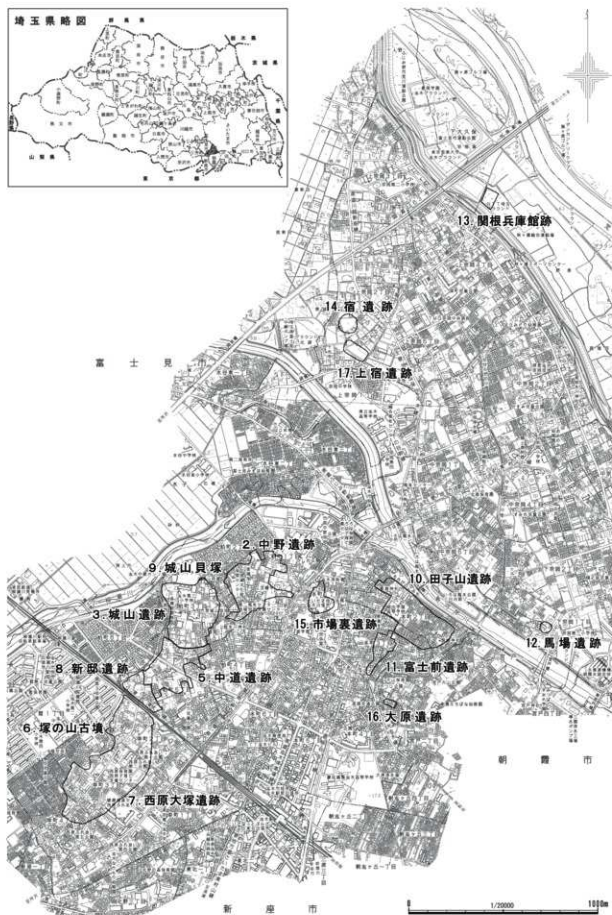
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が扯がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新郷遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）

№	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	67,620㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,100㎡	畑・宅地	城跡跡・集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、跡道関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、銅造関連遺物等
5	中道	54,420㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式土坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	164,960㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新郷	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（早～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830㎡	宅地	集落跡	縄文・弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	原根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	水田	館跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
17	上宿	8,600㎡	水田・宅地	集落跡	平安、中・近世	住居跡、溝跡	土師器、須恵器
合計		519,240㎡					

令和元年11月14日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布(1/20,000)

令和2年1月31日現在

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

## （2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。最新では、令和元（2019）年に第224地点で立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部・Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・真岩の石核・剥片が約60点出土している。平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91㊦地点からは、礫群1基が検出された。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層のⅣ層上部とⅦ層の2ヶ所で石器集中地点が検出されている。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部で石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部・Ⅶ層で石器集中地点と礫群が検出されている。

### 2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東

側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23(2011)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡(黒浜式期)、城山遺跡では住居跡(諸磯式期)が検出されている。そのうち、新邸・城山遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成27(2016)年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曾利EIV式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所、平成25(2013)年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居(敷石住居)1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6(1994)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。最新資料として、平成26(2015)年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28(2016・2017)年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期(称名寺式～堀之内式期)の遺物が比較的多く出土している。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

### 3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については、令和元(2019)年に発掘調査された城山遺跡第96地点で、市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは、壺、甕、高坏、扶入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27(2016)年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6(1994)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子(イネ・アワ・ダイズなど)、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24(2012)年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅剣が出土している。



昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単一的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。なお、鳥形土製品1と壺形土器4点の計5点は、考古資料として市指定文化財に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

#### 4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で約230軒、次いで中野遺跡で約55軒、中道遺跡と田子山遺跡で16軒ずつ、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

## 5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器環や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸柄が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（人間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器環が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

## 6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』（註2）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『徳圃雜記』（註3）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、『大塚十玉坊』についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板磚と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鑄造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鑄型、鍋の耳部分の小型鑄型、三叉状・四叉状土製品・トリペ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状態で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ビット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たな土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ビット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」に関連する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」に関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のビットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

## 7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの錆着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

### 【註】

註1 平成26年度「全国都道府県市区町村別面積調」により、9.06㎢から9.05㎢に変更された。

註2 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原伸右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註3 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

### 【引用文献】

- 神山健吉 1988 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉町の所在についての一考察」『郷土志木』第7号  
2002 「道興をめぐる二つの譚説を糾す」『郷土志木』第31号

## 第2章 西原大塚遺跡第216地点の調査

### 第1節 遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町2～4丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約1kmに位置している。北東—南西方向に約700m、北西—南東方向に約150mの広がりを持ち、遺跡面積164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は10～18mと遺跡内で8mの比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高14～16mに位置しており、おおむね緩やかな傾斜をもち台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点が確認されている。

昭和48（1973）年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元（1989）年から平成19（2007）年までは、西原特定土地地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。

近年では区画整理事業の完了に伴い、小・中規模の共同住宅や分譲住宅、個人専用住宅の建設などの各種土木工事が増加傾向にあり、それに伴い確認調査・発掘調査件数は、令和2年1月31日現在で、231地点にのぼり、市内では最多件数となっている（第2図）。

これまでの調査の結果、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では、住居跡約200軒からなる大規模な環状集落跡が形成されていることが判明しつつあり、弥生時代後期から古墳時代前期では、住居跡600軒以上と40基程の方形周溝墓が検出され、県内でも最大規模となる集落跡であると考えられる。

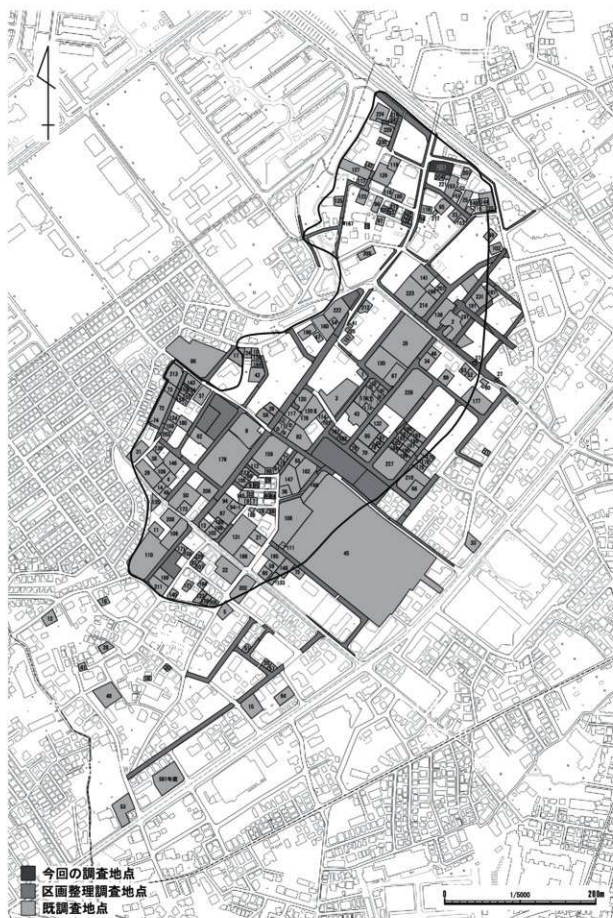
### 第2節 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経過

平成28年5月、株式会社住研コンサルから志木市教育員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町2丁目6190・6191番（面積479.72㎡）地内に共同住宅建設を行うというものである。

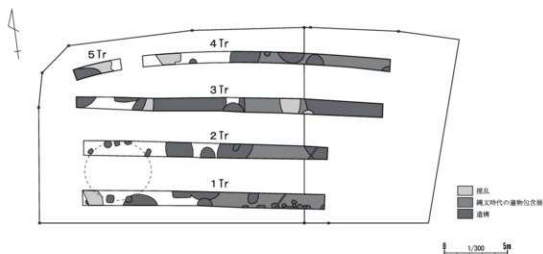
これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-09-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を



第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)

令和2年1月31日現在



第3図 確認調査時の遺構分布 (1 / 300)

実施する必要があること。

その後、平成29年12月になって、株式会社住研コンサルから、計画がほぼ決定したということで、連絡があった。そのため、現在既存の建物を解体し、更地になった状態で、確認調査を実施する方向となった。

平成30年3月12日、教育委員会は、株式会社住研コンサルを通し、土地所有者及び土木工事主体者である個人（以下、工事主体者）より確認調査依頼書を受領し、本件の地点名を西原大塚遺跡第216地点とした。

その後、5月1日、株式会社住研コンサルから、解体終了予定の連絡を受け、5月17・18日の2日間で確認調査を実施した。

確認調査は、第3図に示すように調査区の長軸方向に5本のトレンチ（1～5Tr）を設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の住居跡7軒・土坑5基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡4軒・柱穴6本、中世以降の土坑3基・柱穴16本を確認した。

調査の全体的内容では、調査区全体に漸移層ないし縄文時代の遺構が広がっているものと推測され、特に出土した土器から、志木市では希少な縄文時代後期（堀之内式期）に比定される時期に関係があるものと考えられた。

教育委員会は、この結果をただちに仲介業者である株式会社住研コンサルに報告し、保存措置について検討を依頼した。5月29日に株式会社住研コンサルと埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、自転車置場・外構等については、盛土保存が適用されたが、建物部分（373.94㎡）については、十分な文化財保護層が確保できないことから、発掘調査を実施することに決定した。また、これ以降、正式な土木工事主体者は、個人に代わって株式会社住研コンサル（代表取締役 渡邊 清）に変更することとなったため、教育委員会は、埋蔵文化財発掘の届出を株式会社住研コンサルから受理し、同時に発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。

また、土木工事主体者より志木市埋蔵文化財保存事業委託申請書が提出されたため、志木市埋蔵文化財保存事業受託要綱第2条第2項に基づき、6月8日に発掘調査実施に向けた事前協議を実施した。

6月19日、志木市と土木工事主体者の間で志木市埋蔵文化財保存事業に係る協議書が取り交わされ、

同時に委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

## (2) 発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表に示した。

- 6月19日 発掘調査を開始する。調査区東側を前半区、調査区西側を後半区とした。重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を調査区北東端から開始する。残土置場は調査区後半区に当てることとした。
- 21日 表土剥ぎ作業2日目。同時に人員を導入し、調査機材搬入、調査区整備、遺構確認作業を行う。本日中に表土剥ぎを終了し、前半区の遺構検出状況の写真撮影を完了した。
- 22日 本日より前半区の遺構精査を開始する。土坑（766～769 D）の精査を開始する。766 Dから人骨片が出土し、土坑墓と判明した。
- 23～30日 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（601 Y）、土坑（770～773 D）の精査を開始する。766～773 Dの精査を終了する。
- 7月上旬 土坑（774・775 D）の精査を開始する。601 Yでは、遺物出土状況の写真撮影を行い、P1～5、貯蔵穴、炉跡の精査を行う。
- 7月中旬 炉穴（17 F P）、土坑（776 D）の精査を開始する。601 Yでは、掘り方の精査を行い、精査を終了する。17 F P、774～776 Dの精査を終了する。
- 7月下旬 土坑（777～781・805・806 D）の精査を開始する。186 Jについては、当初、明瞭な遺構検出はできておらず、縄文時代のピットを精査していく過程で、ピットが円形に分布することから、186 Jを認識した。186 Jに関連するピットの精査を開始する。777～781・805・806 Dの精査を終了する。
- 8月上旬 土坑（782・783・802～804 D）の精査を開始する。186 Jの炉跡の検出状況を写真撮影する。炉跡については、当初、炉穴として調査を開始した。782・802～804 Dの精査を終了する。
- 8月9・10日 遺構精査と並行して前半区の埋め戻しを行う。埋め戻し作業については、186 Jの関連ピットを残して埋め戻しを行った。783 Dの精査を終了する。基本土層A-A'の記録を行う。
- 16・17・20日 後半区の表土剥ぎ作業を行い、17日に終了する。20日には後半区の調査区整備、遺構検出作業、遺構検出状況の写真撮影を行う。186 J 炉跡の断面を写真撮影し、図面で記録する。
- 8月下旬 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（602 Y）、掘立柱建築遺構（4 T）、土坑（784 D）の精査を開始する。602 Yについては、掘り方までの精査、記録を行い、終了する。4 Tについては、半截した後、断面・エレベーション図の記録を行った。完掘後、平面図を作成し、精査を終了する。引き続き、縄文時代の遺構精査を行うが、検出面が暗褐色土であり、遺構検出が難しく、かつ遺物包含層と考えられたため、基本土層B-B'・C-C'を設定し、セクションベルトを残しつつ掘り下げ、遺構検出、遺物包含層の精査を行った。また、186 Jの床面を把握するため、基本土層

第2章 西原大塚遺跡第216地点の調査

	平成30年6月			7月			8月			9月			10月	
	20日	30日		10日	20日	30日	10日	20日	30日	10日	20日	30日	5日	
表土削り作業	6.19	6.21												
186J						7.27								10.1
601Y		6.28				7.13								
602Y									8.21			8.28		
4T									8.23			8.29		
17FP						7.17	7.18							
18FP												9.25		10.2
766D		6.22	6.26											
767D		6.22	6.25											
768D		6.22	6.25											
769D		6.22	6.25											
770D		6.25	6.29											
771D		6.25	6.26											
772D		6.27	6.28											
773D		6.28												
774D			7.4			7.12								
775D			7.4			7.12								
776D					7.13	7.17								
777D						7.23								
778D						7.24								
779D						7.26								
780D						7.30	7.31							
781D						7.31								
782D						8.1	8.2							
783D							8.3	8.9						
784D									8.31					
785D									8.29					
786D										9.5		9.12		
787D										9.6		9.10		
788D										9.7		9.12		
789D										9.10				10.3
790D										9.10		9.12		
791D										9.11		9.12		
792D										9.12				
793D										9.13		9.19		
794D										9.19		9.20		
795D												9.28		
796D												9.20		10.3
797D												9.28		10.2
798D												9.28		10.2
799D														10.2
800D														10.2
801D														10.3
802D							8.2	8.5						
803D							8.2	8.3						
804D							8.2	8.3						
805D						7.24								
806D						7.24								
807D										9.6				10.3
808D										9.6				10.3
809D											9.19			10.4
石敷及び表土削り作業							8.9	8.17						
表土上層 (A-A')							8.9	8.10						
表土中層 (B-B')													10.2	10.3
表土下層 (C-C')													10.2	10.3
表土上層 (D-D')													10.2	10.3
埋戻し作業													10.5	10.6

第2表 西原大塚遺跡第216地点の発掘調査工程表



- D-D'を設定し、土層の観察を行った。186 Jの精査では、炉跡底面付近から灰が検出され、灰のサンプリングを行った。炉跡を完掘する。784 Dの精査を終了する。
- 9月上旬 土坑(786~790・807・808D)の精査を開始する。786Dからは、遺物が多量に出土したため、微細図で遺物出土状況を記録した。787Dでは、覆土中から炭化種実が出土したため、炭化種実の取り上げ、出土層の土壌サンプリングを行った。186Jでは、住居中央やや南西で埋壘を検出し、精査を開始する。検出状況の写真撮影後、半載を行った。787・789 Dの精査を終了する。
- 9月中旬 土坑(791~794・809 D)の精査を開始する。186 Jでは、完掘全景の写真撮影を行い、埋壘の微細図の作成、炉跡の掘り方の精査及び被熱硬化範囲の確認を行った。786・788・790~794 Dの精査を終了する。
- 9月下旬 炉穴(18 F P)、土坑(795~798 D)の精査を開始する。186 Jでは、埋壘の取り上げを行い、掘り方の精査を行う。794・795 Dの精査を終了する。
- 10月上旬 土坑(799~801D)の精査を開始する。186 Jの埋壘の掘り方の記録を行う。186 J、18 F P、796~801・807~809Dの精査を終了する。基本土層B-B'~D-D'の記録を行う。基本土層の記録後、セクションベルトを掘削し、すべての調査を終了する。
- 10月5日 埋め戻し作業を開始する。6日に埋め戻しを完了する。

### (3) 基本層序と地形

本調査区のローム層序を確認するため、前半区では、(D-6)グリッドに深掘りトレンチを設定し、土層の記録を行った(基本土層A-A')。確認した層位は立川ローム第II層~第X層である。後半区では、黒褐色土(II a層)が一部残り、縄文時代の遺物包含層の調査を行うため、(B-4、C-3・4、D-2)グリッドに基本土層B-B'、(B~D-3)グリッドに基本土層C-C'を設定し、土層の記録を行った。また、基本土層D-D'については、186 Jの床面を認識するために(B~D-4)グリッドに設定し、土層の観察、記録を行った。II a層は(B・C-3・4)グリッドの一部に認められた。

#### 基本層序 (第4図)

- 第II a層 黒褐色土。層厚は8cm程度。基本土層B-B'・基本土層C-C'の一部で確認できた。
- 第II b層 暗褐色土。層厚は7~20cm。基本土層A-A'~D-D'で確認できた。
- 第II c層 灰黄褐色土。斑に黄褐色土が観察される。層厚は10~20cm。基本土層A-A'~D-D'で確認できた。
- 第II d層 にぶい黄褐色土。僅かに灰色味を帯びており、くすんだ色調である。層厚は4~20cm。基本土層B-B'~D-D'で確認できた。基本土層A-A'では確認されていないが、基本土層A-A'のIII層上部が本層と対応する可能性がある。
- 第III層 黄褐色土。いわゆるソフトローム層である。第III層と第IV層の境が波状をなしているため、層厚は一定していないが、基本土層A-A'では、層厚は22~47cm。基本土層B-B'~D-D'では、層厚は14~27cm。
- 第IV層 明黄褐色土。いわゆるハードローム層である。第III層と第IV層の境が波状をなしているため、層厚は一定しておらず、10~45cmである。



第4図 遺構分布図・基本土層(1/150・1/60)

- 第Ⅴ層 灰黄褐色土。立川ローム層第Ⅰ黒色帯である。層厚は10～20cmである。
- 第Ⅵ層 明黄褐色土。白色粒子を含む。削ると、ややガリガリとした感触がある。いわゆるA T包含層準であり、層厚は12～19cmである。
- 第Ⅶ層 灰黄褐色土。ややシルト質である。立川ローム層第Ⅱ黒色帯上半部であり、層厚は13～16cmである。
- 第Ⅷa層 褐色土。シルト質。黄褐色土が斑に観察される。立川ローム層第Ⅱ黒色帯下半部の上位であり、層厚は9～12cm。
- 第Ⅷb層 暗褐色土。シルト質。僅かに黄褐色土が斑に観察される。立川ローム層第Ⅱ黒色帯上半部の中位であり、層厚は14～20cm。
- 第Ⅷc層 灰褐色土。シルト質。層厚は10～13cm。
- 第Ⅹ層 黄褐色土。シルト質。第Ⅺ層まで掘り下げているため、層厚は不明。

---

### 第3節 縄文時代の遺構・遺物

---

#### (1) 概要

本地点において縄文時代の遺構は、住居跡1軒(186 J)、炉穴2基(17・18 F P)・土坑31基(776・777・780～783・785～809 D)、ピット104本(21・24・25・28～30・35・39～77・79・87・91・92・98～117・119・121～152)であった。なお、ピット104本の内、186 Jに伴う柱穴がその内80本と認識したため、残りの24本(21・24・25・28～30・35・40・79・87・90・91・97・102・116・140・141・144・147～152 P)が186 Jに伴わないピットとして考えた。

住居跡の時期は、出土土器から、後期の堀之内1式と思われ、市内では2例目の検出である。

また、検出された縄文土坑31基のうち、18基(780・782・783・785～789・791・793～796・798・799・801・807・809)からは、同じく後期の堀之内1式土器が安定して出土し、さらにピットや遺物包含層からも後期の堀之内1式・2式の土器が安定して出土していることから、この一帯においては、市内でも珍しい後期の遺構・遺物が集中するエリアであることが推測できる。

#### (2) 住居跡

##### 186号住居跡

**遺 構** (第5～11図、第3表)

**位 置** (C・D-3・4・5) グリッド。

**検出状況** 遺物包含層中における本住居跡の検出については、掘り込みがほとんど確認できなかったため、本住居跡に伴う柱穴であるのかを見極めるには困難を要した。柱穴は第3表に示したとおり、全部で80本を本住居跡に伴うものとして取り扱った。柱穴の配列から、本遺構は南側が一部調査区外であるものと考えられる。

**構 造** 平面形：円形か。規模：ピット配列の直径は9.0m前後を測る。壁溝：検出されなかった。壁：検出されなかった。床面：検出されなかった。炉：ピット配列中央やや東寄りに検出された。規模は長軸1.95m・短軸1.56m。構造としては、中央付近が54cmとピット状に深くなっており、壁際は一

段浅く、20cm程の深さでテラス状に平坦になっている。柱穴：当該遺構として取り扱った80本が円形に配されている。埋裏：炉跡の東側から検出された。土器は堀之内1式期の深鉢（第12図1）で、正置状態で埋められていた。掘り込みの規模は、長軸46cm・短軸39cm・深さ36cm。

〔覆土〕確認できなかった。

〔遺物〕炉跡・ピットから土器・石器が出土した。埋裏は堀之内1式の深鉢で、口縁部から底部まで残存する。炉跡から堀之内1式の土器片、小型の石核が出土している。110Pからは蓋形土器の完形品、104Pからは石鏃、73・103Pからは石皿の破片が出土している。

〔時期〕後期前葉（堀之内1式期）。

〔遺物〕（第12・13図、図版13、図版14-1、第4・5表）

本住居跡は、床面が検出されなかったため、ピットの配置から埋裏、炉跡、ピットを本住居跡に属するものとして、各遺構出土遺物をまとめて本住居跡出土遺物として扱うこととした。

〔土器〕（第12図1～21、第13図22～30、図版13-1～30、第4表）

概ね安定して堀之内1式が出土しているが、14（103P出土）、17（114P出土）、21（119P出土）については、後期中葉の加曾利B式土器に比定できるものと思われる。

〔石器〕（第13図31～36、図版14-1-31～36、第5表）

31は楔形石器、32は石鏃、33は剥片、34は敲石、35・36は石皿である。

### (3) 炉穴

#### 17号炉穴

〔遺構〕（第14図）

〔位置〕（D-7）グリッド。

〔検出状況〕770 D、2・20・22・24 Pに切られる。東側は現代の穴蔵等に掘乱される。

〔構造〕平面形：不整形。規模：長軸2.1m/短軸 不明/深さ29cm。壁：なだらかに立ち上がる。

長軸方位：N-40°-W。

〔覆土〕8層に分層された。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の観察から、縄文時代と思われる。

〔所見〕坑底東寄りに被熱部分が確認できたが、顕著な赤化は見られなかった。

#### 18号炉穴

〔遺構〕（第14図）

〔位置〕（D-2）グリッド。

〔検出状況〕799 D・88・95・116 Pに切られる。797・800 Dとの新旧は不明。

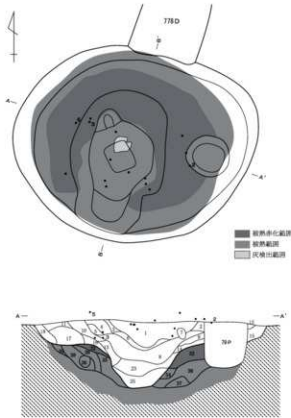
〔構造〕平面形：不整形。規模：現存最大長2.1m/短軸 不明/深さ48cm。壁：皿状になだらかに立ち上がる。坑底中央部が深く掘りこまれ、30cmほどの段を持つ。長軸方位：不明。

〔覆土〕15層に分層された。

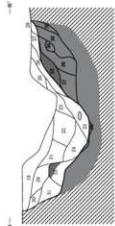
〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の観察から、縄文時代と思われる。



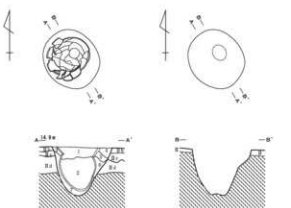


- 1層 埋戻り赤土 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックを含む。しまり強。
- 2層 埋戻り赤土 焼土粒子を含む。ローム粒子を塊状に含む。しまりやや強。
- 3層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む。しまり強。
- 4層 赤茶褐色土 焼土粒子を多く、ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 5層 赤褐色土 焼土粒子を多く含む。しまり強。
- 6層 埋戻り赤土 焼土粒子を含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 7層 埋戻り赤土 焼土粒子を含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。ブロック状。
- 8層 赤褐色土 焼土粒子を多く、ローム粒子を塊状に含む。しまり中。
- 9層 埋戻り赤土 焼土粒子を多く、ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 10層 赤茶褐色土 焼土粒子・焼土小ブロックを含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 11層 埋戻り赤土 ローム粒子を塊状に含む。しまりやや強。
- 12層 埋戻り赤土 ローム小ブロック・焼土粒子を含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 13層 埋戻り赤土 焼土粒子・焼土小ブロックを含む。灰化焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 14層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまりやや強。



- 15層 赤茶褐色土 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。しまり強。
- 16層 埋戻り赤土 ローム粒子・焼土粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまりやや強。
- 17層 埋戻り赤土 ローム粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 18層 埋戻り赤土 ローム粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 19層 埋戻り赤土 焼土粒子を含む。ローム粒子・焼土小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 20層 埋戻り赤土 焼土粒子を含む。ローム粒子・焼土小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 21層 埋戻り赤土 ローム粒子・焼土粒子を含む。焼土小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 22層 埋戻り赤土 ローム小ブロックを含む。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 23層 埋戻り赤土 焼土粒子・焼土小ブロックを含む。しまりやや強。
- 24層 埋戻り赤土 ローム粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 25層 埋戻り赤土 灰を含む。ローム粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 26層 赤茶褐色土 焼土粒子・焼土小ブロックを含む。しまり強。
- 27層 埋戻り赤土 ローム小ブロックを含む。ローム粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 28層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 29層 赤褐色土 焼土粒子を含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 30層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
- 31層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
- 32層 埋戻り赤土 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。しまりやや強。
- 33層 埋戻り赤土 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を含む。しまり強。
- 34層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む。しまり中。
- 35層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む。しまり中。
- 36層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む。しまり強。
- 37層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・焼土小ブロックを塊状に含む。しまりやや強。
- 38層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む。しまり強。
- 39層 埋戻り赤土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。

炉跡



- 1層 埋戻り赤褐色土 ローム粒子・焼土粒子・灰化焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 2層 赤褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 3層 埋戻り赤褐色土 ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 4層 埋戻り赤褐色土 ローム粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 5層 埋戻り赤褐色土 ローム粒子を含む。灰化焼土粒子・焼土粒子を塊状に含む。しまり強。
- 6層 近い埋戻り赤褐色土 ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 7層 埋戻り赤褐色土 ローム粒子を含む。しまり強。

埋裏



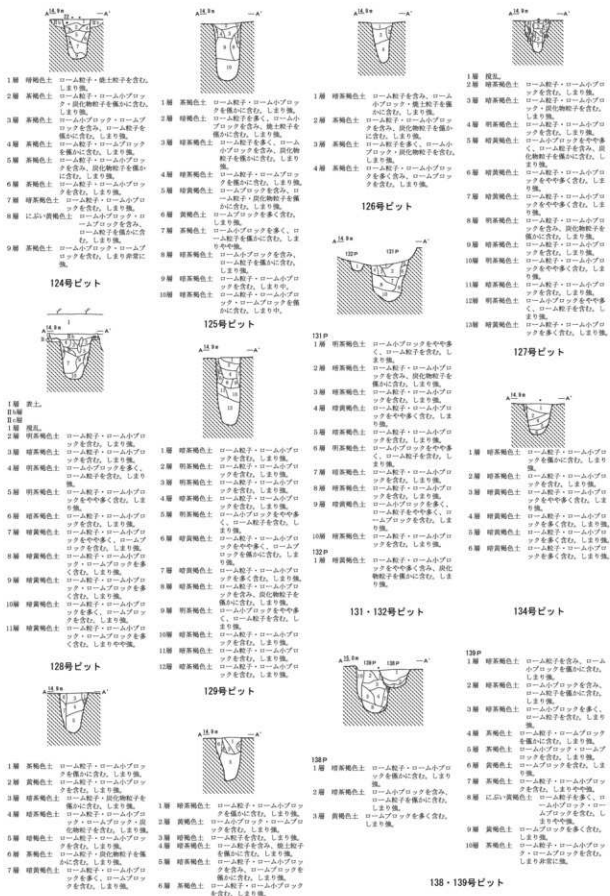
第6図 186号住居跡炉跡・埋裏(1/30)











第10図 186号住居跡ピット土層断面4(1/60)



第11図 186号住居跡ピット土層断面5(1/60)

[所見] 遺構東側を大きく壊されており、炉床部分は検出されなかったが、切り合う遺構に比して焼土粒子の混入が顕著であったため炉跡と認識した。

#### (4) 土坑

##### 776号土坑

**遺構** (第15図、第6表)

[位置] (D-7) グリッド。

[検出状況] 21Pに切られる。

[構造] 平面形：円形。規模：径1.03m/深さ31cm。壁：東側はなだらかに、西側は急斜に立ち上がる。

[覆土] 5層(1~5層)に分層された。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、縄文時代と思われる。

##### 777号土坑

**遺構** (第15図、第6表)

[位置] (C-7) グリッド。

[検出状況] 単独で検出された。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸0.77m/短軸0.58m/深さ26cm。壁：なだらかに立ち上がる。長軸方位：N-14°-E。

[覆土] 3層(2~4層)に分層された。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、縄文時代と思われる。

遺構名	位置	平面形	規模 (cm)			覆土及び特徴等	主な遺物
			長軸	短軸	深さ		
39 P	(D-5)G	楕円形	43	34	60	2層	なし
41 P	(D-5)G	不整形	44	不明	66	10層/42 Pに切られる/43Pと新旧不明	なし
42 P	(D-5)G	不整形	53	48	81	9層/41Pを切る	なし
43 P	(D-5)G	隅丸方形	39	34	67	9層/41Pとの新旧不明	なし
44 P	(D-5)G	隅丸方形	不明	59	61	8層/56Pに切られる/59Pとの新旧不明	なし
45 P	(D-5)G	隅丸長方形	47	38	32	3層/46Pを切る	なし
46 P	(D-5)G	楕円形	47	38	32	3層/46Pを切る	なし
47 P	(D-5)G	楕円形	50	43	56	7層/780D・55Pに切られる/48・58Pに切られる	なし
48 P	(D-5)G	円形	不明	30	40	4層/47Pに切られる/58Pを切る	なし
49 P	(D-5)G	不整形	43	32	84	7層/51Pに切られる	なし
50 P	(D-5)G	円形	57	56	78	7層/51Pを切る	なし
51 P	(D-5)G	円形	42	40	77	単層: ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調/50Pに切られる/49Pを切る	なし
52 P	(C-4・5)G	円形	58	58	96	8層/54Pを切る/53Pとの新旧不明	なし
53 P	(C-4・5)G	円形か	27	不明	52	単層: ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗茶褐色土を基調/52Pとの新旧不明	なし
54 P	(C-4・5)G	楕円形	43	不明	66	6層/52Pに切られる	なし
55 P	(D-5)G	円形	55	54	25	4層/47・56・58Pを切る	なし
56 P	(D-5)G	楕円形か	66	不明	34	4層/55Pに切られる/44Pを切る	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点
57 P	(D-5)G	楕円形	69	62	85	9層/803・804Dを切る	なし
58 P	(D-5)G	円形か	不明	不明	30	単層: ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗茶褐色土を基調/47・48・55Pに切られる	石器1点(剥片)
59 P	(D-5)G	楕円形	32	不明	31	単層: ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調/44Pとの新旧不明	なし
60 P	(D-5)G	楕円形	73	71	84	10層/64Pを切る	なし
61 P	(C-3)G	円形か	38	不明	24	単層: ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土	後期の土器片1点
62 P	(C-3)G	楕円形か	不明	不明	16	単層: ローム小ブロックを含み、ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土	なし
63 P	(C-4)G	円形	34	33	16	単層: ローム小ブロックを含み、ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土	なし
64 P	(C-5)G	楕円形か	38	36	95	60Pに切られる/804Dと接する/土層注記なし	なし
65 P	(C-4)G	隅丸方形	45	45	85	7層	なし
66 P	(C-5)G	隅丸方形	29	26	18	単層: ローム小ブロックを含み、ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む暗茶褐色土	なし
67 P	(C-4)G	円形	54	54	64	7層/783Dを切る	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点
68 P	(C-4)G	円形か	不明	40	25	3層/783Dに切られる	なし
69 P	(D-4)G	楕円形	51	43	23	6層	なし
70 P	(D-4)G	楕円形	不明	39	72	3層/71Pを切る/調査区外へ続く	なし
71 P	(D-4)G	不整形	51	不明	85	12層/70Pに切られる	なし
72 P	(C-4)G	円形	39	38	33	783Dに切られる/土層注記なし	なし
73 P	(D-4)G	不整形	65	54	82	11層/74Pを切る	石器1点(石皿)
74 P	(D-4)G	円形か	不明	41	70	4層/73Pに切られる/75Pを切る	なし
75 P	(D-4)G	不整形	56	42	97	5層/74Pに切られる	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点
76 P	(D-5)G	円形	56	52	56	11層/77Pを切る	なし
77 P	(D-5)G	楕円形か	不明	39	48	4層/76Pに切られる	なし
98 P	(C-4)G	不整形	47	不明	64	9層/99Pを切る/807Dとの新旧不明	後期前葉(堀之内1式)の土器片2点
99 P	(C-4)G	不整形	不明	34	22	ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗茶褐色土を基調とし、下層は暗黄褐色/98Pに切られる/106Pを切る	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点
100 P	(C-4)G	不整形	68	65	95	8層/102Pを切る	なし
101 P	(C-3)G	不整形	58	50	97	3層	なし
103 P	(C-3)G	円形	75	66	81	10層/790Dを切る	縄文時代後期前葉(堀之内1式)～後期中葉(加曾利B1式)の土器片3点
104 P	(D-4)G	不整形	不明	61	95	12層/105Pを切る	石器1点(石鏝)
105 P	(D-4)G	楕円形か	不明	不明	87	ローム小ブロックを多く含み、ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調/104Pに切られる	なし

第3表 186号住居跡ピット一覧(1)

遺構名	位置	平面形	規模 (cm)			覆土及び特徴等	主な遺物
			長軸	短軸	深さ		
106 P	(D-4)G	不明	不明	不明	不明	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土/98・99Pに切られる	なし
107 P	(D-4)G	円形	63	不明	130	9層/調査区外へ続く	なし
108 P	(C-3)G	円形	67	66	94	12層/790Dを切る	石器1点(鉄石)
109 P	(C-4)G	不整形	37	25	46	4層	なし
110 P	(D-3)G	円形	76	不明	81	10層/111Pを切る	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点(蓋)
111 P	(D-3)G	不明	不明	不明	77	110Pに切られる/土層往記なし	なし
112 P	(D-4)G	不整形	48	43	41	4層	なし
113 P	(C-4)G	不整形	72	53	107	11層/100Pとの新旧不明	なし
114 P	(D-4)G	隅丸方形	45	42	72	6層	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点/後期中葉(加曾利B式)の土器片1点
115 P	(C-4)G	不整形	55	51	47	3層/792Dを切る	後期前葉(堀之内1式)の土器片2点
117 P	(D-4)G	円形	28	28	15	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土	なし
119 P	(D-3)G	隅丸長方形	58	49	75	10層	後期前葉(堀之内2式)の土器片1点
121 P	(C-4)G	不整形	30	25	12	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土	なし
122 P	(D-4)G	円形	29	29	18	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土	なし
123 P	(C-4)G	隅丸長方形	55	42	58	9層/794Dを切る	なし
124 P	(C-4)G	円形	46	43	54	9層	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点
125 P	(C-4)G	楕円形	55	49	92	10層/794Dを切る	なし
126 P	(D-3・4)G	楕円形	41	35	65	4層/793Dを切る	なし
127 P	(D-3)G	隅丸方形	37	34	51	12層/	なし
128 P	(D-4)G	楕円形か	不明	50	64	11層/調査区外へ続く	なし
129 P	(C-3・4)G	隅丸方形	38	35	106	12層	なし
130 P	(C-4)G	楕円形	52	44	52	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土/115P・792Dに切られる	なし
131 P	(D-3)G	楕円形	61	43	66	10層/791Dに切られる	後期の土器片1点
132 P	(D-3)G	楕円形	24	21	20	単層：ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含み、炭化物粒子を僅かに含む暗黄褐色土/791Dに切られる	なし
133 P	(D-3)G	円形か	42	17	51	上層はローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調	なし
134 P	(B-4)G	楕円形か	55	45	55	6層	なし
135 P	(B-4)G	円形	47	44	41	7層/801Dを切る	後期前葉(堀之内1式)の土器片1点
136 P	(D-3)G	不整形	44	41	64	7層	なし
137 P	(D-2・3)G	楕円形	42	36	68	6層	なし
138 P	(D-3)G	楕円形	67	不明	27	3層/139Pを切る	なし
139 P	(D-3)G	円形	56	不明	72	10層/138Pに切られる/143Pを切る	後期の土器片1点
142 P	(D-3)G	円形か	77	不明	56	11層/調査区外へ続く	後期前葉(堀之内1式)の土器片5点
143 P	(D-3)G	円形	60	不明	52	9層/139Pに切られる	なし
145 P	(D-4)G	楕円形	35	30	35	単層：ローム小ブロックを多く含み、ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土	なし
146 P	(C-4)G	楕円形	45	36	84	3層	なし

第3表 186号住居跡ピット一覧(2)

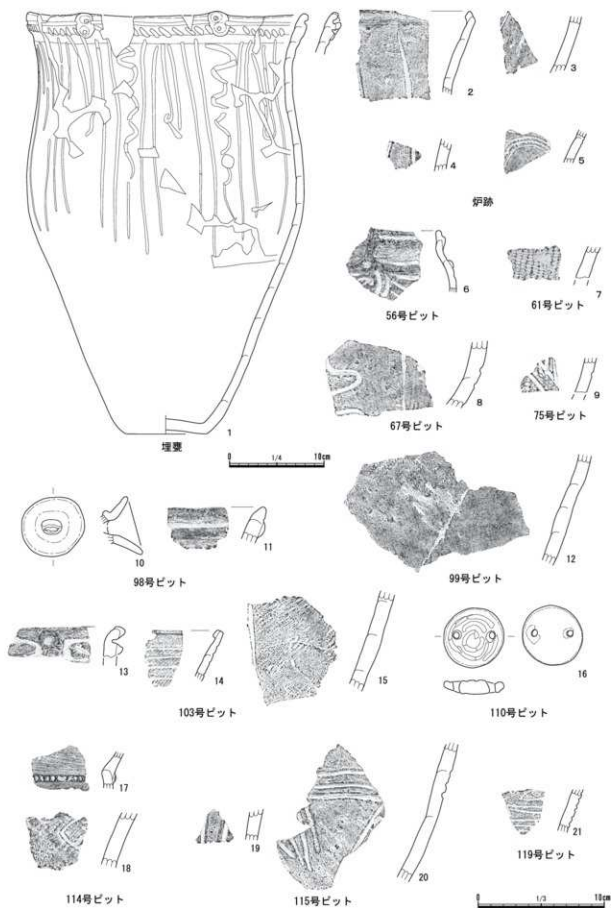
## 780号土坑

遺 構 (第15図、第6表)

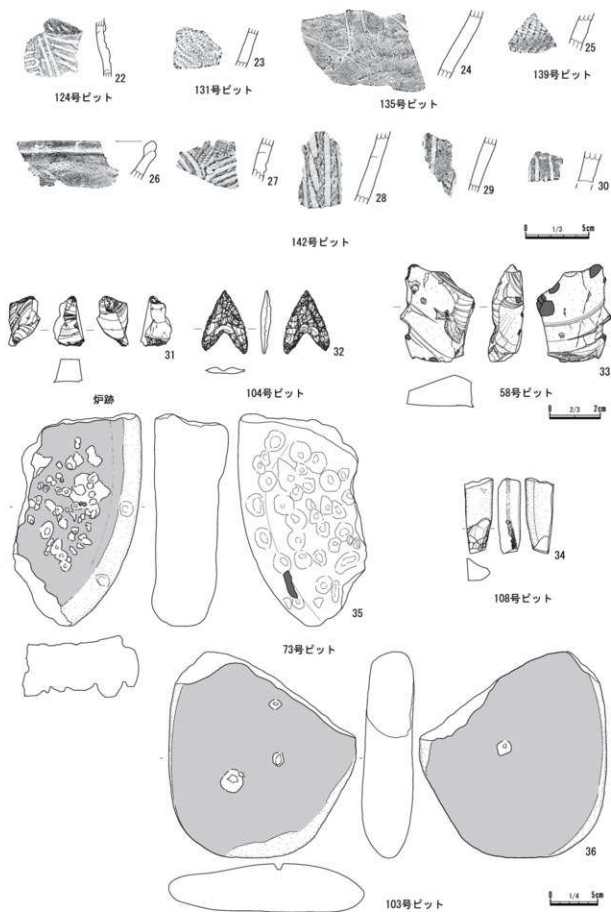
[位置] (D-5)グリッド。

[検出状況] 781D・46Pに切られ、47Pを切る。

[構造] 平面形：台形。規模：長軸1.18m/短軸1.17m/深さ26cm。壁：平坦な坑底から、やや急角度で立ち上がる。長軸方位：N-68°-W。



第12図 186号住居跡出土遺物1(1/4・1/3)



第13図 186号住居跡出土遺物2 (1/3・2/3・1/4)

縄文番号 図版頁次	出土位置	部位	文様・特徴など	色 調	時期・型式	胎土混入物					備 考
						石	角	礫	砂	他	
第12図1 図版13-1	埋裏	口縁 ～底	円形刺突を伴う8字状小突起/口縁外周に沈線、その下をやや肥厚させ斜位の切み/沈線による懸垂文・蛇行する懸垂文/口径29.6・器高44.7cm	橙色2.5YR6/8を基調とし、深灰の黒色斑あり	縄文時代後期前葉(堀之内1式)		○	○			
第12図2 図版13-2	伊勢	口縁	口縁部内径/沈線による懸垂文	にぶい・褐7.5YR6/3	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○	○	○			
第12図3 図版13-3	伊勢	胴	沈線	にぶい・黄橙10YR7/2	縄文時代後期前葉(堀之内1式)		○		○		
第12図4 図版13-4	伊勢	胴	縄文L/沈線	褐灰10YR4/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)				○		磁石に付く
第12図5 図版13-5	伊勢	胴	三本単位の沈線による弧線文	浅黄橙7.5YR8/3	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○			○		内面黒色
第12図6 図版13-6	56 P	胴	小型深鉢/頸部無文/口縁外周に沈線/8字状貼付による小突起/沈線による弧線文	にぶい・黄橙10YR6/4	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○		○	○		
第12図7 図版13-7	61 P	胴	縄文LR	浅黄橙10YR8/3	縄文時代後期				○		
第12図8 図版13-8	67 P	胴	沈線による懸垂文・蛇行懸垂文	にぶい・橙5YR6/4	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○	○	○			
第12図9 図版13-9	75 P	胴	沈線による懸垂文・斜行文	褐灰10YR4/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○			○		
第12図10 図版13-10	98 P	口縁	漏斗状の突起	橙5YR6/6	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○			○		
第12図11 図版13-11	98 P	口縁	口縁部肥厚しその上部外周に沈線	にぶい・橙5YR7/4	縄文時代後期前葉(堀之内1式)		○		○		
第12図12 図版13-12	99 P	胴	器糸文R	にぶい・橙7.5YR6/4	縄文時代後期前葉(堀之内1式か)						
第12図13 図版13-13	103 P	口縁	口縁外周に沈線区画し区画内に刺突文/区画と区画の間に8字状の円形刺突文	橙5YR6/6	縄文時代後期前葉(堀之内1式)		○	○			
第12図14 図版13-14	103 P	口縁	口縁部内面肥厚/縄文LRと沈線による傾位の帯状文	黒7.5YR2/1	縄文時代後期前葉(堀之内2式)～後期中葉(加曾利B1式)	○			○		
第12図15 図版13-15	103 P	胴	縄文LR/沈線による懸垂文	褐灰10YR4/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)				○		内面にぶい・黄橙内面約難着しい
第12図16 図版13-16	110 P	蓋	紐通し孔と思われる穿孔2か所/穿孔部表面内側・裏面外側に擦痕/同心円状の沈線文	黒10YR2/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○	○		○		内面灰白色
第12図17 図版13-17	114 P	頸	切みを伴う細線文/書き状の沈線文	黒褐5YR3/1	縄文時代後期中葉(加曾利B2式)		○		○		
第12図18 図版13-18	114 P	胴	縄文LR/沈線	暗赤褐5YR3/3	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○		○	○		内面黒色
第12図19 図版13-19	115 P	胴	沈線による懸垂文	褐灰10YR5/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○	○		○		
第12図20 図版13-20	115 P	胴	三本単位の沈線による懸垂文・斜行文	褐灰5YR4/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)				○		内面にぶい・橙色
第12図21 図版13-21	119 P	胴	縄文LR圧痕と沈線によるX字状文	橙2.5YR6/6	縄文時代後期中葉(加曾利B3式)			○	○		
第13図22 図版13-22	124 P	胴	切みを伴う隆帯/3～4本単位の沈線による懸垂文・斜行文	褐灰5YR4/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)	○			○		内面にぶい・橙色
第13図23 図版13-23	131 P	胴	縄文LR	にぶい・橙7.5YR7/4	縄文時代後期				○		
第13図24 図版13-24	135 P	胴	沈線	黒褐10YR3/2	縄文時代後期前葉(堀之内1式)				○		内面にぶい・橙色
第13図25 図版13-25	139 P	胴	縄文LR	暗赤灰2.5YR3/1	縄文時代後期	○			○		内面にぶい・黄橙色
第13図26 図版13-26	142 P	口縁	口縁部内径/外周に沈線	褐灰5YR4/1	縄文時代後期前葉(堀之内1式)				○		

● 角：角閃石・輝石 〇：磁石 砂：砂粒 白：白色粘土

第4表 186号住居跡出土土器一覽(1)



検出番号 図版目次	出土位置	部位	文様・特徴など	色 調	時期・型式	胎土混入物					備 考
						石	角	礫	砂	他	
第13図27 図版13-27	142 P	胴	縄文LR/3~4本単位の沈線による斜行文・弧線文	灰褐色 7.5YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)					○	内面にふい・褐色
第13図28 図版13-28	142 P	胴	縄文LR/縦位沈線間に斜位の短い沈線を充填	褐色 10YR5/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)					○	内面にふい・赤褐色
第13図29 図版13-29	142 P	胴	縄文LRか/沈線による懸垂文	にふい・褐色 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○	○		
第13図30 図版13-30	142 P	胴	沈線による懸垂文	赤褐色 2.5YR4/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)					○	磁石に付く

● 角：角閃石・輝石 濃：細礫 砂：砂粒 白：白色粒子

第4表 186号住居跡出土土器一覽(2)

検出番号 図版番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	特 徴
第13図31 図版14-1-31	跡跡	楔形石器	黒曜石	20.1	12.6	12.7	2.4	完形/上下両端に潰れ状の微細斜離面あり/上下方向斜離面
第13図32 図版14-1-32	104 P	石 錘	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.1	完形/凹基無呈/押圧剥離による整形/両面とも斜離面で覆われ、素材面は観察できない
第13図33 図版14-1-33	58 P	剥 片	黒曜石	39.0	29.9	14.4	13.9	上端部を欠損/背面に原離面
第13図34 図版14-1-34	108 P	巖 石	砂 岩	80.0	30.0	24.0	90.0	上下両端、左半分を欠損/右側縁に敲打痕・微細斜離面/正面に右横からの斜離面
第13図35 図版14-1-35	73 P	石 皿	安山岩	224.9	136.4	81.3	2590.1	大部分を欠損しており、胴縁の一部のみ/使用面は研磨される/表裏面に蝕の巣状の窪み
第13図36 図版14-1-36	103 P	石 皿	花崗岩	218.3	198.4	55.9	3527.0	上端部を欠損/表裏面に研磨/上端部の欠損面も僅かに研磨される/表裏面に窪み

第5表 186号住居跡出土石器一覽

[覆 土] 14層(2~15層)に分層された。

[遺 物] 前期後葉の諸磯c式土器の破片1点が出土した。

[時 期] 前期後葉(諸磯c式期)。

[遺 物] (第19図1、図版14-2-1、第7表)

[土 器] (第19図1、図版14-2-1、第7表)

1は諸磯c式である。

### 781号土坑

[遺 構] (第15図、第6表)

[位 置] (D-5)グリッド。

[検出状況] 780 Dを切る。

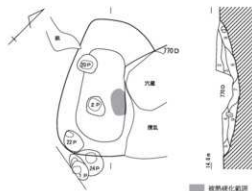
[構 造] 平面形：台形。規模：長軸0.86 m/短軸0.78 m/深さ17 cm。壁：緩やかに立ち上がる。

長軸方位：N-28°-W。

[覆 土] 3層(1~3層)に分層された。

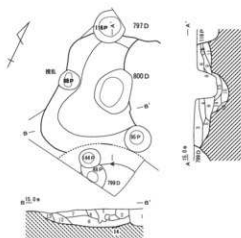
[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。



- 1層 埋土
- 2層 赤褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を含み、ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 4層 暗茶褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む。しまり強。
- 5層 赤褐色土 ローム粒子を含み、炭化物粒子・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 6層 赤褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含み、ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 7層 におい-黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・硬化ロームブロック・焼土粒子を含む。しまり強。
- 8層 赤褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 9層 赤褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロック・硬化ロームブロック・焼土粒子を含む。しまり強。

17号炉穴



- 1層 埋土
- 2層 赤褐色土 ローム粒子・焼土粒子を多く含む。しまり強。
- 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。しまり強。
- 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む。しまり強。
- 5層 赤褐色土 焼土粒子を含み、ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
- 6層 赤褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。ローム小ブロックを含む。しまり強。
- 7層 暗茶褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を含む。しまり強。
- 8層 赤褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロック・焼土粒子を含む。しまり強。
- 9層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 10層 赤褐色土 焼土粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
- 11層 黄褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 12層 におい-黄褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
- 13層 赤褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり強。
- 14層 黄褐色土 ローム小ブロックを含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
- 15層 赤褐色土 ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 16層 黄褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム小ブロックを含む。しまり強。

18号炉穴

0 1/80 2m

第14図 炉穴(1/60)

## 782号土坑

遺構 (第15図、第6表)

[位置] (B-4・5) グリッド。

[検出状況] 東側上部を774 Dに切られ、西側は底部まで攪乱に壊される。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸0.95m/短軸0.83m/深さ17cm。壁：急角度で立ち上がる。

長軸方位：N-S。

[覆土] 3層(1~3層)に分層された。

[遺物] 後期の粗製土器が1点出土した。

[時期] 後期。

遺物 (第19図1、図版14-2-1、第7表)

[土器] (第19図1、図版14-2-1、第7表)

1は後期の粗製土器である。

## 783号土坑

遺構 (第15図、第6表)

[位置] (C-4) グリッド。

[検出状況] 67・68・72 Pと重複する。南西側は攪乱を受ける。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸 不明（現存値 1.30 m）／短軸 0.88 m／深さ 28 cm。壁：急角度で立ち上がる。長軸方位：N-47°-E。

[覆土] 15層（2～16層）に分層された。

[遺物] 後期前葉堀之内式土器の深鉢の破片が出土した。

[時期] 後期前葉（堀之内1式期）。

[遺物]（第19図1～4、図版14-2-1～4、第7表）

[土器]（第19図1～4、図版14-2-1～4、第7表）

1～4は堀之内1式期の深鉢である。

### 785号土坑

[遺構]（第15図、第6表）

[位置]（C-2）グリッド。

[検出状況] 単独で検出された。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 0.78 m／短軸 0.52 m／深さ 25 cm。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-16°-E。

[覆土] 6層（2～7層）に分層された。

[遺物] 後期の土器片が出土した。

[時期] 後期。

[遺物]（第19図1、図版14-2-1、第7表）

[土器]（第19図1、図版14-2-1、第7表）

1は後期の深鉢と思われる。型式名は不明である。

### 786号土坑

[遺構]（第16図、第6表）

[位置]（C-4）グリッド。

[検出状況] 788 D・102 Pを切る。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 1.21 m／短軸 0.85 m／深さ 15 cm。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-43°-E。

[覆土] 9層（1～9層）に分層された。

[遺物] 後期前葉堀之内1・2式、中葉の加曾利B1式土器が出土したが、主体となるものは堀之内1式であった。

[時期] 後期前葉（堀之内1式期）。

[遺物]（第19図2～8、第20図1、図版15、第7表）

[土器]（第19図2～8、第20図1、図版15-1～8、第7表）

1は堀之内1式の大型深鉢である。復元口径38.5 cm、復元現器高59.5 cm。無文の頸部が外反し、胴部は縄文LR地文に沈線による渦巻文、懸垂文を施文する。懸垂文は直線・弧線・蛇行線で構成される。

2～5は堀之内1式、6・7は堀之内2式、8は加曾利B1式の土器片である。

## 787号土坑

**遺構** (第16図、第6表)

**位置** (C・D-3) グリッド。

**検出状況** 単独で検出。

**構造** 平面形：円形。規模：径0.9m／深さ44cm。壁：急角度で直線的に立ち上がる。

**覆土** 7層(1～7層)に分層された。

**遺物** 後期前葉の堀之内1・2式土器、石器(敲石)、炭化種実が出土した。炭化種実の自然科学分析の結果は、付編(103ページ)を参照。

**時期** 後期前葉(堀之内2式期)。

**遺物** (第21図1～15、図版16-1～15、第7・8表)

**土器** (第21図1～13、図版16-1-13、第7表)

1～7は堀之内1式、8～12は堀之内2式、13は後期の網代痕を持つ底部片である。

**石器** (第20図14・15、図版16-14・15、第8表)

14・15は砂岩製の敲石である。

## 788号土坑

**遺構** (第16図、第6表)

**位置** (C-4) グリッド。

**検出状況** 786Dに切られる。

**構造** 平面形：楕円形か。規模：長軸不明(現存値0.70m)／短軸0.57m／深さ27cm。壁：丸みを持って急角度で立ち上がる。長軸方位：N-S。

**覆土** 2層(1・2層)に分層された。

**遺物** 堀之内1式土器片が出土した。

**時期** 後期前葉(堀之内1式期)。

**遺物** (第19図1～5、図版16-1～5、第7表)

**土器** (第19図1～5、図版16-1～5、第7表)

1～4は堀之内1式の深鉢、5は後期の浅鉢である。

## 789号土坑

**遺構** (第16図、第6表)

**位置** (C-4) グリッド。

**検出状況** 東側を攪乱される。

**構造** 平面形：不整形円形。規模：長軸0.81m／短軸0.73m／深さ70cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-S。

**覆土** 10層(1～10層)に分層された。

**遺物** 後期の土器片が出土した。

**時期** 後期。

**遺物** (第19図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

[土 器] (第19図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

1・2はいずれも無文で、後期の所産と思われるが型式不詳の土器片である。

### 790号土坑

[遺 構] (第16図、第6表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 103・108 Pに切られる。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 不明（現存値1.33 m）／短軸0.84 m／深さ21 cm。壁：丸みをもって立ち上がる。長軸方位：N-16°-E。

[覆 土] 6層（2～7層）に分層された。

[遺 物] 後期前葉の堀之内式2式の土器片2点が出土した。

[時 期] 後期前葉（堀之内2式期）。

[遺 物] (第19図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

[土 器] (第19図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

1・2は堀之内2式の土器片である。

### 791号土坑

[遺 構] (第16図、第6表)

[位 置] (D-3) グリッド。

[検出状況] 793 D・131・132 Pを切る。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.46 m／短軸0.68 m／深さ27 cm。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-37°-E。

[覆 土] 5層（1～5層）に分層された。

[遺 物] 後期前葉の堀之内1式土器の深鉢の破片2点が出土した。

[時 期] 後期前葉（堀之内1式期）。

[遺 物] (第21図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

[土 器] (第21図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

1・2は堀之内1式土器の深鉢の破片である。

### 792号土坑

[遺 構] (第16図、第6表)

[位 置] (C-4) グリッド。

[検出状況] 115 Pに切られ、130 Pを切る。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.13 m／短軸0.61 m／深さ 不明（現存値19 cm）。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-45°-W。

[覆 土] 4層（1～4層）に分層された。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] ピットとの切り合いから、186Jに関連すると考えられ、縄文時代後期（堀之内1式期）。

## 793号土坑

**遺 構** (第17図、第6表)

[位 置] (D-3・4) グリッド。

[検出状況] 791D・126Pに切られる。

[構 造] 平面形：方形。規模：長軸不明（現存値0.57 m）／短軸0.64 m／深さ24 cm。壁：急角度で立ち上がる。長軸方位：N-66°-W。

[覆 土] 5層（1～5層）に分層された。

[遺 物] 後期前葉の堀之内2式の土器片が出土した。

[時 期] 遺物は堀之内2式だが、遺構の切り合いから、後期前葉の堀之内1式期と考えられる。

**遺 物** (第21図1、図版14-2-1、第7表)

[土 器] (第21図1、図版14-2-1、第7表)

1は堀之内2式土器の深鉢の破片である。

## 794号土坑

**遺 構** (第17図、第6表)

[位 置] (C-4) グリッド。

[検出状況] 123・125 Pに切られる。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸不明（現存値1.16 m）／短軸0.95 m／深さ50 cm。壁：急角度で直線的に立ち上がる。長軸方位：N-38°-W

[覆 土] 14層（1～14層）に分層された。

[遺 物] 後期前葉の堀之内1式の土器片が比較的によく出土した。

[時 期] 後期前葉（堀之内1式期）。

**遺 物** (第22図、図版17-1、第7表)

[土 器] (第22図1～16、図版17-1-1～16、第7表)

1～15は堀之内1式、16は型式不詳の底部片である。

## 795号土坑

**遺 構** (第17図、第6表)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 単独での検出。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸0.52 m／短軸0.46 m／深さ14 cm。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-22°-E。

[覆 土] 単層。

[遺 物] 後期前葉の堀之内1式の土器片2点が出土した。

[時 期] 後期前葉（堀之内1式期）。

**遺 物** (第21図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

[土 器] (第21図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

1・2は堀之内1式土器の深鉢の破片である。

### 796号土坑

**遺構** (第17図、第6表)

[位置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 30Pを切る。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.61m/短軸1.28m/深さ13cm。壁：緩やかに立ち上がる。

長軸方位：N-78°-W。

[覆土] 7層(1~7層)に分層された。

[遺物] 後期前葉の堀之内1・2式土器片が3点出土した。

[時期] 後期前葉(堀之内2式期)。

**遺物** (第21図1~5、図版14-2-1~5、第7・8表)

[土器] (第21図1~3、図版14-2-1~3、第7表)

1・2は堀之内1式、3は堀之内2式の土器片である。

[石器] (第21図4・5、図版14-2-4・5、第8表)

4は頁岩の二次加工のある剥片、5は黒曜石の剥片である。

### 797号土坑

**遺構** (第17図、第6表)

[位置] (C-2) グリッド。

[検出状況] 800D・18FPとの切り合い不明。90・116Pに切られる。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.58m/短軸不明(現存値1.06m)/深さ29cm。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-74°-E。

[覆土] 単層。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

### 798号土坑

**遺構** (第17図、第6表)

[位置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 809Dを切る。147Pとの切り合いは不明。

[構造] 平面形：不整形。規模：長軸0.58m/短軸0.54m/深さ19cm。壁：丸みをもって緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-38°-E。

[覆土] 4層(1~4層)に分層された。

[遺物] 後期前葉の堀之内1式土器片2点が出土した。

[時期] 後期前葉(堀之内1式期)。

**遺物** (第23図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

[土器] (第23図1・2、図版14-2-1・2、第7表)

1・2は堀之内1式土器の深鉢の破片である。

## 799号土坑

**遺構** (第17図、第6表)

**位置** (D-2) グリッド。

**検出状況** 144・148・152Pに切られ、18FPを切る。

**構造** 平面形：円形か。規模：不明／深さ29cm。壁：丸みをもって立ち上がる。長軸方位：不明。

**覆土** 2層（1・2層）に分層された。

**遺物** 出土しなかった。

**時期** 覆土の観察から縄文時代と思われる。

## 800号土坑

**遺構** (第18図、第6表)

**位置** (C・D-2) グリッド。

**検出状況** 797D・18FPとの切り合い不明。

**構造** 平面形：楕円形。規模：長軸 不明（現存値1.36m）／短軸0.74m／深さ27cm。壁：全体に緩やかだが西側は急角度で立ち上がる。長軸方位：N-34°-W。

**覆土** 5層（2～6層）に分層された。

**遺物** 出土しなかった。

**時期** 覆土の観察から縄文時代と思われる。

## 801号土坑

**遺構** (第18図、第6表)

**位置** (B・C-4) グリッド。

**検出状況** 135Pに切られる。

**構造** 平面形：不整形円形。規模：径1.10m／深さ57cm。壁：急角度で立ち上がる。

**覆土** 3層（2～4層）に分層された。

**遺物** 後期前葉の堀之内1式土器の深鉢1点出土した。

**時期** 後期前葉（堀之内1式期）。

**遺物** (第23図1、図版14-2-1、第7表)

**土器** (第23図1、図版14-2-1、第7表)

1は堀之内1式土器の深鉢の破片である。

## 802号土坑

**遺構** (第18図、第6表)

**位置** (C-5) グリッド。

**検出状況** 803Dを切る。

**構造** 平面形：不整形円形。規模：長軸0.63m／短軸0.53m／深さ20cm。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-54°-W。



- [覆 土] 4層（1～4層）に分層された。  
[遺 物] 出土しなかった。  
[時 期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

### 803号土坑

- 遺 構**（第18図、第6表）  
[位 置]（C-5）グリッド。  
[検出状況] 802D・57Pに切られる。  
[構 造] 平面形：楕円形か。規模：長軸 不明（現存値0.58m）／短軸0.50m／深さ17cm。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：E-W。  
[覆 土] 3層（1～3層）に分層された。  
[遺 物] 出土しなかった。  
[時 期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

### 804号土坑

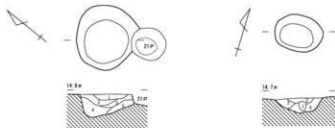
- 遺 構**（第18図、第6表）  
[位 置]（C-5）グリッド。  
[検出状況] 57Pに切られる。64Pとの切り合い不明。  
[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸0.64m／短軸 不明（現存値0.46m）／深さ33cm。壁：坑底は南側に偏り、南壁は垂直に近い。長軸方位：N-26°-W。  
[覆 土] 6層（1～6層）に分層された。  
[遺 物] 出土しなかった。  
[時 期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

### 805号土坑

- 遺 構**（第18図、第6表）  
[位 置]（D-5）グリッド。  
[検出状況] 単独で検出された。  
[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.00m／短軸0.80m／深さ47cm。壁：急角度で立ち上がる。長軸方位：N-40°-E  
[覆 土] 13層（2～14層）に分層された。  
[遺 物] 出土しなかった。  
[時 期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

### 806号土坑

- 遺 構**（第18図、第6表）  
[位 置]（D-5）グリッド。  
[検出状況] 単独で検出された。

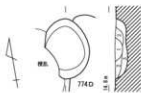


- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含む、粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む、しまりや中強。  
 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む、しまりや中強。  
 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む、しまり強。  
 5層 黄褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含む、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。

776号土坑

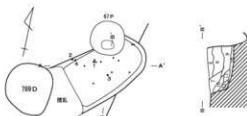
- 1層 褐色土  
 2層 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子を塊状に含む、しまりや中強。  
 3層 暗茶褐色土 ローム小ブロックを含む、ローム粒子・ロームブロックを塊状に含む、しまり強。  
 4層 近い黄褐色土 ロームブロックを含む、ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む、しまりや中強。

777号土坑



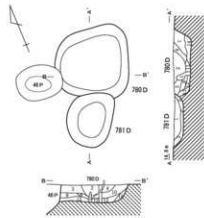
- 1層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を塊状に含む、しまり強。  
 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む、しまり強。  
 3層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを中や多く含む、しまり強。

774号土坑



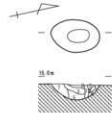
- 1層 褐色土  
 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を含む、しまり強。  
 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・粘土粒子を多く、ローム小ブロックを含む、しまり強。  
 4層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む、粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 5層 暗茶褐色土 ローム粒子・粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 6層 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む、ローム小ブロックを塊状に含む、しまり強。  
 7層 茶褐色土 ローム粒子・粘土粒子を多く含む、しまり強。  
 8層 暗茶褐色土 ローム粒子を含む、ローム小ブロック・炭化物粒子を塊状に含む、しまり強。  
 9層 茶褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム粒子・ロームブロック・粘土粒子を含む、しまり強。  
 10層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を含む、しまり強。  
 11層 茶褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム粒子・ロームブロックを含む、粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 12層 茶褐色土 ローム粒子を含む、ローム小ブロック・粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 13層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む、炭化物粒子・粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 14層 近い黄褐色土 ロームブロックを多く、ローム小ブロックを含む、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 15層 近い黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む、しまり強。  
 16層 黄褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム小ブロックを含む、しまり強。

782号土坑



- 780D  
 1層 褐色土  
 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む、粘土粒子を塊状に含む、しまりや中強。  
 3層 暗茶褐色土 ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 4層 茶褐色土 ローム粒子・粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 5層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 6層 暗茶褐色土 ローム粒子を含む、ローム小ブロックを塊状に含む、しまり強。  
 7層 茶褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含む、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 8層 茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む、しまり強。  
 9層 茶褐色土 ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 10層 茶褐色土 ローム粒子を含む、ロームブロックを塊状に含む、しまり強。  
 11層 暗茶褐色土 ローム小ブロック・ロームブロック・粘土粒子を含む、ローム粒子を塊状に含む、しまりや中強。  
 12層 近い黄褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含む、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 13層 黄褐色土 ローム小ブロックを含む、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 14層 黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む、しまり強。  
 15層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを塊状に含む、しまり強。  
 781D  
 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む、しまり強。  
 2層 暗茶褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを含む、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 3層 暗茶褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。

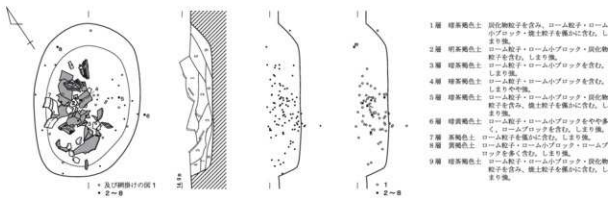
780・781号土坑



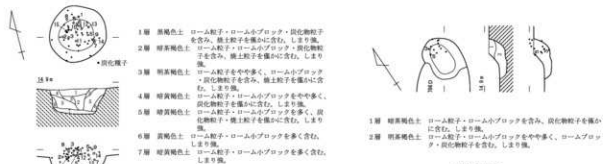
- 1層 暗茶褐色土 ローム粒子・粘土粒子を塊状に含む、しまり強。  
 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む、しまり強。  
 3層 茶褐色土 ローム粒子を塊状に含む、しまり強。  
 4層 暗茶褐色土 ローム粒子を含む、ローム小ブロックを塊状に含む、しまり強。  
 5層 近い黄褐色土 ローム粒子を含む、ローム小ブロックを塊状に含む、しまり強。  
 6層 暗茶褐色土 ローム小ブロックを含む、ローム粒子を塊状に含む、しまり強。

785号土坑

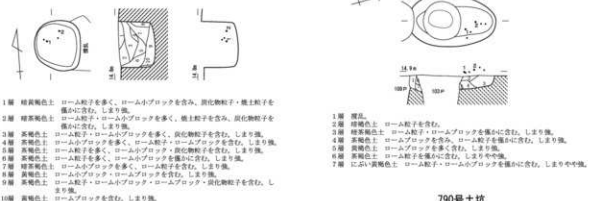
第15図 土坑1 (1/60)



786号土坑



787号土坑



788号土坑



789号土坑

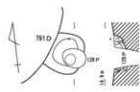


790号土坑



791号土坑

第16図 土坑2 (1/30・1/60)



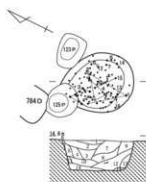
- 1層 濃い黄褐色土 ローム粒子を含む。しまり強。
- 2層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 3層 黄褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり中強。
- 4層 黄褐色土 ロームブロックを含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 5層 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。しまり強。

793号土坑



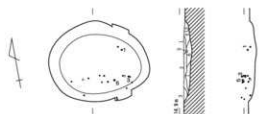
- 1層 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。

795号土坑



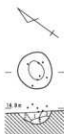
- 1層 暗黄褐色土 ローム小ブロックをやや多く。ローム粒子・炭化物粒子を含む。しまり強。
- 2層 暗黄褐色土 ローム小ブロックをやや多く。ローム粒子・炭化物粒子を含む。しまり強。
- 3層 暗黄褐色土 ローム小ブロックをやや多く。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり中強。
- 4層 明黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
- 5層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 6層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 7層 暗黄褐色土 ローム小ブロックをやや多く。ローム粒子・炭化物粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 8層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を塊状に含む。しまり強。
- 9層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。しまり強。
- 10層 暗黄褐色土 ローム小ブロックをやや多く。ローム粒子を含む。しまり強。
- 11層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く。ローム小ブロックを含む。しまり強。
- 12層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 13層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 14層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。

794号土坑



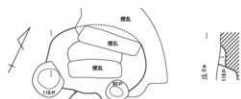
- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く。炭化物を含む。しまり強。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物を含む。しまり強。
- 3層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子をばらばらに含む。しまり強。
- 5層 ローム小ブロック。
- 6層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
- 7層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。

796号土坑



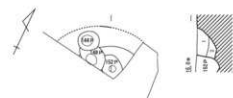
- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
- 3層 明黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く。ローム小ブロックを含む。しまり強。

798号土坑



- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く。焼土粒子を塊状に含む。しまり中。粘性あり。

797号土坑



- 1層 黄褐色土 焼土粒子を含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 2層 濃い黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を塊状に含む。しまり強。

799号土坑



第17図 土坑3(1/60)



- 1層 覆土。
- 2層 暗褐色土 焼土粒を含み、ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりりや中塊。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、ローム粒子を塊かに含む。しりりや中塊。
- 4層 暗褐色土 焼土粒を多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しりりや中塊。
- 5層 におい・黄褐色土 ローム小ブロックを含み、焼土粒を塊かに含む。しりり塊。
- 6層 におい・黄褐色土 焼土粒を含み、ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。

800号土坑



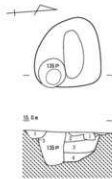
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロック・ロームブロックを塊かに含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 5層 におい・黄褐色土 ローム小ブロックを含み、ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。
- 6層 黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。

804号土坑



- 1層 覆土。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒を含み、塊かに含む。
- 3層 暗褐色土 ローム小ブロックを含み、ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 4層 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム小ブロックを含み、ローム粒子を塊かに含む。しりり塊。
- 5層 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム小ブロックを含み、ローム粒子を塊かに含む。しりり塊。
- 6層 黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。しりり塊。
- 7層 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム小ブロックを含み、ローム粒子を塊かに含む。しりり塊。

806号土坑



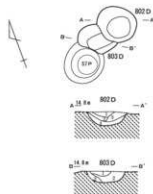
- 1層 覆土。
- 2層 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- 3層 明褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く含む。しりり塊。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを多く含む。しりり塊。

801号土坑



- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- 5層 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。しりり塊。
- 6層 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。しりり塊。

807・808号土坑

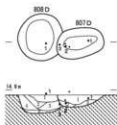


- A-A' 802D**
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含み、炭化植物粒を塊かに含む。しりり塊。
  - 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
  - 3層 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム小ブロックを含み、ローム粒子を塊かに含む。しりり塊。
  - 4層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- B-B' 803D**
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
  - 2層 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。ローム粒子を塊かに含む。しりり塊。
  - 3層 黄褐色土 ローム小ブロックを含む。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しりり塊。

802・803号土坑

- 1層 覆土。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- 5層 暗褐色土 炭化植物粒を含み、ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子を含む。しりりや中塊。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを塊かに含む。しりりや中塊。
- 8層 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム小ブロック・炭化植物粒を塊かに含む。しりりや中塊。
- 9層 暗褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む。しりりや中塊。
- 10層 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。ローム粒子を塊かに含む。しりりや中塊。
- 11層 黄褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム小ブロックを含む。しりり塊。
- 12層 明黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ローム小ブロックを含む。しりりや中塊。
- 13層 におい・黄褐色土 ローム小ブロックを含み、ローム粒子を塊かに含む。しりりや中塊。
- 14層 黄褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しりり塊。

805号土坑



- 809D**
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
  - 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
  - 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
- 809E**
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を塊かに含む。しりり塊。
  - 2層 暗褐色土 ローム粒子を塊かに含む。しりり塊。
  - 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
  - 4層 暗褐色土 ローム粒子を含み、ローム小ブロックを塊かに含む。しりり塊。
  - 5層 におい・黄褐色土 ローム小ブロックを含む。しりり塊。



- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しりり塊。

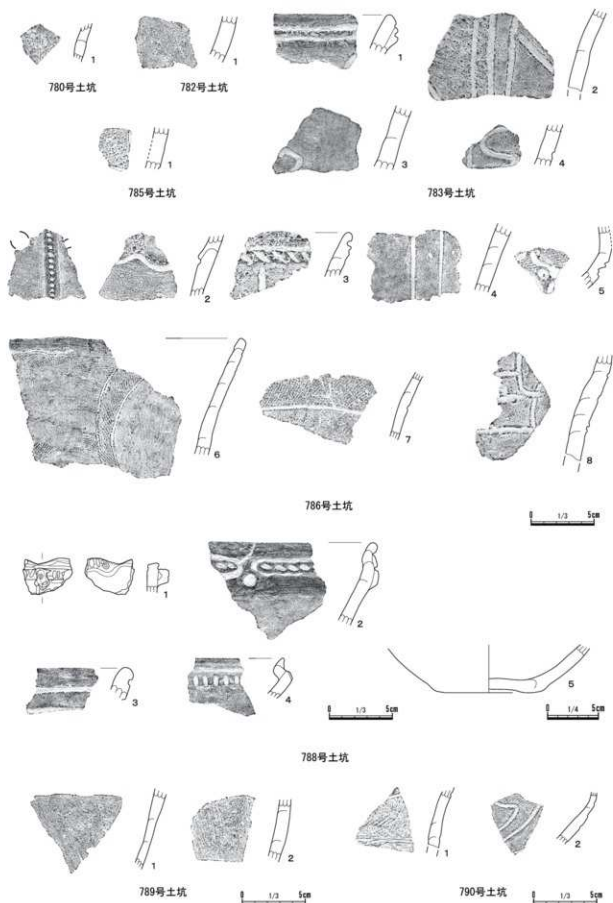
809号土坑



第18図 土坑4 (1/60)

遺構名	位置	平面形	規模 (m)			長軸方位	覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ				
776D	(D-7)G	円形	径1.03		31	—	5層/21Pに切られる	なし	縄文時代
777D	(C-7)G	楕円形	0.77	0.58	26	N 14° E	3層/単独で検出	なし	縄文時代
780D	(D-5)G	台形	1.18	1.17	26	N 68° W	14層/781D・46Pに切られ、47Pを切る	前期末葉(諸磯c式)土器片1点	縄文時代前期末葉(諸磯c式附か)
781D	(D-5)G	台形	0.86	0.78	17	N 28° E	3層/780Dを切る	なし	縄文時代
782D	(B-4-5)G	楕円形	0.95	0.63	17	N S	3層/崖削を774Dに西側を覆乱に切られる	粗製土器片1点	縄文時代後期
783D	(C-4)G	長方形	不明	0.88	28	N 47° E	15層/67・68・72Pとの新旧不明	後期前葉(堀之内1式)土器片4点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
785D	(C-2)G	楕円形	0.78	0.52	25	N 16° E	6層/単独で検出	後期土器片1点	縄文時代後期
786D	(C-4)G	楕円形	1.21	0.85	15	N 43° E	9層/788D・102Pを切る	後期前葉(堀之内1式)土器片5点/後期前葉(堀之内2式)土器片2点/後期中葉(加登利B1式)土器片1点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
787D	(C-D-3)G	円形	径0.90		44	—	7層/単独で検出	後期前葉(堀之内1・2式)土器片13点/石器2点	縄文時代後期前葉(堀之内2式期)
788D	(C-4)G	楕円形か	不明	0.57	27	N S	2層/786Dに切られる	後期前葉(堀之内1式)土器片5点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
789D	(C-4)G	不整形円形	0.81	0.73	70	N S	10層/東側を覆乱される/186Jよりも古い	後期土器片2点	縄文時代後期
790D	(C-3)G	楕円形	不明	0.84	21	N 16° E	6層/103・108Pに切られる	後期前葉(堀之内2式)土器片2点	縄文時代後期前葉(堀之内2式期)
791D	(D-3)G	楕円形	1.46	0.68	27	N 37° E	5層/793D・131・132Pを切る	後期前葉(堀之内1式)土器片2点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
792D	(C-4)G	楕円形	1.13	0.61	不明	N 45° W	4層/115Pに切られ、130Pを切る	なし	縄文時代
793D	(D-3-4)G	方形	不明	0.64	24	N 66° W	5層/791D・126Pに切られる	後期前葉(堀之内2式)土器片1点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
794D	(C-4)G	楕円形	不明	0.95	50	N 38° W	14層/123・125Pに切られる	後期前葉(堀之内1式)土器片16点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
795D	(C-3)G	楕円形	0.52	0.46	14	N 22° E	単層	後期前葉(堀之内1式)土器片2点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
796D	(B-3)G	楕円形	1.61	1.28	13	N 78° W	7層/30Pを切る	後期前葉(堀之内1式)土器片2点/後期前葉(堀之内2式)土器片2点/石器2点	縄文時代後期前葉(堀之内2式期)
797D	(C-2)G	楕円形	1.58	不明	29	N 74° E	単層/800D・18FPとの新旧不明/90・116Pに切られる	なし	縄文時代
798D	(C-3)G	不整形円形	0.58	0.54	19	N 38° E	4層/809Dを切る/147Pとの新旧不明	後期前葉(堀之内1式)土器片2点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
799D	(D-2)G	円形か	不明	不明	29	不明	2層/18FPを切る/144・148・152Pに切られる	なし	縄文時代
800D	(C-D-2)G	楕円形	不明	0.74	27	N 34° W	5層/797D・18FPとの新旧不明	なし	縄文時代
801D	(B-C-4)G	不整形円形	径1.10		57	N S	3層/135Pに切られる	後期前葉(堀之内1式)土器片1点	縄文時代後期(堀之内1式期)
802D	(C-5)G	不整形円形	0.63	0.53	20	N 54° W	4層/803Dを切る	なし	縄文時代
803D	(C-5)G	楕円形か	不明	0.50	17	E W	3層/802D・57Pに切られる	なし	縄文時代
804D	(C-5)G	楕円形	0.64	不明	33	N 26° W	6層/57Pに切られる/64Pに接する	なし	縄文時代
805D	(D-5)G	楕円形	1.00	0.80	47	N 40° E	13層/単独で検出	なし	縄文時代
806D	(D-5)G	楕円形	0.59	0.44	28	N 78° W	6層/単独で検出	なし	縄文時代
807D	(C-4)G	楕円形	0.76	0.48	17	N 76° E	3層/98Pとの新旧不明/808Dを切る	後期前葉(堀之内2式)土器片3点	縄文時代後期前葉(堀之内2式期)
808D	(C-4)G	円形	0.74	0.71	27	N S	5層/807Dに切られる	後期前葉(堀之内2式)土器片1点	縄文時代後期(堀之内2式期)
809D	(C-3)G	長方形	0.90	0.52	21	N 86° W	単層/798Dに切られる	後期前葉(堀之内1式)土器片8点/後期前葉(堀之内2式)土器片2点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)

第6表 縄文時代の土坑一覧



第19図 土坑出土遺物 I (1/4・1/3)

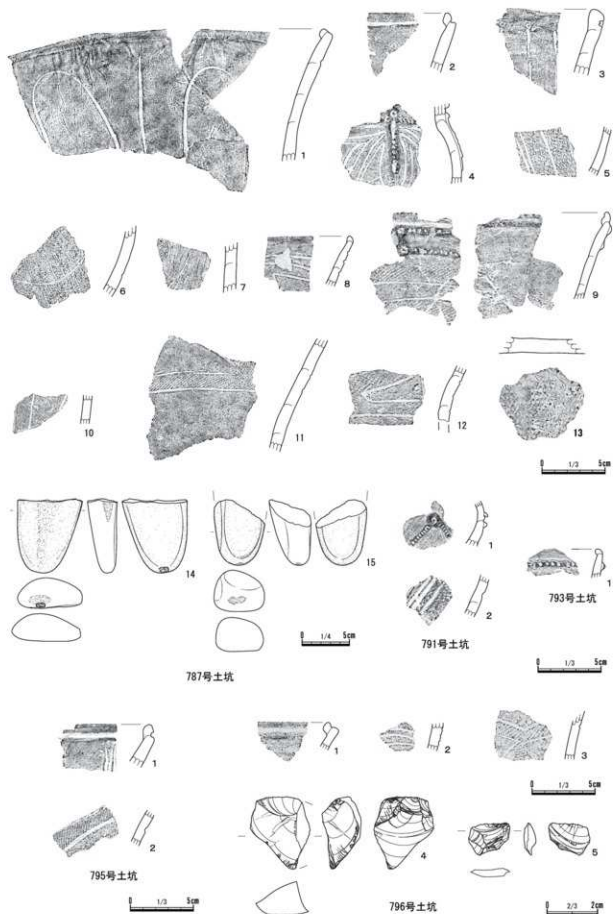


786 D

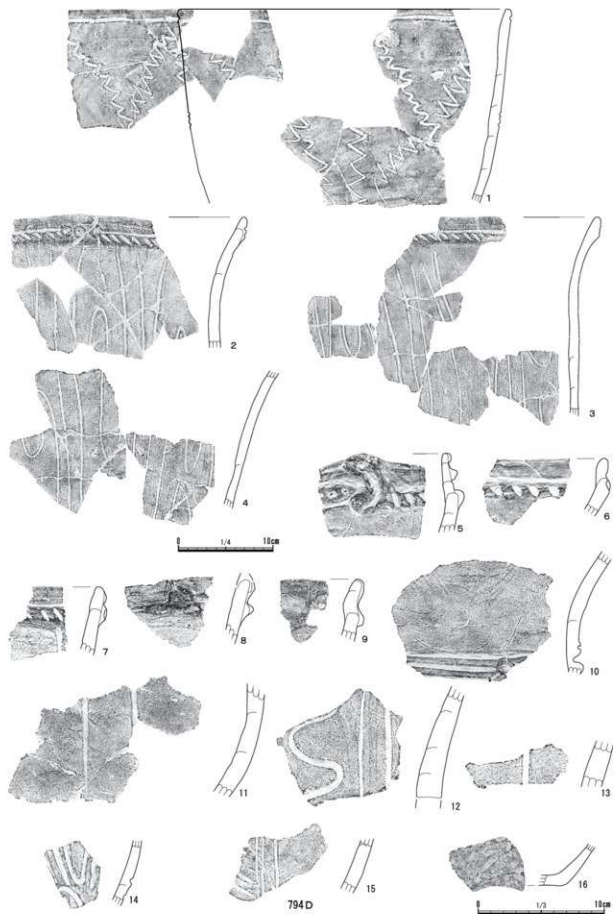


第20図 土坑出土遺物 2 (1/4)

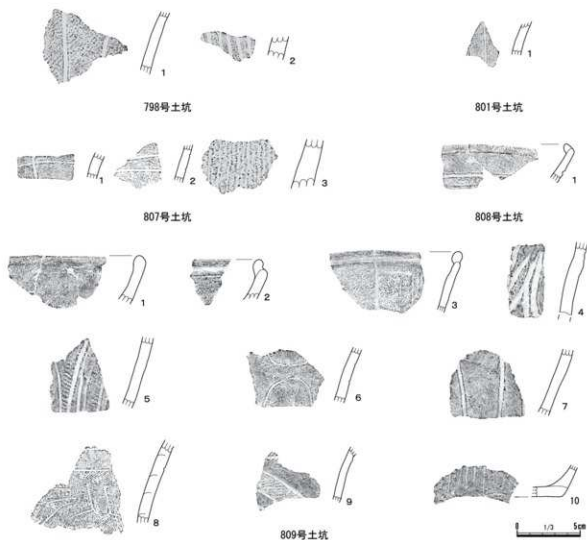




第21図 土坑出土遺物3(1/4・1/3・2/3)



第22図 土坑出土遺物4 (1/4・1/3)



第23図 土坑出土遺物5(1/3)

〔構造〕 平面形：楕円形。規模：長軸0.59 m／短軸0.44 m／深さ28 cm。壁：急角度で立ち上がる。

長軸方位：N-78°-W

〔覆土〕 6層（2～7層）に分層された。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 覆土の観察から縄文時代と思われる。

#### 807号土坑

〔遺構〕（第18図、第6表）

〔位置〕（C-4）グリッド。

〔検出状況〕 808Dを切る。98Pとの切り合いは不明。

〔構造〕 平面形：楕円形。規模：長軸0.76 m／短軸0.48 m／深さ17 cm。壁：丸みをもって立ち上がる。長軸方位：N-76°-E

〔覆土〕 3層（1～3層）に分層された。

検出番号 図版番号	出土遺構	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考
						石	角	礫	砂	
第19図1 図版14-2-1	780D	胴	半截竹管による集合沈線文	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代前期後葉 (器種c式)	○	○	○		磁石に付く
第19図1 図版14-2-1	782D	胴	無文	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期 (粗製土器)	○	○	○	白	チャートの細片を含む
第19図1 図版14-2-1	783D	口縁	断面三角状に口縁部厚厚/口縁部外面に2本の沈線文を巡らせる/植物圧痕か	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		
第19図2 図版14-2-2	783D	胴	沈線による懸垂文および斜行文	にぶい黒 7.5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		
第19図3 図版14-2-3	783D	胴	沈線による曲線文/煤状の付着物	灰褐 7.5YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		内面にぶい橙色
第19図4 図版14-2-4	783D	胴	沈線による曲線文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		
第19図1 図版14-2-1	785D	胴	縄文LR/沈線	灰褐 7.5YR4/2	縄文時代後期	○	○	○		内面劣化顕著
第20図1 図版15-1	786D	口縁～ 胴下部	口径39×視器高59.5cm/口縁部厚厚し沈線区画内に列点文/4単位の小突起に円形の刺突文/小突起下部から頸部にかけて貼付の懸垂文/頸部は外反し無文/頸部と胴部は2本の沈線では横/区画線上に円形の貼付文/胴部縄文LRに沈線による渦巻文、斜行文、懸垂文/地文の縄文は懸垂文隆部では太く、下部は細い、さらに下部は無文	暗赤灰 2.5YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○	色調は暗赤灰色から橙色まで変化に富む 内面は明赤褐色
第19図2 図版15-2	786D	口縁	小突起の2つの穿孔間から、刺みをもつ粘土細貼付による懸垂文/内面口縁部に沿った沈線	にぶい赤褐 2.5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		内面黒褐色
第19図3 図版15-3	786D	口縁	口縁に沈線を巡らせ、その下に刻み/沈線による懸垂文	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		チャート・砂岩の細礫を含む
第19図4 図版15-4	786D	胴	沈線による懸垂文	黒 2.5Y2/1	縄文時代後期前葉 (堀之内式)	○	○	○		磁石に付く/ チャート・砂岩の細礫を含む
第19図5 図版15-5	786D	胴	沈線区画に縄文LR/円形刺突文	褐灰 10YR5/1	縄文時代後期前葉 (堀之内式)	○	○	○		チャート・砂岩の細礫を含む
第19図6 図版15-6	786D	口縁	沈線による帯状の区画に縄文L/口唇部内面直下に浅い沈線を巡らせる	にぶい黄橙 10YR6/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)		○	○		チャートの細片を含む
第19図7 図版15-7	786D	胴	横帯状の沈線区画に縄文LR	浅黄橙 10YR8/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)		○	○		
第19図8 図版15-8	786D	胴	縦の区切り線からクランク状に繋がる横位の平行沈線文	黒 2.5Y2/1	縄文時代後期中葉 (加賀利B1式)	○	○	○		内面劣化顕著
第21図1 図版16-1	787D	口縁	沈線による懸垂文/内面口縁部に沿った浅い沈線	にぶい橙 7.5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		磁石に付く
第21図2 図版16-2	787D	口縁	口縁部内側/外面留曲部に沿った沈線	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○		○		内面黒褐色
第21図1 図版16-3	787D	口縁	口縁直下に円形刺突文を巡らせる/刺突文直下に沈線による懸垂文	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○		
第21図4 図版16-4	787D	胴	頸部に巡る刺みをもつ粘土細貼付、及び懸垂文/斜向する弧線文	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○		○		内面褐灰色
第21図5 図版16-5	787D	胴	縄文LR/沈線/煤状付着物	にぶい赤褐 5YR4/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○		
第21図6 図版16-6	787D	胴	縄文LRに、浅い沈線による曲線文	褐灰 10YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○		○	白	内面の劣化顕著
第21図7 図版16-7	787D	胴	沈線区画に縄文Lか?	灰褐 5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	白	内面にぶい橙色
第21図8 図版16-8	787D	口縁	沈線と縄文LRによる三角文?/口唇部内面に浅い沈線	灰黄褐 10YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○		
第21図9 図版16-9	787D	口縁	口縁下部に、刺みを持つ細線文を2本巡らせる/頸部に横位の帯縄文1段/8字状貼付文/口唇部内面に屈曲状に2本の浅い沈線	橙 2.5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○		磁石に付く
第21図10 図版16-10	787D	胴	斜行する帯縄文LR	灰褐 5YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○		○		チャートの細片を含む/内面明赤褐色

◎ 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 白：白色粘土

第7表 縄文時代の土坑出土土器一覽(1)

探検番号 図版番号	出土遺構	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	粘土混入物			備考
						石	角礫	砂	
第21図11 図版16-11	787D	胴	帯縄文LRによる横位区画と懸垂文?	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)		○	○	チャート・砂岩 の細礫を含む
第21図12 図版16-12	787D	胴	沈線区画に縄文LR	灰黄褐 10YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○		○	
第21図13 図版16-13	787D	底	網代文	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代後期			○	内面黒色
第19図1 図版16-1	788D	口縁	口縁外周に刻みをもつ細隆帯・8字状貼付文 /口縁内側に沈線/内面に円形刺突文	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	
第19図2 図版16-2	788D	口縁	口縁部内屈し、内面肥厚/口縁外周に貼付と 沈線による区画した中に列点文/円形刺突と 貼付による8字状文。但し貼付は剥落	黒褐 10YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)		○	○	内面灰黄褐色
第19図3 図版16-3	788D	口縁	口縁部外側に2本の沈線	橙 2.5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)		○	○	
第19図4 図版16-4	788D	口縁	浅鉢/口縁部内屈し、さらに上部は外屈/内 屈部外周に刻み	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○	
第19図5 図版16-5	788D	底	無文/やや上げ底状	にぶい橙 7.5YR6/4	縄文時代後期		○	○	内面にぶい黄橙 色
第19図1 図版14-2.1	789D	胴	無文/内面に赤色顔料付着か	黒褐 10YR3/1	縄文時代後期	○		○	内面にぶい橙 色
第19図2 図版14-2.2	789D	胴	無文/内面に炭化物付着	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期		○	○	チャート・砂岩 の細礫を含む
第19図1 図版14-2.1	790D	胴	縄文LR/横位の沈線文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○	内面灰白色
第19図2 図版14-2.2	790D	胴	縄文LRを伴う沈線による区画文	黒褐 5YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○		○	内面黒色
第21図1 図版14-2.1	791D	胴	刻みをもつ粘土細による斜位の懸垂文/円形 の貼付文	黒褐 10YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	
第21図2 図版14-2.2	791D	胴	縄文LR/沈線による懸垂文	褐灰 10YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)		○	○	内面にぶい黄橙 色
第21図1 図版14-2.1	793D	口縁	口縁外周に刻みをもつ細線文/口唇部直下内 面に沈線	灰褐 5YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○	磁石に付く
第22図1 図版17-1.1	794D	口縁～ 胴上部	口縁部外周に沈線/沈線による顕帯状の懸垂 文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○	
第22図2 図版17-1.2	794D	口縁	外反し口縁部肥厚/肥厚部外周に沈線/2つ 並んだ円形刺突文/沈線より下部に斜位の刻 み/沈線による懸垂文	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○	磁石に付く
第22図3 図版17-1.3	794D	口縁～ 胴上部	外反し口縁部肥厚/肥厚部外周に沈線/沈線 より下部に斜位の刻み/沈線による懸垂文	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○	磁石に付く
第22図4 図版17-1.4	794D	胴	沈線による懸垂文	黒褐 7.5YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○	磁石に付く
第22図5 図版17-1.5	794D	口縁	貼付による逆C字状の小突起/口縁直下の隆 帯と沈線による区画内に円形刺突文/刻みをも つ隆帯	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	内面橙色 磁石に付く
第22図6 図版17-1.6	794D	口縁	口縁部外周に斜位の刻みを持つ隆帯	橙 5YR7/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○		○	
第22図7 図版17-1.7	794D	口縁	口縁部外周に沈線、及び斜位の刻みを持つ隆 帯/沈線による懸垂文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	チャートの細礫 を含む
第22図8 図版17-1.8	794D	口縁	口唇部欠損/口縁部外周に隆帯/円形刺突文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	チャート・砂岩 の細礫を含む
第22図9 図版17-1.9	794D	口縁	隆帯/円形刺突文	にぶい赤褐 5YR5/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○	
第22図10 図版17-1.10	794D	胴	外反/外周に3本の沈線/円形刺突文	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	チャート・砂岩 の細礫を含む/ 内面にぶい黄橙 色/粗粒砂の混 入が顕著
第22図11 図版17-1.11	794D	胴	沈線による懸垂文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	粗粒砂の混入が 顕著 内面浅黄褐色

◎：角礫石・輝石 〇：細礫 砂：砂粒 白：白色乾土

第7表 縄文時代の土坑出土土器一覽(2)

探検番号 図版番号	出土遺構	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考
						石	角	礫	砂	
第22図12 図版17-1-12	794D	胴	沈線による懸垂文・蛇行する懸垂文	にぶい・橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○	
第22図13 図版17-1-13	794D	胴	沈線による懸垂文	にぶい・橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第22図14 図版17-1-14	794D	胴	沈線による懸垂文・斜行文?	黒褐 10YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第22図15 図版17-1-15	794D	胴	沈線による懸垂文・斜行文	黒褐 5YR2/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	磁石に付く
第22図16 図版17-1-16	794D	底	無文	にぶい・赤褐 5YR5/4	縄文時代後期	○			○	磁石に付く
第21図1 図版14-2-1	795D	口縁	口縁上部僅かに内屈/外周に沈線/沈線による懸垂文	にぶい・橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	白
第21図2 図版14-2-2	795D	胴	帯縄文LRによる斜行文	浅黄橙 7.5YR8/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	
第21図1 図版14-2-1	796D	口縁	口縁部内屈/外面稍曲部に沿った沈線	にぶい・橙 7.5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第21図2 図版14-2-2	796D	胴	沈線による弧線文	灰黄褐 10YR6/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第21図3 図版14-2-3	796D	胴	帯縄文LRによるX字状斜行文	にぶい・黄橙 10YR6/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	磁石に付く 内面橙色
第23図1 図版14-2-1	798D	胴	やや外反/縄文LR/沈線による懸垂文	暗赤褐 5YR3/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第23図2 図版14-2-2	798D	胴	沈線による懸垂文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○		○	内面にぶい・黄橙色
第23図1 図版14-2-1	801D	胴	沈線による懸垂文	にぶい・赤褐 2.5YR4/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	磁石に付く
第23図1 図版14-2-1	807D	胴	帯縄文LRによる横位区画と懸垂文	明赤褐 2.5YR5/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	磁石に付く
第23図2 図版14-2-2	807D	胴	帯縄文LR	黒 7.5YR2/1	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	磁石に付く
第23図3 図版14-2-3	807D	胴	縄文LR	にぶい・褐 7.5YR5/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○			○	
第23図1 図版14-2-1	808D	口縁	口縁部内屈/横位の沈線	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	白 磁石に付く
第23図1 図版16-1	809D	口縁	やや内湾/口縁部やや肥厚/無文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	内面橙色 磁石に付く
第23図2 図版16-2	809D	口縁	やや内湾/口縁部内湾し、さらに上部は外屈	褐灰 5YR5/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	砂は粗粒 内面にぶい・橙色
第23図3 図版16-3	809D	口縁	口縁内屈/口縁外面に沈線/沈線による懸垂文	にぶい・橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第23図4 図版16-4	809D	胴	縄文/沈線による弧線文及び懸垂文	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第23図5 図版16-5	809D	胴	縄文LR/沈線による懸垂文	にぶい・黄橙 10YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	チャートの細片 を含む
第23図6 図版16-6	809D	胴	沈線による対向U字状の懸垂文	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	チャートの細片 を含む
第23図7 図版16-7	809D	胴	沈線による懸垂文	にぶい・橙 7.5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	
第23図8 図版16-8	809D	胴	帯縄文LRによる対弧文か	にぶい・橙 7.5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	チャートの細片 を含む
第23図9 図版16-9	809D	胴	やや外反/帯縄文LR	灰黄褐 10YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	内面黒色
第23図10 図版16-10	809D	底	沈線による懸垂文	灰黄褐 10YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	内面浅黄橙

※ 角：角閃石・輝石 礫：磁礫 砂：砂粒 白：白色粘土

第7表 縄文時代の土坑出土土器一覧(3)

発掘番号 図版番号	遺構名	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴
第21図14 図版16-14	787D	巖石	砂岩	78.6	69.0	31.6	214.4	上半を欠損/下端部、右側縁の一部に巖打痕
第21図15 図版16-15	787D	巖石	砂岩	69.7	54.1	44.6	176.5	上半を欠損/下端部に巖打痕
第21図4 図版14-2-4	796D	二次加工の ある割片	頁岩	29.0	24.1	15.8	8.2	宍形/主要剥離面側に縦方向の二次加工剥離面あり
第21図4 図版14-2-5	796D	割片	黒曜石	13.2	17.0	4.8	0.8	打面部を欠損/背面縁或は上位・横位からの剥離面

(単位: mm, g)

第8表 縄文時代の土坑出土石器一覧

[遺物] 後期前葉の堀之内2式土器片が出土した。

[時期] 後期前葉(堀之内2式期か)。

[遺物] (第23図1～3、図版14-2-1～3、第7表)

[土器] (第23図1～3、図版14-2-1～3、第7表)

1・2は堀之内2式、3は型式不詳だが後期の所産と考えられる土器片である。

### 808号土坑

[遺構] (第18図、第6表)

[位置] (C-4)グリッド。

[検出状況] 807Dに切られる。

[構造] 平面形: ほぼ円形。規模: 長軸0.74m/短軸0.71m/深さ27cm。壁: 急角度で立ち上がる。長軸方位: N-S。

[覆土] 5層(1～5層)に分層された。

[遺物] 後期前葉の堀之内2式土器片1点が出土した。

[時期] 後期前葉(堀之内2式期か)。

[遺物] (第23図1、図版14-2-1、第7表)

[土器] (第23図1、図版14-2-1、第7表)

1は堀之内2式土器の口縁部の破片である。

### 809号土坑

[遺構] (第18図、第6表)

[位置] (C-3)グリッド。

[検出状況] 798Dに切られる。

[構造] 平面形: 長方形。規模: 長軸0.90m/短軸0.52m/深さ21cm。壁: 丸みをもって立ち上がる。長軸方位: N-86°-W

[覆土] 単層。

[遺物] 後期前葉の堀之内1・2式土器片が10点出土した。

[時期] 後期前葉(堀之内1式期)。

**遺物** (第23図1～10、図版16-1～10、第7表)

**[土器]** (第23図1～10、図版16-1～10、第7表)

1～7は堀之内1式、8～10は堀之内2式の土器片である。

(5) **ピット** (第24・25図、図版17-2、第9・10表)

調査区域内から検出されたピットは、全部で152本と数多くのピットが存在するが、その内訳は、縄文時代が104本、弥生時代後期～古墳時代前期が5本、中世以降が43本と今回の調査では、縄文時代の所産と思われるピットが多かった。

縄文時代の所産と思われるピットは、104本の内186Jの柱穴80本を除いた24本(21・24・25・28～30・35・40・79・87・90・91・97・102・116・140・141・144・147～152P)が該当するものと考えた。内容について、記述はしなかったが、ピットの基本内容は第9表、出土遺物については、第10表を参照のこと。

(6) **遺物包含層** (第26～28図、図版18、図版19-1、第11～13表)

本調査では、立川ローム第Ⅱ層(ローム漸移層)が安定して堆積していたため、遺物包含層として精査を行った。遺物包含層から出土した遺物は、基本的に位置記録を行ったが、行われなかったもので明らかに遺物包含層からの出土であるものは、ここで扱うことにした。さらに、第7節の遺構外出土遺物と区別して扱うこととした。

遺物包含層出土遺物の出土状況としては、(B～D-3～6)グリッドに分布しており、特に(B～D-3・4)グリッドに集中傾向がある。垂直分布は第Ⅱa～Ⅲ層に広がるが、Ⅱa・Ⅱb層に特に集中し、第Ⅱd・Ⅲ層では希薄である。ここで扱う資料の総数は、縄文土器48点、土製品2点(土器片鍾)、石器4点であった。

**[土器]** (第27図1～32、第28図33～48、図版18-1～49、第11表)

1・2は早期後葉の条痕文系の土器片である。

3は前期中葉の関山式の土器片である。

4は中期初頭の五領ヶ台式、5は中期中葉の勝坂式土器の破片である。

6～34は後期前葉の堀之内1式、35～47は堀之内2式の土器片である。

48は後期中葉の加曾利B1式の土器片である。

**[土製品]** (第28図49、図版18-49、第12表)

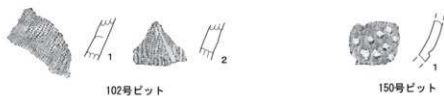
49は土器片鍾である。

**[石器]** (第28図50～53、図版19-1-50～53、第13表)

50は石鏃、51は石鏃未成品、52は打製石斧、53は敲石である。







第25図 ピット出土遺物(1/3)

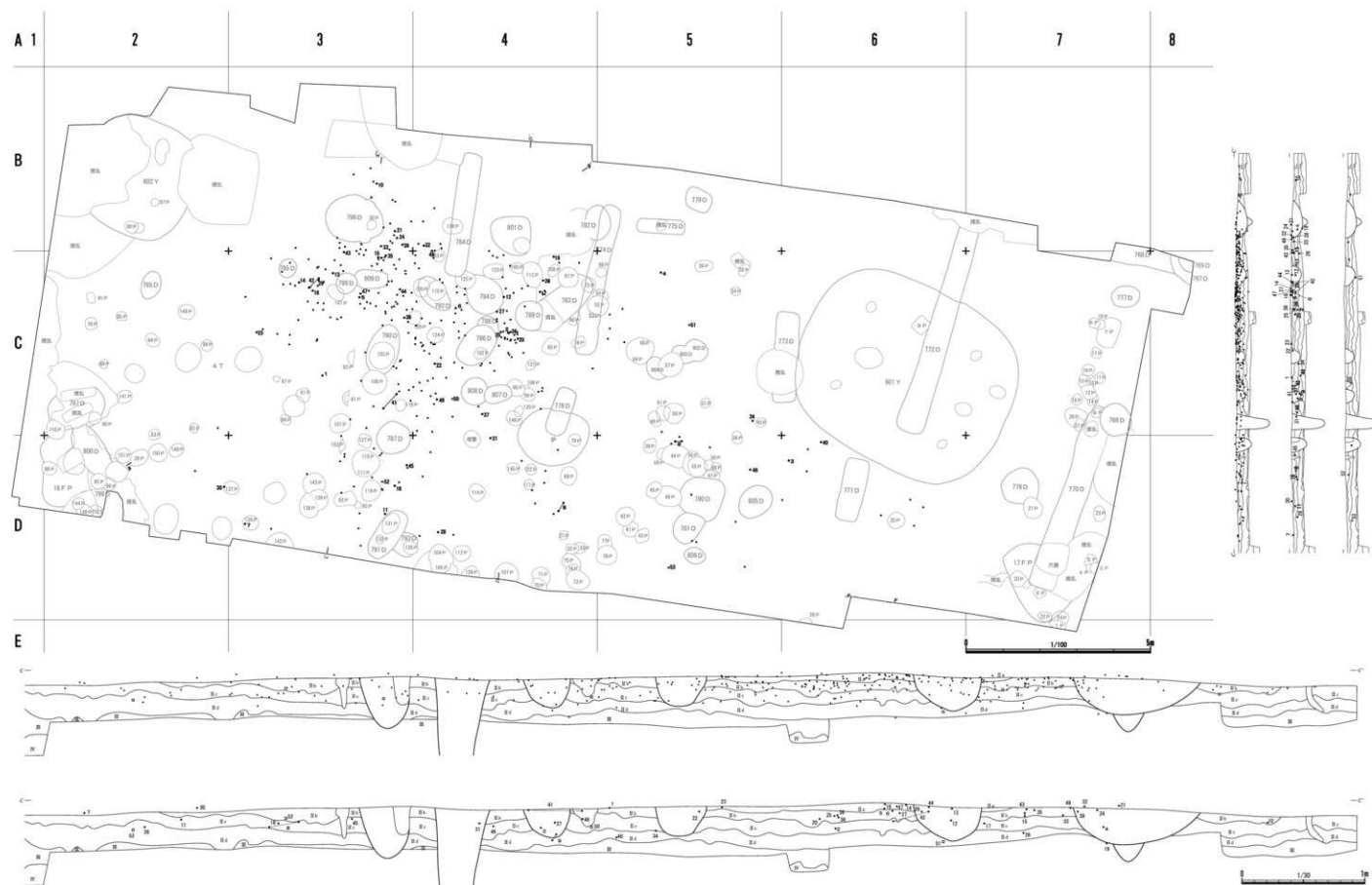
遺構名	位置	平面形	縦横 (cm)			覆土	主な遺物 及び備考	時期
			長軸	短軸	深さ			
21 P	(D-7)G	不整形円形	60	51	22	4層/77Dを切る。	なし	縄文時代
24 P	(D-7)G	楕円形	52	40	33	4層/17FPを切る	なし	縄文時代
25 P	(D-6)G	円形	47	45	43	5層	なし	縄文時代
28 P	(C-7)G	楕円形	64	52	28	4層	なし	縄文時代
29 P	(D-2)G	楕円形	59	41	73	6層/151Pに切られる	なし	縄文時代
30 P	(B-3)G	楕円形	28	25	22	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む暗黄褐色土/796Dに切られる	なし	縄文時代
35 P	(C-5)G	不整形円形	36	25	26	3層	なし	縄文時代
40 P	(C-5)G	楕円形	30	25	22	3層	なし	縄文時代
79 P	(D-4)G	楕円形	55	52	89	8層/186Jの切を切る	なし	縄文時代
87 P	(B-2)G	円形	21	21	20	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含むにぶい黄褐色土	なし	縄文時代
90 P	(C-2)G	楕円形	36	33	23	3層/797Dを切る	なし	縄文時代
91 P	(C-2)G	隅丸長方形	30	22	32	3層	なし	縄文時代
97 P	(C-3)G	隅丸方形	17	15	17	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土	なし	縄文時代
102 P	(C-4)G	円形	35	31	95	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土/786Dに切られる	後期前葉(堀之内1式)土器2点	縄文時代後期前葉(堀之内1式期)
116 P	(C・D-2)G	円形	57	50	28	3層/797D・18FPを切る	なし	縄文時代
140 P	(D-2)G	楕円形	43	34	57	4層	なし	縄文時代
141 P	(C-2)G	隅丸方形	41	35	23	2層	なし	縄文時代
144 P	(D-2)G	隅丸方形	34	30	41	上層はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗茶褐色土。下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調/799D・148Pを切る	なし	縄文時代
147 P	(C-3)G	楕円形	51	36	22	3層/798Dとの新旧不明	なし	縄文時代
148 P	(D-2)G	楕円形か	不明	38	53	上層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。下層はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗黄褐色土を基調/144Pに切られる/799D・152Pを切る	なし	縄文時代
149 P	(C-2)G	不整形円形	44	42	47	5層	なし	縄文時代
150 P	(D-2)G	円形	50	50	72	上層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。下層はローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調	不明土器1点	縄文時代
151 P	(D-2)G	不整形円形	43	42	54	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土/29Pを切る	なし	縄文時代
152 P	(D-2)G	楕円形か	不明	33	36	3層/144Pに切られる/799Dを切る	なし	縄文時代

第9表 縄文時代のピット一覧

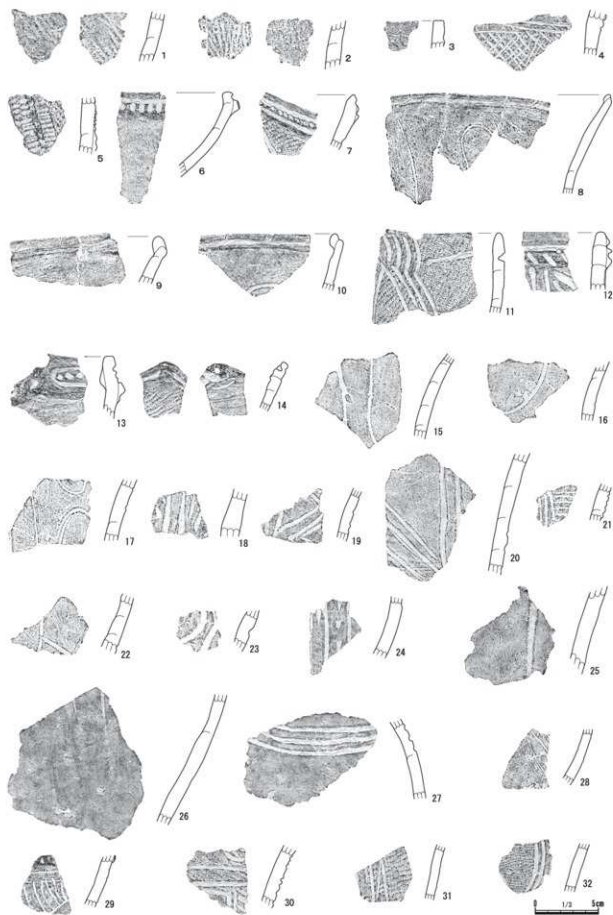
探検番号 図版目次	出土位置	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考
						石	角	礫	砂	
第25図1 図版17-2-1	102P	胴	縄文LR	黒褐色 7.5YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		内面にぶい赤褐色
第25図2 図版17-2-2	102P	胴	縄文LR/沈線	黒褐色 7.5YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		内面暗赤褐色
第25図1 図版17-2-1	150P	胴	小型深鉢/角棒状工具による刺突文	にぶい赤褐色 5YR4/3	不明	○	○	○		内面黒色 磁石に付く

第10表 縄文時代のピット出土土器一覧

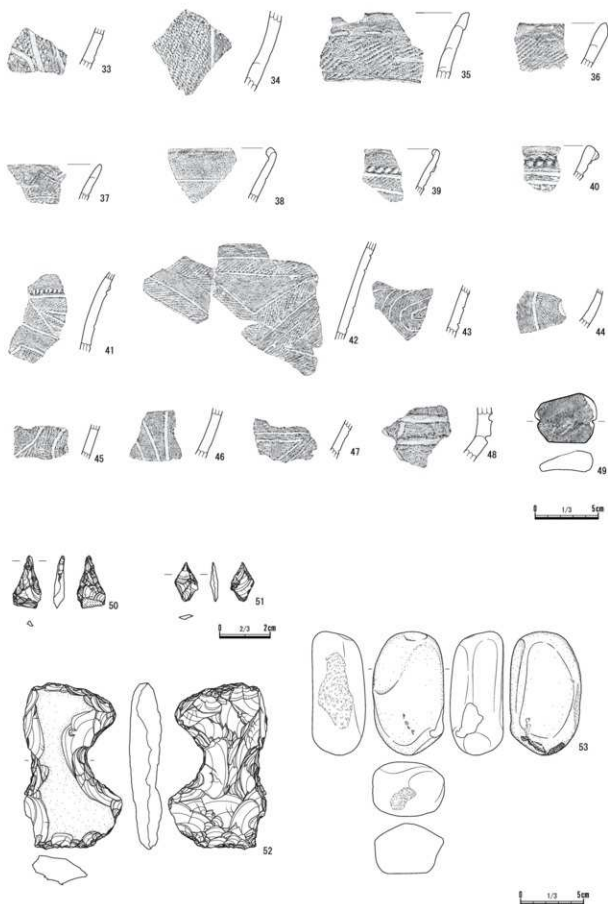
角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 白：白色粒子



第26図 遺物包含層遺物出土状態(1/100・1/30)



第27図 遺物包含層出土遺物1 (1/3)



第28図 遺物包含層出土遺物2 (1/3・2/3)

発掘番号 図版番号	出土位置	部位	文様・特徴など	色 調	時期・型式	粘土混入物				備 考		
						石	角	礫	砂		他	
第27図1 図版18-1	(C-3)G	胴	内外面貝殻状痕文	にぶい黄橙 10YR7/3	縄文時代早期後葉 (桑畑文系)			○	○	白・緑		
第27図2 図版18-2	(C-4)G	胴	内外面貝殻状痕文	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代早期後葉 (桑畑文系)				○	○	緑	
第27図3 図版18-3	(D-6)G	口縁	口唇部直下にコンパス文/縄文丸	にぶい黄橙 10YR7/4	縄文時代前期中葉 (朝山式)						○	緑
第27図4 図版18-4	(C-5)G	胴	半截竹管に沿った連続爪型文/格子目状文	にぶい赤褐 2.5YR4/4	縄文時代中期前葉 (五瀬台台式)			○			○	金
第27図5 図版18-5	(C-3)G	胴	隆部に沿った連続爪型文/縄文LR	明赤褐 2.5YR5/6	縄文時代中期中葉 (勝8式)					○		内面ににぶい褐色
第27図6 図版18-6	(C-4)G	口縁	口縁部肥厚し外周に沈線、沈線外側に丸棒状工具による刻み	黒褐 5YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	○		
第27図7 図版18-7	(D-3)G	口縁	口縁部肥厚し外周に2条の沈線、沈線間に刻み/縄文丸に沈線文	暗赤褐 5YR3/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)							
第27図8 図版18-8	(D-4)G	口縁	口縁部ごく狭く内屈/沈線による懸垂文	明赤褐 2.5YR5/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図9 図版18-9	(D-5)G	口縁	口縁部内屈/無文	明赤褐 2.5YR5/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			磁石に付く/内面黒色
第27図10 図版18-10	(B-3)G	口縁	口縁部内屈/口縁外周に沈線/沈線による懸垂文	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○			○	白
第27図11 図版18-11	(D-3)G	口縁	波状口縁/縄文LR/口縁外周に沈線/波頂部から4本単位の弧線文・懸垂文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図12 図版18-12	(C-4)G	口縁	口縁部肥厚し外周に沈線、沈線外側に丸棒状工具による刻み/沈線による懸垂文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○				
第27図13 図版18-13	(C-3)G	口縁	口縁部肥厚し外周に沈線区画、区画内に列点文/円形刺突を伴う小突起	浅黄橙 10YR8/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図14 図版18-14	(C-3)G	口縁	波状口縁/縄文LR/波頂部を除く口縁外周に沈線/波頂部内面に円形刺突文と円の下側に沿った2本の弧線文	にぶい橙 2.5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)							内面に種子圧痕か
第27図15 図版18-15	(C-3)G	胴	沈線による懸垂文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)					○		磁石に付く
第27図16 図版18-16	(C-3)G	胴	沈線による懸垂文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図17 図版18-17	(C-4)G	胴	沈線による懸垂文	にぶい黄橙 10YR7/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○				磁石に付く
第27図18 図版18-18	(D-3)G	胴	2本単位の沈線による懸垂文	浅黄橙 10YR8/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図19 図版18-19	(C-4)G	胴	3本単位の沈線による懸垂文	灰黄褐 10YR6/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)					○		内面黒色
第27図20 図版18-20	(C-4)G	胴	3本単位の沈線による懸垂文	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○			
第27図21 図版18-21	(B-3)G	胴	沈線区画内に沈線を充填か	にぶい黄橙 10YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)							
第27図22 図版18-22	(C-4)G	胴	沈線による懸垂文	褐灰 10YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)					○		白
第27図23 図版18-23	(C-3)G	胴	沈線による懸垂文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○			
第27図24 図版18-24	(B-3)G	胴	沈線による懸垂文/沈線間に列点文	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)					○		内面ににぶい赤褐色
第27図25 図版18-25	(C-4)G	胴	沈線による懸垂文	にぶい黄橙 10YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○	○		内面褐色
第27図26 図版18-26	(C-4)G	胴	沈線による懸垂文	灰褐 5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図27 図版18-27	(C-4)G	胴	3本単位の沈線による弧線文	にぶい黄橙 10YR6/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図28 図版18-28	(D-4)G	胴	2本単位の沈線による弧線文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○	○			
第27図29 図版18-29	(C-3)G	胴	沈線区画に沈線を充填	にぶい黄橙 10YR7/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○				
第27図30 図版18-30	(D-2)G	胴	縄文丸/括れ部に2本の沈線による横位の区画/沈線による懸垂文・弧線文	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○			内面ににぶい赤褐色

※ 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 白：白色粒子 緑：緑泥 金：金箔

第11表 遺物包含層出土土器一覧(1)

## 第2章 西原大塚遺跡第216地点の調査

探検番号 図版番号	出土位置	部位	文様・特徴など	色 調	時期・型式	胎土混入物				備 考	
						石	角	礫	砂		他
第27図31 図版18-31	(D-4)G	胴	縄文LR/沈線による懸垂文	黒 10YR1.7/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		内面に赤い褐色
第27図32 図版18-32	(B-4)G	胴	縄文LR/3本単位の沈線による弧線文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		
第28図33 図版18-33	(B-3)G	胴	縄文LR/沈線による懸垂文	褐灰 10YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		白
第28図34 図版18-34	(C-5)G	胴	縄文LR/沈線	にぶい赤褐 5YR4/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)						
第28図35 図版18-35	(C-3)G	口縁	口唇部上面取り状/縄文LRを2本の沈線で横位区画、口縁直下を滑溝	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○		
第28図36 図版18-36	(C-4)G	口縁	口唇部外面取り状/縄文LR	にぶい黄褐 10YR7/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						褐
第28図37 図版18-37	(C-4)G	口縁	縄文LR/外周に沈線/口唇部押捺状に窪ませる	黒褐 10YR3/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						
第28図38 図版18-38	(C-3)G	口縁	口唇部内面肥厚/横位の沈線	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	○	
第28図39 図版18-39	(B-3)G	口縁	口唇部内面肥厚/口縁外周に斜位の刻みを作る細線文/帯縄文LR	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						白
第28図40 図版18-40	(D-6)G	口縁	口唇部外面肥厚し、連続押捺/沈線/縄文?	褐灰 7.5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						
第28図41 図版18-41	(C-3)G	口縁	口唇部欠損/刻みを作る細線文/帯縄文LRによる三角文?	にぶい赤褐 2.5YR5/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	○	
第28図42 図版18-42	(C-3)G	胴	帯縄文LRによる三角文	にぶい褐 7.5YR5/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○	○	金
第28図43 図版18-43	(C-3)G	胴	沈線間に縄文LRを施文した渦巻文	にぶい褐 7.5YR6/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						
第28図44 図版18-44	(C-3)G	胴	沈線間に縄文LRを施文(渦巻文か)	黒褐 10YR3/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)				○		
第28図45 図版18-45	(D-3)G	胴	沈線間に縄文丸を施文(渦巻文か)	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						
第28図46 図版18-46	(D-5)G	胴	沈線間に縄文丸を施文した斜行文	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						
第28図47 図版18-47	(C-3)G	胴	平行沈線による三角文	灰褐 5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)						内面黒色
第28図48 図版18-48	(C-4)G	胴	横位の平行沈線と沈線間を区切る縦位沈線	黒褐 10YR3/1	縄文時代後期中葉 (加曾利B1式)				○	○	内面に赤い赤褐色

● 角:角閃石・輝石 ● 礫:細礫 ● 砂:砂 ● 白:白色粒子 ● 赤:褐色粒子 ● 金:金箔

第11表 遺物包含層出土土器一覽(2)

探検番号 図版番号	出土位置	種別	遺存状態	長さ/幅/厚み	重量	特 徴	胎土	時 期 型 式
第28図49 図版18-49	(C-4)G	土器片鏝	完形	4.8/3.9/1.6	26.4	残部は長軸方向両端のみ/両縁部は摩耗/隆帯は割離欠損/色調はにぶい褐色7.5YR5/3を基調	石英・金雲母・砂粒・白色粒子を含む	中期中葉 (阿玉台式)

(単位:cm,g)

第12表 遺物包含層出土土製品一覽

探検番号 図版番号	出土位置	器 種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特 徴
第28図50 図版19-1-50	(C-4)G	石 鏝	チャート	21.1	11.0	4.3	0.8	完形/五角形/押圧刺痕による整形/先端から右側縁に縦方向の衝撃刺痕
第28図51 図版19-1-51	(C-5)G	石鏝未成品	黒曜石	15.4	9.2	3.1	0.3	完形/菱形/割片素材/微細刺痕による整形
第28図52 図版19-1-52	(D-3)G	打製石斧	頁岩	132.4	78.8	26.0	270.9	左側縁上部・下部を欠損/分割形/刃部は円弓/正面に原礫面あり
第28図53 図版19-1-53	(D-5)G	敲石	砂岩	98.2	56.8	42.5	372.7	完形/下端部、左側縁に敲打痕

(単位:mm,g)

第13表 遺物包含層出土石器一覽

## 第4節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

### (1) 概要

本地点において弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、住居跡2軒(601・602 Y)、掘立柱建築遺構(4 T)が検出された。4 Tについては、柱穴8本が八角形の特異な配置をしているものであった。また、ピットについては、覆土の観察から、5本(86・94・96・118・120 P)を該期のものとして扱った。

### (2) 住居跡

#### 601号住居跡

**遺構** (第29～31図)

**位置** (C・D-6・7) グリッド。

**検出状況** 中世以降の土坑である772・773 Dに部分的に破壊されているが、比較的に遺存状態は良好であった。

**構造** 平面形：隅丸長方形。規模：長軸5.92m/短軸4.90m/遺構確認面からの深さ55～70cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-58°-W。壁溝：全周する。上幅10～20cm・下幅5cm前後・深さ3～8cm。床面：住居西半部を中心に硬化面を確認できた。炉：住居中央からやや北西壁に寄って位置する。長軸78cm程・短軸58cmの楕円形を呈する地床炉で、掘り込みの深さは8cm、厚さ3cm程に被熱赤化していた。貯蔵穴：住居東コーナーから検出された。46×32cmの楕円形を呈し、深さは30cm。覆土は3層に分層される。周囲には幅16～40cm程で高さ2～4cmの凸堤がクランク状に巡らされている。柱穴：主柱穴はP1～4の4本と考えられる。P1は深さ59cm、P2は62cm、P3は56cm、P4は67cm。赤色砂利層：貯蔵穴の北側の住居東コーナーから検出された。80×70cm程の台形状の広がりを確認できた。入口施設：P5は入口梯子穴と考えられる。46×36cmの楕円形で、深さ32cm。掘り方：住居全体に3～5cm程度の深さの掘り込みが確認できた(48～50層)。炉跡付近及び北東壁際については、他の部分よりやや深く掘られている。また、住居南コーナーには、80×70cm・深さ21.5cmの楕円形の掘り込み(P6)を確認した。

**覆土** 46層(2～47層)に分層される。

**遺物** 住居全体から比較的によく土器が出土した。器種としては、壺・鉢・高坏・甕である。今回注目される遺物として、40の敲石がある。

**時期** 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

**遺物** (第32～34図、図版19-2、図版20、第14表)

**土器** (第32～34図1～39、図版19-2-1～15、図版20-16～39、第14表)

1～6・18～31は壺形土器、7・8は鉢形土器、9・10・16・17は高坏形土器、11～15・32～39は甕形土器ある。

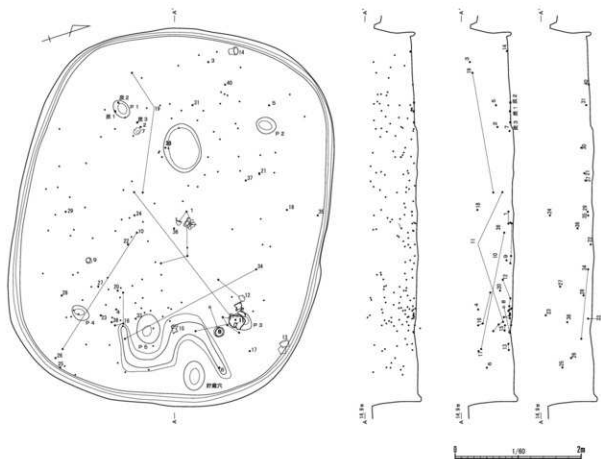
**石器** (第34図40、図版20-40)

40は砂岩製の敲石である。完形で、長さ13.10cm、幅3.64cm、厚さ2.71cm、重量180.5gを測る。正面には原礫面が残る。裏面は平坦剥離により成形されている。断面形は三角形を呈する。左右両側縁









第31図 601号住居跡遺物出土状態(1/60)

には敲打痕、上下両端部には敲打痕および敲打時の剥離と思われる剥離面が認められる。上下両端部の剥離面に橙色付着物が観察される。橙色付着物は両側縁の敲打痕内にも非常に部分的に認められる。また、下端部には白色付着物も観察される。付着物について自然科学分析を行った結果、橙色付着物は粘土であることが判明した。詳細については、付編(112ページ)を参照。出土位置は住居西壁近くであり、床面直上からの出土である。

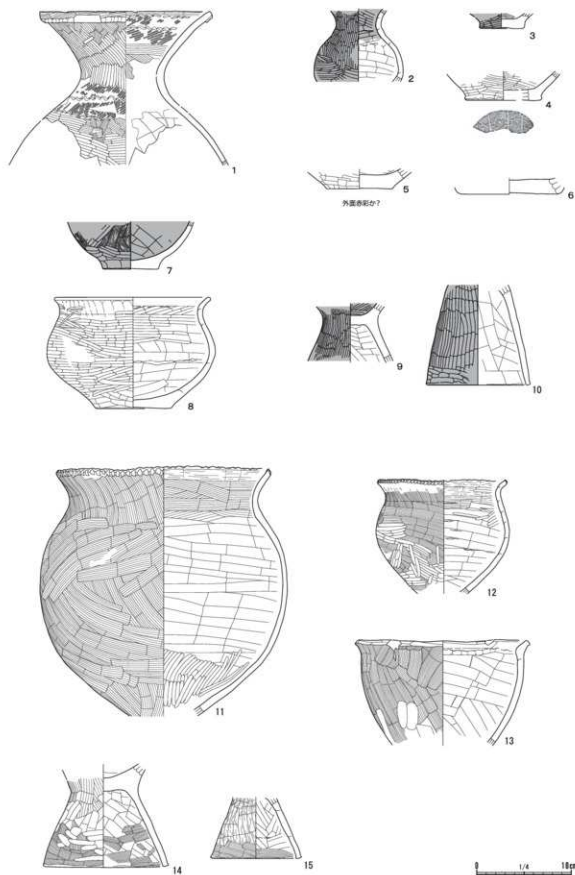
### 602号住居跡

#### 遺構(第35図)

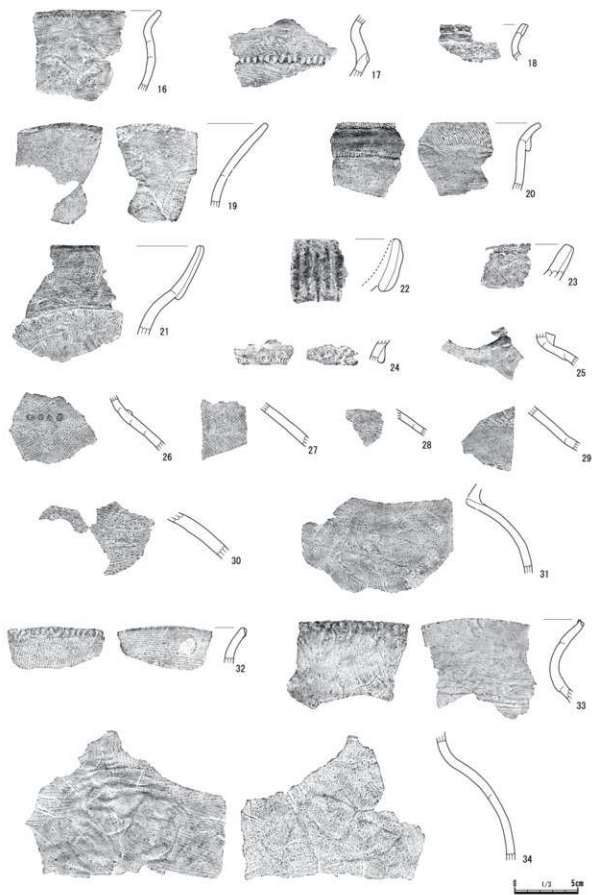
[位置] (B-2) グリッド。

[検出状況] 大きな攪乱により住居東側と西側が破壊されており、遺存状態は悪い。

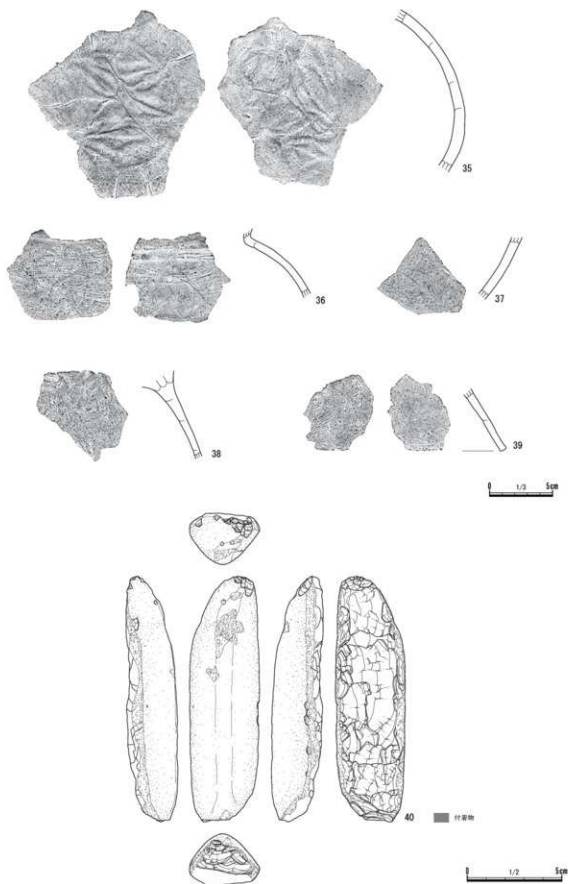
[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸3.14m/短軸不明/遺構確認面からの深さ16~28cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-30°-E。壁溝：なし。床面：住居中央付近に硬化した面を確認できた。炉：住居中央からやや北東壁に寄って位置する。瓢形に2か所に被熱部分が確認できた。長軸72cm・短軸55cm程の地床炉で、掘り込みの深さは5cm程、厚さ3cm程に被熱赤化していた。貯蔵穴：住居南コーナーから検出された。西側部分は中世以降の80Pに破壊されていた。長軸不明、短軸16cmで、平面形は楕円形と思われる。深さは22cm。覆土は3層(17~19層)に分層される。周囲には幅12~20cmで高さ2~5cmの凸堤がやや弧状に巡らされている。柱穴：主柱穴は検出されなかつ



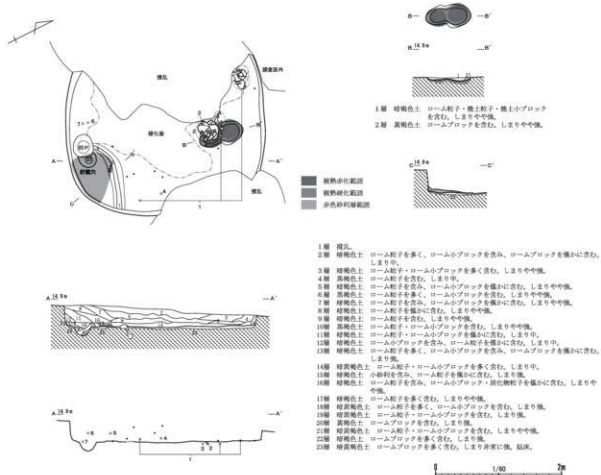
第32図 601号住居跡出土遺物1(1/4)



第33図 601号住居跡出土遺物2(1/3)



第34図 601号住居跡出土遺物3(1/3・1/2)



第35図 602号住居跡(1/60)

た。赤色砂利層：貯蔵穴を覆うように検出された。78×60cm程の範囲をもつ。入口施設：検出されなかった。掘り方：住居全体に5cm程の深さの掘り込みで確認できた(23層)。

〔覆土〕21層(2～22層)に分層される。

〔遺物〕1の壺は住居北コーナーの床面上から、炉跡付近には2の壺がまとまって出土した。

〔時期〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

〔遺物〕(第36図、図版21-1-1～7、第15表)

1～4は壺形土器、5～7は甕形土器である。

### (3) 掘立柱建築遺構

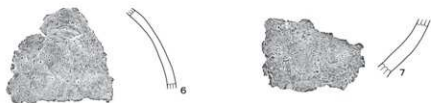
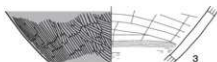
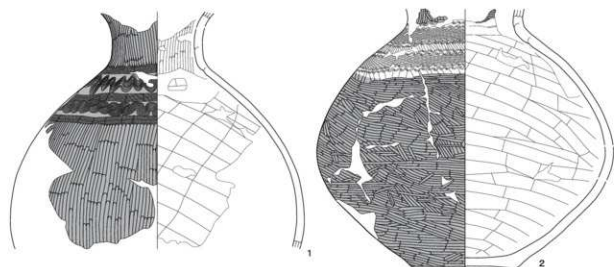
#### 4号掘立柱建築遺構

〔遺構〕(第37図・第16表)

〔位置〕(C・D-2・3)グリッド。

〔検出状況〕縄文時代後期の遺物包含層が広がり、さらに縄文時代のピットが散在する状況での検出であったが、柱穴の覆土の特徴として、黒味が強かったため、比較的容易に確認ができた。

〔構造〕平面形：柱穴8本が八角形に配される。規模：1本が直径53～82cm・深さ56～85cmの規模をもつ。柱穴間距離(柱穴中心間)はP1-P2間：1.5m、P2-P3間：1.7m、P3-P4



第36図 602号住居跡出土遺物(1/4・1/3)



調査番号 図版番号	形種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第32図1 図版19-2-1	甕	高 [16.4] 口 18.3	幅狭複合口縁/胴部から胴部は緩やかに移行し、口縁部は外反する/外面胴部にLR単部斜縄文2段と白縄結節文1条を斜縄文2段の下端に施文/内面口縁部には外面胴部と反対に白縄結節文は斜縄文の上端に施文	淡黄褐色を基調	黄褐色をやや多く、黄褐色粒子を含む	内面:口縁部の無文部は縦方向のへら磨き調整、胴部はヘラナデ/外面:無文部はハケ目調整後に粗いへら磨き調整、複合口縁下端は指頭押捺痕あり、口縁部はハケ目調整	住居中央付近の覆土中(床土3~12cm)から散在的	口縁部~胴部 中位60%
第32図2 図版19-2-2	甕	高 [7.7]	小型甕/胴部は屈曲せず緩やかなカーブを呈する/胴部下平に最大径をもつ/内面頸部及び外面に赤彩	胎土は暗茶褐色を基調	黄褐色粒子を多く、砂粒・小石を含む	内面:頸部はへら磨き調整、胴部はヘラナデ/外面:へら磨き調整/内面胴部には指頭押捺痕が残る	P1東側の覆土中(床土31cm)	頸部~胴部下 半30%
第32図3 図版19-2-3	甕	高 [1.6] 底 4.6	平底であるが、底面中央は僅かに窪む/外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角四石を僅かに含む	内面:ハケ目調整/外面:へら磨き調整	住居西壁近くの覆土中(床土61cm)	底部のみ 100%
第32図4 図版19-2-4	甕	高 [3.0] 底 (8.0)	平底/底部に木炭痕あり/外面に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内外面:横方向のへら磨き調整	P4・P5の中間の覆土中(床土54cm)	胴部下平~底 部20%
第32図5 図版19-2-5	甕	高 [2.1] 底 (7.0)	平底/外面は赤彩か	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面:へら磨き調整/外面:へらナデ後粗いへら磨き調整	P2西側の覆土中(床土32cm)	底部のみ 60%
第32図6 図版19-2-6	甕	高 [1.7] 底 11.0	平底	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く、小石を含む	内面:粗いへら磨き調整	貯蔵六北側の覆土中(床土41cm)	底部のみ 100%
第32図7 図版19-2-7	鉢	高 [5.1] 底 5.8	平底/内外面に赤彩/内面に赤彩されているため鉢と思われる	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く、小石を含む	内面:ヘラナデ/外面:ハケ目調整後粗いへら磨き調整、底部付近はへら削り	P1東側の覆土中(床土4cm)	胴下半~底 部80%
第32図8 図版19-2-8	鉢	高 11.8 口 16.3 底 8.0	最大径は胴部中位にもつ/平底/内外面に赤彩	胎土は明褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面:口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ後粗いへら磨き調整、胴部はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整後へら磨き調整、底部付近はへら削り	P3南側の覆土中(床土6・13cm)	90%
第32図9 図版19-2-9	高坏	高 [6.3]	胴部には「ハ」の字状に開く/外面に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面:坏部はへら磨き調整、胴部はヘラナデ/外面:へら磨き調整	P4西側の覆土中(床土7cm)	坏部下端から 胴部上半 70%
第32図10 図版19-2-10	高坏	高 [10.6] 底 (11.1)	長頸タイプ/底端部は平坦/外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	砂粒・小石を含む	内面:ヘラナデ/へら磨き調整	住居中央付近と南東コーナーの覆土中(床土14・53cm)	胴部40%
第32図11 図版19-2-11	甕	高 [23.0] 口 (22.6)	台付甕/口唇部外面は羽目目/口縁部はやや内湾気味に開く/最大径は胴部中位にもつ/外面の黒痕は胴部下平以上を境に直線状に見られる	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	内面:口縁部はハケ目調整、胴部はヘラナデ後下半はへら磨き調整/外面はハケ目調整	P3上の覆土中(床土16・17・30cm)	口縁部~胴部 下半40% 胴部欠損
第32図12 図版19-2-12	甕	高 [12.1] 口 13.5	台付甕/胴部には欠損/口唇部に羽目目あり/口縁部は外反する/最大径は胴部上半にもつ	淡茶褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒をやや多く、砂粒・小石を含む	内面:口縁部はハケ目調整後、胴部はヘラナデ後粗いへら磨き調整/内面はハケ目調整後胴部下平に縦方向の粗いへら磨き調整	P3のほぼ床面上を中心に散在的	口縁部~胴部 下半80%
第32図13 図版19-2-13	甕	高 [10.9] 口 18.4	台付甕か/口唇部は面取りされ平坦/最大径は口縁部にもつ/外面全体は覆けている	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・をやや多く含む	内面:ヘラナデ/外面:ハケ目調整、胴部下平はその後一部ヘラナデ/内面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	東コーナー壁際のほぼ床面上	口縁部~胴部 下半50%
第32図14 図版19-2-14	甕	高 [11.0] 底 (13.2)	台付甕/胴部には「ハ」の字状/底端部は平坦	暗茶褐色を基調	砂粒・小石を含む	内面:ヘラナデ/外面:上半は粗いハケ目調整、中位以下は細かいハケ目調整	北西壁際の床面上	胴部のみ 100%
第32図15 図版19-2-15	甕	高 [6.2] 底 (9.6)	台付甕/胴部には「ハ」の字状/底端部は平坦	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面:上半部~中位がハケナデ、下半部はハケ目調整/外面:ハケ目調整	P5北側の覆土中(床土12・13cm)	胴部90%

第14表 601号住居跡出土土器一覧(1)

調査番号 図版番号	形態	法量 (m)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第33図16 図版20-16	高坏	高 [7.0] 厚 0.6	鉢の可能性あり/縁状の胴部から頸部でやや平ばまり、口縁部外反する/内外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子を含む	内外面へら磨き調整	P5南側の覆土中(床土36・48・55cm)	口縁部～胴部 中位破片
第33図17 図版20-17	高坏	厚 0.8	頸部に屈曲部をもち、口縁部は外反する/外周頸部屈曲部に刺目がまわる/内外面に赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒を含む	内外面へら磨き調整後へら磨き調整	住居南コーナーの覆土中(床土54cm)	口縁部～胴部 下半破片
第33図18 図版20-18	甗	厚 0.4	小型甗/幅狭の複合口縁/口唇部は平直	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面:横ナデ/外面:口縁部は横ナデ、頸部はハゲ目調整	住居北東壁近くの覆土中(床土52cm)	口縁部～頸部 破片
第33図19 図版20-19	甗	高 [7.5] 厚 0.6	単純口縁/口頸部はやや内傾味のある/内外面に赤彩	胎土は明褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内外面へら磨き調整後粗いへら磨き調整	6号南側の覆土中(床土31・59cm)	口頸部破片
第33図20 図版20-20	甗	厚 0.6	幅広い複合口縁/外面複合部下端に刺目がまわる/口唇部と外面口縁部直下に屈曲部と縁状刺目と円形赤彩文が施文される/内面無文部及び外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面:無文部はハゲ目調整後へら磨き調整/外面:へら磨き調整	P5南側の覆土中(床土21cm)	口縁部破片
第33図21 図版20-21	甗	高 [8.8] 厚 0.7	幅4.5cmの幅広い複合口縁/口縁部は内湾する/内外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面:へら磨き調整/外面:ハゲ目調整後へら磨き調整	6号北東の覆土中(床土8cm)	口縁部～頸部 破片
第33図22 図版20-22	甗	厚 0.7	幅広い複合口縁/外面複合部に棒状付文5本、下端にハゲ状工具による刺目がまわる/外面複合部下端に赤彩の痕跡あり/内面は刺目	胎土は黄褐色を基調	黒色粒子を多く、黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:不明/外面:複合部下端はへら磨き調整	住居中央付近のほぼ床面	口縁部破片
第33図23 図版20-23	甗	厚 0.7	幅広い複合口縁/外面複合部に3段の単節斜線文による羽状刺目と円形赤彩文1つあり/内面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面:へら磨き調整	P4・P5の中間の覆土中(床土73cm)	口縁部破片
第33図24 図版20-24	甗	厚 0.6	20の土器に類似/幅広い複合口縁/外面複合部下端に刺目がまわる/内面口縁部直下と円形赤彩文Rと円形赤彩文が施文される/内面無文部及び外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	橙褐色粒子を僅かに含む	内面:無文部はへら磨き調整/外面:横ナデ	住居中央付近の覆土中(床土68cm)	口縁部小破片
第33図25 図版20-25	甗	厚 0.6	頸部に断面三角形の凸帯がまわる/内面頸部及び外面に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・角閃石・砂粒を含む	内面:頸部はへら磨き調整、胴部は指面押捺による成形痕が残る/外面:へら磨き調整、凸帯部は横ナデ	住居南コーナーの覆土中(床土46cm)	頸部～胴部上 半破片
第33図26 図版20-26	甗	厚 0.6	胴部上半に文様帯あり/文様は4段の単節斜線文LRが施文される/1・2段目の境には4個の円形刺目、3・4段目の境には1条の自縄結節文と円形赤彩文が施文される/内外面に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:頸部はへら磨き調整、胴部は横ナデ/外面:無文部はへら磨き調整	住居南コーナーの覆土中(床土33cm)	頸部～胴部上 半破片
第33図27 図版20-27	甗	厚 0.6	胴部上半に文様帯あり/文様は単節斜線文による羽状刺目と円形赤彩文が施文される	灰褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面:横ナデ	P5西側の覆土中(床土49cm)	胴部上半破片
第33図28 図版20-28	甗	厚 0.6	胴部上半に文様帯あり/文様は単節斜線文LRの下部に4条の自縄結節文が施文される	灰褐色を基調	黄褐色粒子・橙褐色粒子を多く含む	内面:横ナデ/外面:無文部へら磨き調整	住居南コーナーの覆土中(床土11cm)	胴部上半小破片
第33図29 図版20-29	甗	厚 0.6	胴部上半に2帯の文様帯あり/文様は上下を2条の自縄結節文より区別し、下端の区画には扇状文と単節斜線文が見られる/外面無文部に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面:横ナデ/外面:無文部はへら磨き調整	住居南西壁近くの覆土中(床土4cm)	胴部上半破片
第33図30 図版20-30	甗	厚 0.9	胴部上半に文様帯あり/文様は3段で構成され、上・下は縦目文状赤文、中は扇状文が斜めに施文される	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙褐色粒子を多く、砂粒を僅かに含む	内面:横ナデ	6号の上部覆土中(床土18cm)	胴部上半破片
第33図31 図版20-31	甗	厚 0.6	縁状の胴部/胴部と頸部の複合部は輪組み痕の彫刻面が残り、斜状のハゲ目痕が観察できる	胎土は灰褐色を基調	黄褐色粒子・橙褐色粒子を多く、砂粒を含む	内外面へら磨き調整	6号北西の覆土中(床土7cm)	胴部上半～下 半破片

第14表 601号住居跡出土土器一覧(2)

## 第2章 西原大塚遺跡第216地点の調査

検出番号 図版番号	形種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第33図32 図版20-32	甕	厚0.6	口頸部外面にハケ状工具による刻み目/口縁部は外反する	淡茶褐色を基調	砂粒を含む	内外面/ハケ目調整	覆土中	口縁部破片
第33図33 図版20-33	甕	厚0.8	口頸部外面にハケ状工具による刻み目/頸部から口縁部は屈曲せず緩やか/口縁部は外反する	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子を多く、砂粒を含む	内外面/ハケ目調整	P5すぐ西側の覆土中(床土10cm)	口縁部～胴部上半破片
第33図34 図版20-34	甕	厚0.8	頸部から口縁部は屈曲する/口縁部は外反する	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子をやや多く、金雲母・砂粒を僅かに含む	内面/ハケナデか/外面/ハケ目調整	住居西平の覆土中(床土12・18cm)	口縁部～胴部中位破片
第34図35 図版20-35	甕	厚0.9	胴部は球状を呈し、最大径は胴部中位にもつ	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子を多く、砂粒を僅かに含む	内外面/ハケ目調整	住居北東壁際のほぼ床面上	胴部上半～下半破片
第34図36 図版20-36	甕	厚0.6	胴部から口縁部は屈曲する	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子・砂粒を含む	内面/口縁部は横ナデ、胴部は粗いハケ目調整/外面/口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整	住居中央の覆土中(床土25cm)	口縁部～胴部中位破片
第34図37 図版20-37	甕	厚0.6	外面に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面/ヘラナデ/外面/ハケ目調整	砂跡北東の覆土中(床土7cm)	胴部上半破片
第34図38 図版20-38	甕	高[7.5] 厚1.0	台付蓋/蓋台部は「ハ」の字状/	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面/ハケナデ/外面/ハケ目調整	P4・P5の中間の覆土中(床土40cm)	蓋台部破片
第34図39 図版20-39	甕	厚0.5	台付蓋/蓋台部は「ハ」の字状/底端部は平坦	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面/上半部はヘラナデ、下半部はハケ目調整/外面/ハケ目調整	覆土中	蓋台部破片

第14表 601号住居跡出土土器一覽(3)

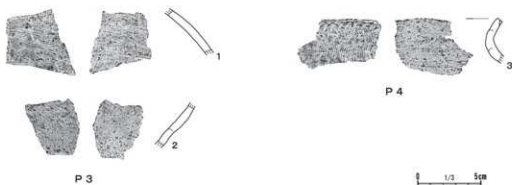
検出番号 図版番号	形種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第36図1 図版21-1-1	甕	高[25.1]	口頸部はやや屈曲し、直立気味に外反する/外面胴部には9本一単位による縞描文(上から直線文→波状文→直線文→波状文→直線文)が施す/外面無文部及び内面口頸部は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面/口頸部は縦方向のヘラ書き調整、胴部はヘラナデ/外面/無文部は縦方向のヘラ書き調整	住居北コーナのほぼ床面上を中心に散在的	頸部～胴部下半70%
第36図2 図版21-1-2	甕	高[27.4] 厚10.8	最大径は胴部下平にもつ/底部は平底/胴部文様は2段の環目状帯赤文の無文後に自縷結節文2条を上下に無文し区画している/外面及び内面口頸部は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面/口頸部は横方向のヘラ書き調整、胴部はヘラナデ/外面/無文部は横方向のヘラ書き調整	砂跡直上	頸部～底部70%
第36図3 図版21-1-3	甕	高[6.2] 厚0.9	胴部下平から中位にかけて膨らみをもつ/外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子・砂粒・角閃石を含む	内面/ヘラナデ後下半にハケ目調整/外面/ハケ目調整後ヘラ書き調整	砂跡すぐ西側のほぼ床面上	胴部下平のみ50%
第36図4 図版21-1-4	甕	厚0.5	胴部上半に文様帯あり/文様は単節斜線文Rの下端に2条の自縷結節文が施文され、可動赤彩文が付される/外面無文部に赤彩	胎土は暗赤褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面/ヘラ書き調整/外面/無文部はヘラ書き調整	住居南壁近くの覆土中(床土6cm)	胴部上半破片
第36図5 図版21-1-5	甕	厚0.5	球状の胴部から頸部はすばまり、口縁部にかけて外反する	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	内外面/ハケ目調整	入口梯子穴東の覆土中(床土11cm)	頸部～胴部中位破片
第36図6 図版21-1-6	甕	厚0.7	球状の胴部/外面に保付着あり	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子をやや多く含む	内面/ハケナデ/外面/ハケ目調整	住居南壁近くの覆土中(床土17cm)	胴部中位～下半破片
第36図7 図版21-1-7	甕	厚1.0	球状の胴部から頸部はややくびれる	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子をやや多く、砂粒を僅かに含む	内面/ハケナデ/外面/ハケ目調整	住居南壁近くのほぼ床面上	頸部～胴部上半破片

第15表 602号住居跡出土土器一覽



ピット番号	位置	平面形	規模 (m)			長軸方位	覆土及び特徴等	主な遺物	備考
			長軸	短軸	深さ				
P1	(C-2)G	間丸方形	53	49	56	N-62°・W	6層/底面はほぼ平坦	なし	
P2	(C-2)G	掘円形	79	67	85	N-28°・E	11層/底面中央部はやや盛り上がる	図示できるものはなかった	
P3	(C-3)G	不整形円形	75	65	81	N-65°・E	7層/底面はほぼ平坦	燧石片2点	
P4	(C-3)G	円形	59	59	75	—	12層/底面はほぼ平坦/81Pに切られる	燧石片1点	
P5	(D-3)G	不整形円形	60	55	80	N-69°・E	11層/底面は平面だがやや傾斜する	図示できるものはなかった	
P6	(D-2・3)G	掘円形	62	53	69	N-8°・E	8層/底面はやや丸みを帯びる	なし	
P7	(D-2)G	掘円形	82	66	72	N-9°・E	14層/底面はほぼ平坦	図示できるものはなかった	
P8	(D-2)G	不整形円形	62	55	84 (72)	N-85°・W	8層/底面はテラス状に段を持つ/96Pと重複	なし	96Pは弥生のピットと思われ、新旧は不明

第16表 4号掘立柱建築遺構ピット一覧



第38図 4号掘立柱建築遺構出土遺物(1/3)

間：1.7m、P4-P5間：2.4m、P5-P6間：1.8m、P6-P7間：1.6m、P7-P8間：1.8m、P8-P1間：2.7m、P1-P4間：4.3m、P2-P7間：4.5m、P3-P6間：4.6m、P5-P8間：4.3m。主軸方位：N-13°-E。

〔覆土〕各柱穴の覆土は、第37図を参照。

〔遺物〕出土遺物は少なかったが、P3で燧石2点、P4で燧石1点の破片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕本遺構の検出により、市内の多角形の掘立柱建築遺構は、六角形が2棟、八角形が2棟の4棟となった。多角形六角2棟八角2棟の掘立柱建築遺構の検出例は、市内で4例目となった。

〔遺物〕(第38図1～3、図版21-2-1～3、第17表)

検出番号 図版番号	器種	法量 (m)	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第38図1 図版21-2-1	甕	厚0.5	球状/外面は黒く燻けている	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面粗いハケ目調整/外面斜方向にハケ目調整	P3	胴部上半破片
第38図2 図版21-2-2	甕	厚0.5	途中ややくびれをもつ/内面を中心に黒色	胎土は暗茶褐色を基調	褐色粒子・白色砂粒を含む	内面粗いハケ目調整/外面縦方向にハケ目調整	P3	胴部上半破片
第38図3 図版21-2-3	甕	厚0.5	口唇部はハケ状工具により面取り後外面に刻みがまわる/口縁部は外反する/内外面黒色	胎土は暗茶褐色を基調	白色砂粒・小石を含む	内面：横方向にハケ目調整/外面：縦方向にハケ目調整	P4	口縁部破片

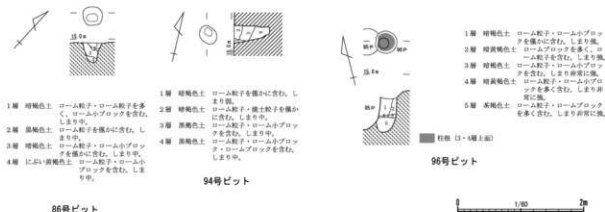
第17表 4号掘立柱建築遺構出土土器一覧

1・2はP3出土の壘形土器、3はP4出土の壘形土器である。

#### (4) ビット (第39図、第18表)

調査区域内から検出されたビットは、全部で152本と数多くのビットが存在するが、その内訳は、縄文時代が104本、弥生時代後期～古墳時代前期が5本、中世以降が43本と今回の調査では、縄文時代の所産と思われるビットが多かった。

弥生時代後期～古墳時代前期の所産と思われるビット5本(86・94・96・118・120P)については、ここでは、記述はしなかったが、ビットの基本内容は、第18表に示した。



第39図 ビット(1/60)

遺構名	位置	平面形	規模 (m)			覆土及び特徴等	主な遺物
			長軸	短軸	深さ		
86 P	(C-2)G	圓形	31	29	35	4層	なし
94 P	(C-3)G	楕円形	31	25	57	4層	なし
96 P	(D-2)G	楕円形	35	35	63	5層/95Pに切られる	なし
118 P	(C-3)G	圓形	33	26	25	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土	なし
120 P	(C-4)G	楕円形	30	23	16	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土/146Pを切る	なし

第18表 弥生時代後期～古墳時代前期のビット一覧

## 第5節 中世以降の遺構・遺物

### (1) 概要

本地点において中世以降と思われる遺構は、土坑13基(766～775・778・779・784 D)・ビット43本(1～20・22・23・26・27・31～34・36～38・78・80～85・88・89・92・93・95 P)が検出された。

特に766 Dについては、壘状の土坑墓であり、内部から人骨・銅銭6枚が出土した。なお、(D-7)グリッドから検出された深い掘り込みについては、穴蔵として遺構と扱わなかった。

## (2) 土坑

### 766号土坑

**遺構** (第40図、第19表)

**位置** (C-7) グリッド。

**検出状況** 770 Dとの切り合いは不明である。

**構造** 平面形：円形。規模：長軸0.91m／短軸0.83m／深さ126cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-28°-W。

**覆土** 分層による断面観察はできなかった。

**遺物** 人骨・銅銭6枚が出土した。人骨の分析は、付編(114ページ)を参照。

**時期** 近世(17世紀前半)。

**所見** 本土坑は人骨が出土したことから、土坑墓であり、銅銭6枚は六文銭と考えられる。銅銭は1・2の2枚が渡来銭で、他の4枚は古寛永であることから、本遺構は近世初頭の時期のものと考えられる。

**遺物** (第42図1～6、図版22-1-1～6、第20表)

**銅銭** (第42図1～6、図版22-1-1～6、第20表)

1～6は六文銭である。1は開通元寶、2は天聖元寶、3～6は寛永通寶である。

### 767号土坑

**遺構** (第40図、第19表)

**位置** (C-8) グリッド。

**検出状況** 768・769 Dを切る。大部分が調査区外である。

**構造** 平面形：不明。規模：不明／深さ38cm。壁：70°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：不明。

**覆土** 5層(2～6層)に分層される。

**遺物** 出土しなかった。

**時期** 覆土の観察から、中世以降と思われる。

### 768号土坑

**遺構** (第40図、第19表)

**位置** (B・C-7・8) グリッド。

**検出状況** 767 Dに切られる。大部分が調査区外である。

**構造** 平面形：不明。規模：不明／深さ38cm。壁：72°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：N-78°-W。

**覆土** 5層(2～6層)に分層される。

**遺物** 出土しなかった。

**時期** 覆土の観察から、中世以降と思われる。

## 769号土坑

**遺 構** (第40図、第19表)

**位 置** (C-8) グリッド。

**検出状況** 767 Dに切られる。大部分が調査区外である。

**構 造** 平面形：不明。規模：不明／深さ63cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：不明。

**覆 土** 4層(7～10層)に分層される。

**遺 物** 出土しなかった。

**時 期** 覆土の観察から、中世以降と思われる。

## 770号土坑

**遺 構** (第40図、第19表)

**位 置** (C・D-7) グリッド。

**検出状況** 2 Pを切る。766 Dとの切り合いは不明。南端は穴蔵により破壊されている。

**構 造** 平面形：溝状の長方形。規模：長軸5.19m／短軸0.83m／深さ23cm。壁：75°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：N-20°-E。

**覆 土** 3層(1～3層)に分層される。

**時 期** 中世以降。

**遺 物** 出土しなかった。

**時 期** 覆土の観察から、中世以降と思われる。

## 771号土坑

**遺 構** (第40図、第19表)

**位 置** (D-6) グリッド。

**検出状況** 切り合い関係はなく、単独の検出である。

**構 造** 平面形：長方形。規模：長軸1.71m／短軸0.69m／深さ54cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-12°-E。

**覆 土** 6層(1～6層)に分層される。

**遺 物** 鉄製品(釘)1点が出土した。

**時 期** 覆土の観察から、中世以降と思われる。

**遺 物** (第42図1、図版22-1-1)

**鉄 製 品** (第42図1、図版22-1-1)

1は釘である。長さ4.1cm・幅0.6cm・厚さ0.5cm・重さ2.4g。先端部は欠損している。

## 772号土坑

**遺 構** (第41図、第19表)

**位 置** (B～D-6・7) グリッド。

**検出状況** 8 Pを切る。北側部分はさらに延びるものと思われる。

**構 造** 平面形：溝状の長方形。規模：長軸5.70m／短軸0.79m／深さ36cm。壁：ほぼ垂直に立



ち上がる。長軸方位：N-17°-E。

[覆 土] 3層（1～3層）に分層される。

[遺 物] 陶器1点（蓋）・土器1点（焙烙）が出土した。

[時 期] 近世以降。

[遺 物] (図版22-1-1・2、第21表)

[陶器・土器] (図版22-1-1・2、第21表)

1は陶器で蓋、2は土器で焙烙である。

### 773号土坑

[遺 構] (第41図、第19表)

[位 置] (C-5・6) グリッド。

[検出状況] 中央南部分は攪乱により破壊されている。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸2.47m/短軸0.69m/深さ11cm。壁：80°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：N-2°-E。

[覆 土] 単層（1層）。

[遺 物] 陶器1点（皿）が出土した。

[時 期] 中世（14世紀）。

[遺 物] (図版22-1-1、第21表)

[陶 器] (図版22-1-1、第21表)

1は陶器で皿である。

### 774号土坑

[遺 構] (第41図、第19表)

[位 置] (B・C-4・5) グリッド。

[検出状況] 南半部は186J内からの検出である。南端に段をもつことから、2基が重なったものと思われる。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸4.13m/短軸0.65m/深さ22cm（南端14cm）。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-11°-E。

[覆 土] 単層（1層）。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

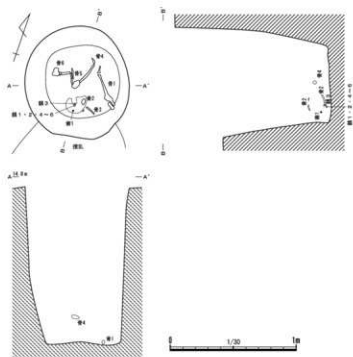
### 775号土坑

[遺 構] (第41図、第19表)

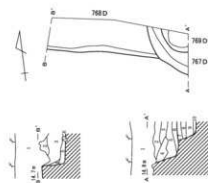
[位 置] (B-5) グリッド。

[検出状況] 切り合い関係はなく、単独の検出である。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸1.30m/短軸0.41m/深さ17cm。壁：80°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：N-87°-W。



766号土坑



A-A' 767D

- 1層 黄土
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロック・炭化動物骨を塊状に含む。しまりや中強。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロック・ロームブロックを含む。炭化物骨を塊状に含む。しまりや中強。
- 4層 暗褐色土 中強。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を多くローム小ブロックを含む。しまり強。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロックを塊状に含む。しまり中。

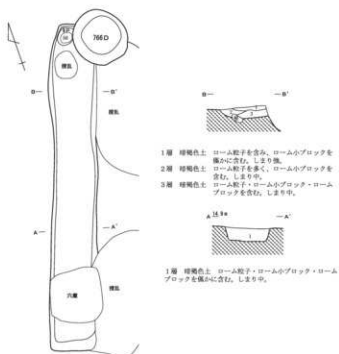
768D

- 7層 暗褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム粒子を含む。しまり強。
- 8層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまりや中強。
- 9層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり強。
- 10層 暗褐色土 ローム小ブロックを多く、ローム小ブロックを含む。

B-B' 768D

- 1層 表土及び埋土。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロック・粘土を塊状に含む。しまり非常に強い。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を含む。粘土粒を塊状に含む。しまり強。
- 4層 暗褐色土 ローム小ブロック・ロームブロックを塊状に含む。しまり中。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を塊状に含む。しまり強。
- 6層 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。ローム粒子・ロームブロックを塊状に含む。しまり中。

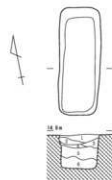
767・768・769号土坑



770号土坑

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含む。ローム小ブロックを塊状に含む。しまり強。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む。しまり中。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり中。

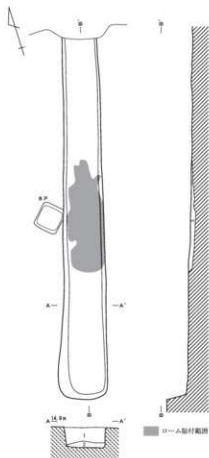
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを塊状に含む。しまり中。



- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを塊状に含む。しまり中。
- 2層 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。ローム粒子を塊状に含む。しまり中。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を塊状に含む。しまりや中強。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロックを塊状に含む。しまりや中強。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を含む。しまり中。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを塊状に含む。しまり中。

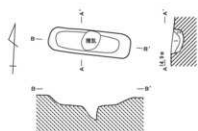
771号土坑

第40図 土坑1 (1/30・1/60)



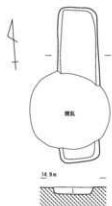
- 1層 黒褐色土 灰褐色土ブロックを多く、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりや中塊。  
 2層 灰褐色土 ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。しまり塊。  
 3層 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。

772号土坑



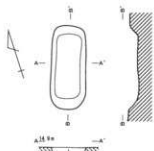
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を含む。しまり中。  
 2層 暗褐色土 ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含む。しまりや中塊。

775号土坑



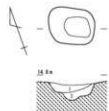
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を含み、ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む。しまり中。

773号土坑



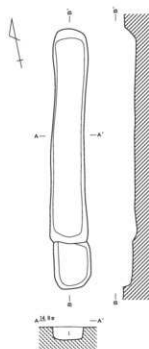
- 1層 黒褐色土 ローム小ブロックを含み、ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む。しまり中。

778号土坑



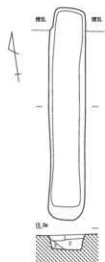
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり中。  
 2層 暗褐色土 ロームブロックを多く、ローム粒子を含む。しまり中。

779号土坑



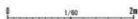
- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む。しまり中。

774号土坑



- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりや中塊。  
 2層 暗褐色土 ローム粒子を含む。しまり中。  
 3層 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。しまり中。

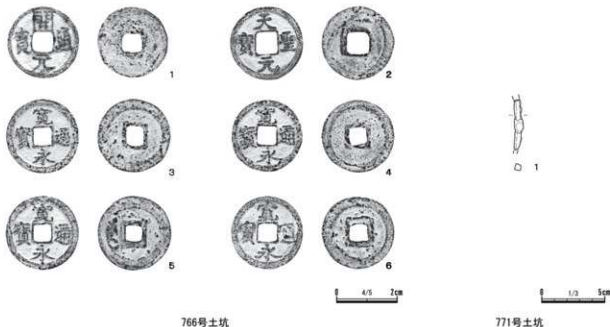
784号土坑



第41図 土坑2 (1/60)

遺構名	位置	平面形	規模 (m)			長軸方位	覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ				
766D	(C-7)G	円形	0.91	0.83	126	N-28°-W	770Dとの新旧不明/土層固なし	人骨・銭貨(6枚)	近世 (17世紀前半)
767D	(C-8)G	不明	不明	不明	38	不明	5層/768・769Dを切る/大部分が調査区外	なし	近世以降
768D	(B-C-7・8)G	不明	不明	不明	38	N-78°-W	5層/767Dに切られる/大部分が調査区外	なし	近世以降
769D	(C-8)G	不明	不明	不明	63	不明	4層/767Dに切られる/大部分が調査区外	なし	近世以降
770D	(C-D-7)G	溝状	5.19	0.83	23	N-20°-E	3層/9P・現代の穴蔵に切られ、2Pを切る/766Dとの新旧不明	なし	近世以降
771D	(C-6)G	長方形	1.71	0.69	54	N-12°-E	6層	鉄製品1点(釘)	近世以降
772D	(B-D-6・7)G	溝状	(5.7)	0.79	36	N-17°-E	3層/8Pを切る/北側は調査区外へ延びる	陶器1点(蓋)・土器1点(磁塔)	近世以降
773D	(C-5・6)G	長方形	2.47	0.69	11	N-2°-E	単層/中央南部分を覆瓦により破壊される	陶器1点(皿)	中世 (14世紀)
774D	(B-C-4・5)G	溝状	4.13	0.65	22 (南端14)	N-11°-E	単層/南端に段をもつことから、2基が重なったものと思われる	なし	近世以降
775D	(B-5)G	楕円形	1.30	0.41	17	N-87°-W	2層/中央部分を覆瓦により破壊される	陶器1点(志野皿)	中世 (15世紀後半)
778D	(C-D-4)G	長方形	1.33	0.56	25	N-19°-E	単層	なし	近世以降
779D	(B-5)G	長方形	0.75	0.57	22	N-70°-W	2層	なし	近世以降
784D	(B-C-4)G	溝状	3.36	0.63	32	N-10°-E	3層/北端を覆瓦により破壊される	なし	近世以降

第19表 中世以降の土坑一覧



766号土坑

771号土坑

第42図 土坑出土遺物(4/5・1/3)

図版番号 図版番号	銭貨名	外径	方孔一辺	厚さ	重量	初鋳年	遺存状態	出土位置	備考
第42図1 図版22-1-1	開通元寶	2.4	0.6	0.1	3.5	唐(621)	完形品	覆土中(坑底上4cm)	
第42図1 図版22-1-2	天聖元寶	2.4	0.7	0.1	2.5	北宋(1023)	完形品	覆土中(坑底上4cm)	
第42図1 図版22-1-3	寛永通寶	2.4	0.5	0.1	3.2	寛永12(1635)	完形品	覆土中(坑底上5cm)	古寛永
第42図1 図版22-1-4	寛永通寶	2.4	0.6	0.1	4.1	寛永12(1635)	完形品	覆土中(坑底上4cm)	古寛永
第42図1 図版22-1-5	寛永通寶	2.4	0.5	0.1	3.6	寛永12(1635)	完形品	覆土中(坑底上4cm)	古寛永
第42図1 図版22-1-6	寛永通寶	2.4	0.5	0.1	3.5	寛永12(1635)	完形品	覆土中(坑底上4cm)	古寛永

(単位: cm, g)

第20表 766号土坑出土銭貨一覧

[覆 土] 2層(1・2層)に分層される。

[遺 物] 陶器1点(皿)が出土した。

[時 期] 中世(15世紀後半)。

[遺 物] (図版22-1-1、第21表)

[陶 器] (図版22-1-1、第21表)

1は陶器で志野皿である。時期は15世紀後半である。

### 778号土坑

[遺 構] (第41図、第19表)

[位 置] (C・D-4)グリッド。

[検出状況] 186 J 炉跡を切ったの検出である。

[構 造] 平面形: 長方形。規模: 長軸1.33m/短軸0.56m/深さ25cm。壁: 75°の角度をもち立ち上がる。長軸方位: N-19°-W。

[覆 土] 単層(1層)。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

### 779号土坑

[遺 構] (第41図、第19表)

[位 置] (B-5)グリッド。

[検出状況] 切り合い関係はなく、単独の検出である。

[構 造] 平面形: 長方形。規模: 長軸0.75m/短軸0.57m/深さ22cm。壁: 68°の角度をもち立ち上がる。長軸方位: N-70°-W。

[覆 土] 2層(1・2層)に分層される。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

## 784号土坑

**遺構** (第41図、第19表)

**位置** (B・C-4) グリッド。

**検出状況** 北側部分は崩乱により破壊されている。

**構造** 平面形：溝状の長方形。規模：長軸3.36m/短軸0.63m/深さ32cm。壁：80°の角度をもち立ち上がる。長軸方位：N-10°-E。

**覆土** 3層(1~3層)に分層される。

**遺物** 出土しなかった。

**時期** 覆土の観察から、中世以降と思われる。

## (3) ビット (第4・43図、図版22-2、第21・22表)

該期の所産と思われるビット43本(1~20・22・23・26・27・31~34・36~38・78・80~85・88・89・92・93・95P)について、ここでは、すべて記述はしなかったが、そのうち遺物を出土した8Pについて説明することとする。その他のビットの基本内容は第22表に示した。

## 8号ビット

**遺構** (第4図、第22表)

**位置** (C-6) グリッド。

**検出状況** 772Dに切られ、601Yを切る。

**構造** 平面形：隅丸方形。規模：長軸43cm/短軸40cm/深さ11cm。

**覆土** 2層に分層された。

**遺物** 陶器1点(土瓶蓋)・土器1点(皿)が出土した。

**時期** 近世(19世紀以降)。

**遺物** (図版22-2、第21表)

**陶器・土器** (図版22-2-1・2、第21表)

1は陶器で益子焼の土瓶蓋、2は土器で皿である。

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
図版22-1-1	772D	陶器	蓋	厚0.6	内外面に鉄軸/内面口縁部に返しあり/胎土の色調は黄褐色/胎土は精錬されている/口縁部小破片/覆土中からの出土	在地系	近世以降
図版22-1-2	772D	土器	焙烙	厚0.6	平底/色調は暗茶褐色/胎土に砂粒を含む/底部小破片/覆土中からの出土	在地系	近世以降
図版22-1-1	773D	陶器	皿	厚0.7	内面及び外面口縁部付近に鉄軸/胎土の色調は黄白色/胎土に白色砂粒・砂粒を僅かに含む/体部小破片/覆土中からの出土	瀬戸	中世 (14c)
図版22-1-1	775D	陶器	皿	厚0.5	志野軸/胎土の色調は淡褐色/胎土に黒色粒子を僅かに含む/口縁部小破片/覆土中からの出土	瀬戸	中世 (15c後半)
図版22-2-1	8P	陶器	土瓶蓋	厚0.5	外面に風景文/胎土の色調は黄白色/胎土は精錬されている/体部小破片/覆土中からの出土	益子	近世 (19c後半)
図版22-2-2	8P	土器	皿	高1.2	器形は底部から口縁部にかけて外傾する/平底/底部は回転糸切り痕あり/色調は明褐色/胎土は精錬されている/口縁部~底部小破片/覆土中からの出土	在地系	近世 (19c以降)

第21表 中世以降の遺構出土陶器・土器一覧



遺構名	位置	平面形	規模 (cm)			覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
1 P	(E-7)G	楕円形	46	23	71	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
2 P	(D-7)G	楕円形	32	30	36	2層	なし	中世以降
3 P	(D-7)G	楕円形	31	不明	72	4層/4・5 Pを切る	なし	中世以降
4 P	(D-7)G	楕円形	23	17	55	5 Pを切り、3Pに切られる/土層注記なし	なし	中世以降
5 P	(D-7)G	隅丸方形	35	34	64	2層/3・4 Pに切られる	なし	中世以降
6 P	(C-7)G	隅丸方形	31	26	70	4層/10 Pを切る	なし	中世以降
7 P	(C-7)G	隅丸方形	84	56	71	8層/10 Pを切る	なし	中世以降
8 P	(C-6)G	隅丸方形	43	40	11	2層/1層：ローム粒子を含み、焼土粒子を僅かに含む暗褐色土、2層：ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土	陶器1点(土器蓋)、土器1点(皿)	近世(19世紀以降)
9 P	(C-7)G	楕円形	29	24	56	2層/1層：ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロックを含む暗褐色土、2層：ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロックを僅かに含む暗褐色土	なし	中世以降
10 P	(C-7)G	楕円形	不明	26	56	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土/6・10 Pに切られる	なし	中世以降
11 P	(C-7)G	円形	32	31	75	上層はローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土を基調	なし	中世以降
12 P	(C-7)G	隅丸方形	40	36	65	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む、ロームブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
13 P	(C-7)G	楕円形	不明	32	44	土層注記なし	なし	中世以降
14 P	(C-7)G	隅丸方形	30	26	19	単層：ローム粒子・ロームブロックを含み、ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土	なし	中世以降
15 P	(C-7)G	楕円形	不明	20	58	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土	なし	中世以降
16 P	(C-7)G	隅丸方形	32	31	33	土層注記なし	なし	中世以降
17 P	(C-7)G	隅丸方形	28	27	34	土層注記なし	なし	中世以降
18 P	(C-7)G	隅丸方形	30	27	37	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
19 P	(C-4)G	隅丸方形	39	28	56	5層	なし	中世以降
20 P	(D-7)G	楕円形	42	40	69	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
22 P	(D-7)G	楕円形	36	27	44	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
23 P	(D-7)G	隅丸方形	43	31	63	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む、ロームブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
26 P	(D-E-6)G	不明	不明	不明	65	3層/南側は調査区外	なし	中世以降
27 P	(C-7)G	楕円形	36	29	44	土層注記なし	なし	中世以降
31 P	(C-5)G	隅丸方形	27	25	26	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
32 P	(D-4)G	楕円形	35	27	38	5層/33Pを切る	なし	中世以降
33 P	(D-4)G	隅丸方形	不明	30	30	2層/32Pに切られる	なし	中世以降
34 P	(C-5)G	楕円形	27	23	24	単層：ローム粒子を多く含む、ローム小ブロックを含み、ロームブロックを僅かに含む暗褐色土	なし	中世以降
36 P	(C-5)G	楕円形	50	31	21	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
37 P	(D-4)G	隅丸方形	24	23	36	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土	なし	中世以降
38 P	(C-D-5)G	楕円形	35	28	7	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土	なし	中世以降
78 P	(C-2)G	隅丸方形	33	33	45	3層	なし	中世以降
80 P	(B-2)G	楕円形	36	32	18	2層	なし	中世以降
81 P	(C-3)G	楕円形	39	35	74	3層	なし	中世以降
82 P	(C-2)G	隅丸方形	26	24	53	3層	なし	中世以降
83 P	(C-D-2)G	楕円形	30	28	56	単層：ローム粒子を多く含む、ローム小ブロックを含む暗褐色土	なし	中世以降
84 P	(C-2)G	楕円形	41	34	56	3層	なし	中世以降
85 P	(C-2)G	隅丸方形	29	24	57	2層	なし	中世以降
88 P	(D-2)G	楕円形	40	35	40	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む黒褐色土	なし	中世以降
89 P	(C-2)G	隅丸方形	26	24	29	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土	なし	中世以降
92 P	(D-3)G	隅丸長方形	62	45	31	2層/93Pを切る	なし	中世以降
93 P	(D-3)G	円形	不明	18	10	単層：ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土/92Pに切られる	なし	中世以降
95 P	(D-2)G	円形	43	42	58	7層	なし	中世以降

第22表 中世以降のピット一覧



## 第6節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の遺物、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、中世以降の遺物に分類する。

(1) 縄文時代の遺物 (第44・45図、第46図34～53、図版22-3、図版23、図版24-41～53、第23・24表)

[石器] (第44図1～9、図版22-1～9、第23表)

1は石鏃、2は二次加工のある剥片、3は打製石斧、4は磨製石斧、5・6は磨石・敲石、7は敲石、8は敲石・磨石、9は磨石である。

[土器] (第45図10～33、第46図34～53、図版23-10～40、図版24-41～53、第24表)

本調査地点では主に縄文時代後期前葉の堀之内式土器を包含する遺物包含層及び同時期の遺構が多く検出され、遺構外出土遺物についても同様に堀之内式土器が主体であった。

10～13は早期後葉の条痕文系土器である。

14～16は前期中葉の羽状縄文系土器で、17は前期後葉の諸磯式土器である。

18・19は中期後葉の加曾利EIV式土器である。

20～53は後期前葉の堀之内式土器で、20～39が堀之内1式、40～50は堀之内2式である。51は粗製土器、52・53は縄文施文部の破片である。

(2) 弥生時代後期から古墳時代前期の土器 (第46図54～57、図版24-54～57、第25表)

54～56は甕形土器、57は甕形土器の破片である。

(3) 中世以降の遺物 (図版24-58～66、第26表)

[陶磁器・土器] (図版24-58～63、第26表)

58～60は磁器、61は陶器、62・63は土器である。

[土製品] (図版24-64)

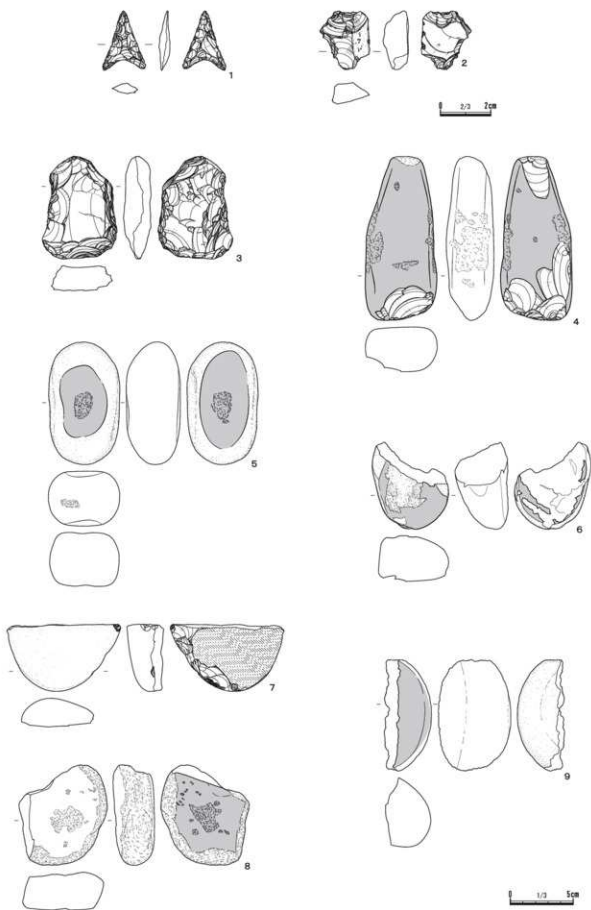
64は鞆の羽口と思われる。長さ5.3cm・幅3.4cm・厚さ1.2cm・重さ18.2g。色調は灰褐色を基調とし、表面は黒く燻されている。内面には圧痕が残る。(C-5)グリッドからの出土である。

[瓦] (図版24-65・66)

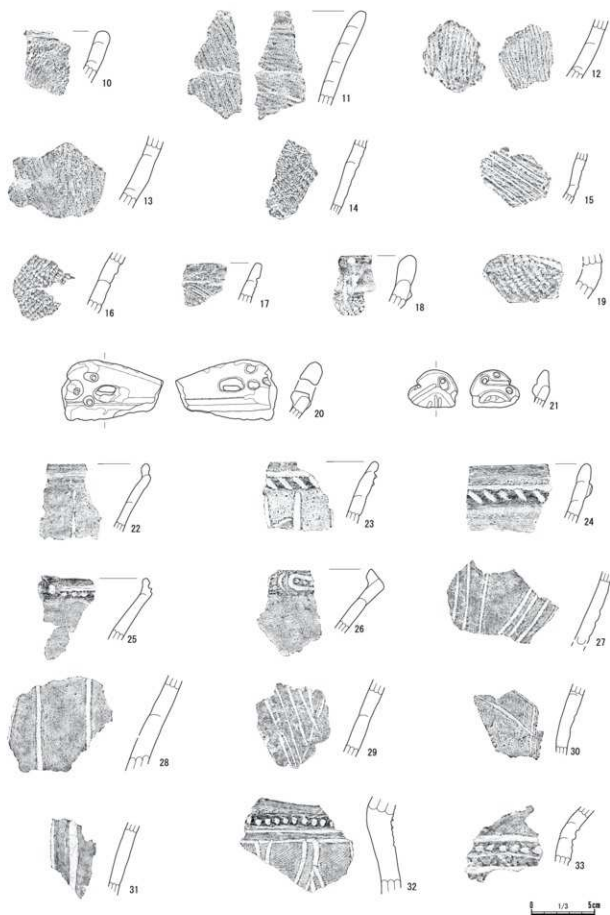
65・66は平瓦の破片である。

65は長さ5.0cm・幅4.6cm・厚さ1.9cm・重さ39g。色調は灰褐色を基調とし、表面の一部は黒色を呈する。確認調査の3Trからの出土である。

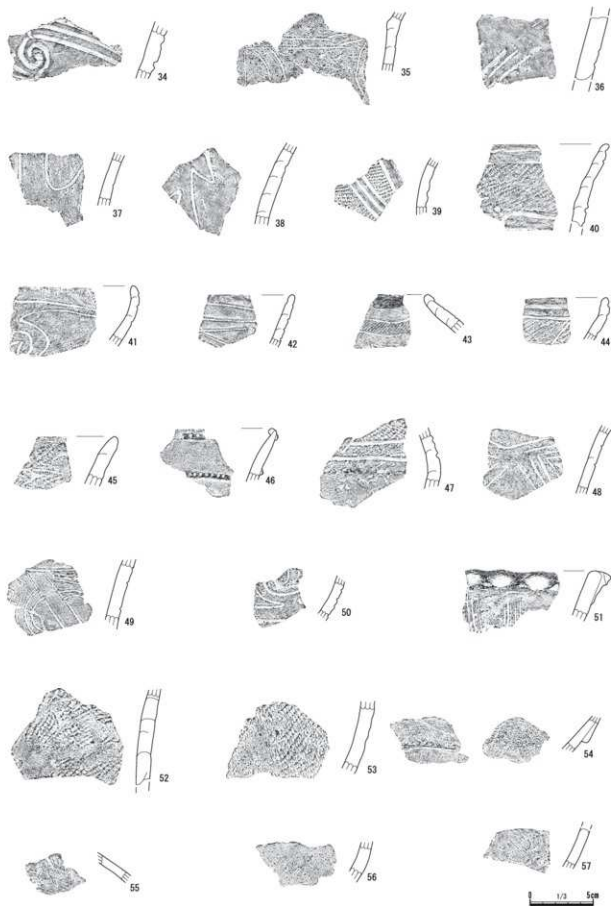
66は長さ7.6cm・幅4.3cm・厚さ1.9cm・重さ78g。色調は暗灰褐色を基調とし、表面は黒く燻されている。部分的にタール状の付着物が観察できる。遺構外出土である。



第44図 遺構外出土遺物 1 (2/3・1/3)



第45図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第46図 遺構外出土遺物3(1/3)

検出番号 図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第44図1 図版22-3-1	石鏡	頁岩	23.6	17.2	4.4	1.0	完形/凹基無茎/押圧割離による整形	601Y
第44図2 図版22-3-2	二次加工のある割片	黒曜石	23.3	20.2	10.1	4.1	完形/二次加工により打面を欠加/主要割離面側に二次割離面/背面に原磨面あり	601Y
第44図3 図版22-3-3	打製石斧	ホルンフェルス	81.6	59.4	22.2	127.1	完形/撥形/刃部は直刃/基部上端の一部が摩耗	601Y
第44図4 図版22-3-4	磨製石斧	砂岩	130.3	57.3	38.0	438.6	完形/乳棒状/下端部から縦方向の割離/左右両側縁に縦打痕/先端一部に被熱痕跡	601Y
第44図5 図版22-3-5	磨石・敲石	花崗岩	97.5	56.8	43.3	364.0	表裏面の中央に研磨面及び縦打痕/下端部に縦打痕	遺構外
第44図6 図版22-3-6	磨石・敲石	ホルンフェルス	69.1	61.0	42.2	177.8	上半を欠損/表裏面、左側面に研磨面/正面中央に縦打痕	602Y
第44図7 図版22-3-7	敲石	頁岩	53.5	90.7	29.5	176.7	上半を欠損/下端部に縦打痕/正面は研磨される/正面に微細な擦痕あり/裏面に割離面および鈚理面	601Y
第44図8 図版22-3-8	敲石・磨石	砂岩	79.6	70.3	32.9	245.9	上部・左側縁を欠損/表裏面・側縁部に縦打痕/裏面に研磨面	81P
第44図9 図版22-3-9	磨石	花崗岩	88.3	37.6	57.6	236.8	大半を欠損/正面に研磨面	601Y

(単位: mm, g)

第23表 遺構外出土石器一覽

検出番号 図版番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考	出土位置
					石	角	礫	砂		
第45図10 図版23-10	口縁	外面貝殻条痕文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代早期後葉 (条痕文系)				○	織・白	B-3G
第45図11 図版23-11	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい黄橙 10YR6/3	縄文時代早期後葉 (条痕文系)				○	織・白	(D-6)G
第45図12 図版23-12	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代早期後葉 (条痕文系)				○	織	磁石に付く 内面黒褐色 確認調査 2Tr
第45図13 図版23-13	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい橙 7.5YR6/4	縄文時代早期後葉 (条痕文系)	○			○	織	磁石に付く 786D
第45図14 図版23-14	胴	羽状縄文/コンパス文	橙 2.5YR6/6	縄文時代前期中葉 (間山式)				○	織	内面灰褐色 601Y
第45図15 図版23-15	胴	半截竹管による肋骨文	浅黄橙 7.5YR8/4	縄文時代前期中葉 (黒石式)	○			○	織	繊維は微量 (D-5)G
第45図16 図版23-16	胴	羽状縄文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	縄文時代前期中葉 (羽状縄文系)				○	織・白	内面橙色 601Y
第45図17 図版23-17	口縁	口縁直下に沈線/半截竹管による横位の波状文	灰黄褐 10YR6/2	縄文時代前期後葉 (諸磯式)				○		(C-4)G
第45図18 図版23-18	口縁	微隆起による口縁部無文帯区画/縄文LR	浅黄橙 10YR8/3	縄文時代中期後葉 (加曾利EIV式)				○		遺構外
第45図19 図版23-19	胴	波状口縁/沈線による口縁部無文帯区画/縄文LR	にぶい褐 7.5YR6/4	縄文時代中期後葉 (加曾利EIV式)				○		確認調査 2Tr
第45図20 図版23-20	口縁	小波状口縁部に穿孔/内外面とも、孔の脇に3点の刺突文	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		遺構外
第45図21 図版23-21	口縁	内外面に刺突・穿孔を伴う小突起/沈線による懸垂文	にぶい橙 7.5YR7/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		601Y
第45図22 図版23-22	口縁	口縁部内屈/口縁外屈に沈線/沈線による懸垂文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		内面にぶい橙色 遺構外
第45図23 図版23-23	口縁	口縁外屈に沈線/沈線下部を厚直し斜位の刻み/沈線による懸垂文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)		○	○			細線の混入は顕著 遺構外
第45図24 図版23-24	口縁	口縁外屈に斜位の刻みを伴う隆帯/隆帯上部に沈線	褐灰 5YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		(C-4)G
第45図25 図版23-25	口縁	口縁部内屈/口縁外屈に沈線/斜曲部外側に刺突文/刺突文を伴う小突起	灰褐 7.5YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)				○		内面にぶい赤褐色 確認調査 3Tr

○ 角: 角閃石・輝石 礫: 黒礫 砂: 砂粒 織: 織物 白: 白色胎土

第24表 遺構外出土縄文土器一覽(1)

探洞番号 図版番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	動土混入物				備考	出土位置
					石	角	磁	砂		
第45図26 図版23-26	口縁	浅鉢/波状口縁/口縁部内面/口縁外周に沈線区画し、列点文	灰褐 5YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)		○	○			(C-3)G
第45図27 図版23-27	胴	4本単位の沈線による懸垂文	にぶい黄橙 10YR7/3	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○			遺構外
第45図28 図版23-28	胴	沈線による懸垂文	褐灰 10YR4/1	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)		○	○		磁石に付く 内面の彩彫顯著	遺構外
第45図29 図版23-29	胴	沈線による懸垂文	灰黄褐 10YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○		内面にぶい橙色	784D
第45図30 図版23-30	胴	沈線文	灰褐 5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○		内面にぶい橙色	遺構外
第45図31 図版23-31	胴	沈線による懸垂文	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)		○	○		磁石に付く	(D-6)G
第45図32 図版23-32	頸	括れ部分に刺突を伴う隆線/縄文LR/沈線による弧線文	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○			遺構外
第45図33 図版23-33	頸	括れ部分に3本の沈線/上の沈線間に刺突突文	灰褐 5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○		磁石に付く	遺構外
第46図34 図版23-34	胴	渦巻文と繋がる弧線文	黒褐 10YR2/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		内面にぶい黄褐色	遺構外
第46図35 図版23-35	頸	括れ部分的に2本の横位沈線/沈線による懸垂文・弧線文	にぶい橙 7.5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○			602Y
第46図36 図版23-36	胴	3本単位の沈線による斜行文	灰黄褐 10YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)		○	○		磁石に付く	遺構外
第46図37 図版23-37	胴	沈線による懸垂文	にぶい橙 7.5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)			○		磁石に付く	遺構外 (C-4)G
第46図38 図版23-38	胴	沈線による龜甲状の懸垂文/外面に採状物貫付着	赤褐 5YR4/6	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		磁石に付く	遺構外
第46図39 図版23-39	胴	縄文LR地に3本単位の沈線による懸垂文・弧線文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内1式)	○	○	○		磁石に付く	確認調査 3Tr
第46図40 図版23-40	口縁	縄文LRと沈線区画・円形刺突文による横位の文様帯	にぶい赤褐 5YR4/3	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○	○	○			遺構外
第46図41 図版24-41	口縁	縄文LRと沈線区画による渦巻文	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○	○	○			601Y
第46図42 図版24-42	口縁	沈線区画による三角文	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○			遺構外
第46図43 図版24-43	口縁	縄文LRと沈線による区画文	黒褐 5YR3/1	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○		内面暗赤褐色	遺構外
第46図44 図版24-44	口縁	縄文LRに沈線による三角文	灰褐 7.5YR5/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○		内面にぶい橙色	確認調査 2Tr
第46図45 図版24-45	口縁	縄文LR	にぶい赤褐 5YR5/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○	○	○			遺構外
第46図46 図版24-46	口縁	口唇部内面/2段の粗線文	橙 2.5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○	○	○		内面にぶい橙色	遺構外
第46図47 図版24-47	胴	鉢/胴部内面/縄文LRに横位2段の沈線文	にぶい橙 5YR7/4	縄文時代後期前葉 (堀之内2)～後期中期 (加曽利B1式)	○	○	○		内面褐灰色	601Y
第46図48 図版24-48	胴	縄文LRと沈線によるX字状文	橙 5YR6/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○			確認調査 2Tr
第46図49 図版24-49	胴	沈線による斜行文・弧線文(横位突出文)	灰褐 7.5YR4/2	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)	○	○	○		内面にぶい橙色	遺構外
第46図50 図版24-50	胴	縄文LRと沈線区画による渦巻文	橙 5YR7/6	縄文時代後期前葉 (堀之内2式)			○			遺構外 (C-6)G
第46図51 図版24-51	口縁	口唇部外面に押捺を伴う粗線文/縦位の条線文	にぶい褐 7.5YR6/4	縄文時代後期 (粗製土器)			○			遺構外
第46図52 図版24-52	胴	縄文LR	にぶい橙 5YR6/4	縄文時代後期	○	○	○			遺構外
第46図53 図版24-53	胴	縄文LR	黒 10YR2/1	縄文時代後期	○	○	○		内面赤褐色	遺構外

◎：角閃石・輝石 濃：磁鉄 砂：砂粒 白：白色乾土

第24表 遺構外出土縄文土器一覽(2)

図版番号 図版番号	器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	調整	遺存度	出土位置
第46図54 図版24-54	甗	厚0.7 (複合部 1.1)	幅広複合口縁／内面に縦目状器 糸文を器文後下部に2条の自縄 結器文をまわす／外面は粗文／ 内外面無文部に赤彩	胎土は暗黄褐色 を基調	砂粒を含む	内面：粗文部はへら磨き調 整／外面：複合部はへら磨 き調整、複合部直下はハ ケ目調整後へら磨き調整	口縁部 破片	遺構外
第46図55 図版24-55	甗	厚0.6	細沈線による副帯状文後に縦目 状器糸文が粗文／円形赤彩文あり ／外面無文部に赤彩	胎土は暗黄褐色 を基調	砂粒を含む	内面：指調による押捺痕 (指紋あり)	胴部上 半破片	確認調査 2Tr
第46図56 図版24-56	甗	厚0.8	外面に黒く煤が付着	胎土は暗茶褐色 を基調	黄褐色粒子・砂 粒・小石を含む	内面：へらナデ／外面：ハ ケ目調整	胴部下 半破片	80P
第46図57 図版24-57	甗	厚0.6	輪積み痕あり	暗黄褐色を 基調	砂粒・小石を含む	内面：へらナデ／外面：ハ ケ目調整	胴部下 半破片	772D

第25表 遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期の土器一覽

図版番号	種別	器種 (cm)	法量	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
図版24-58	甗器	甗	厚0.4	染付／化学コハルト／外面：風景文／口縁部小破片	瀬戸	確認調査 2Tr	近世 (19c後半)
図版24-59	甗器	皿	厚0.3	染付／化学コハルト／波状口縁／内面：器文／口縁部小破片	肥前系	遺構外	近世 (19c後半)
図版24-60	甗器	皿	高1.8	型紙摺り／高台あり／内面：草花文／口縁部～底部破片	肥前系	遺構外	近世 (19c後半)
図版24-61	陶器	播鉢	厚0.7	内外面に鉄軸／内面口縁部直下に受け口／胎土の色調は黄白色／胎 土は精錬されている／口縁部破片	瀬戸	遺構外	中世 (15c)
図版24-62	土器	手煙	厚1.3	口縁部がやや肥厚／底部との境にややくびれをもち、口縁部はほぼ 垂直に立ち上がる／色調は明茶褐色／胎土に雲母・角閃石・砂粒を 含む／口縁部～底部破片	在地系	確認調査 3Tr	近世以降 (19c以降)
図版24-63	土器	焙烙	厚0.7	平底／色調は淡茶褐色を基調／胎土に砂粒を含む／底部破片	在地系	601Y	近世以降

第26表 遺構外出土陶磁器・土器一覽

## 第3章 調査のまとめ

本書は、平成30年度に発掘調査を実施した、西原大塚遺跡第216地点の調査成果をまとめたものである。ここでは、時代別に調査成果をまとめることにする。

### 第1節 縄文時代の調査成果

#### (1) 186号住居跡について

本地点における縄文時代の遺構は、住居跡1軒(186J)、炉穴2基(17・18FP)・土坑31基(776・777・780～783・785～809D)、ピット104本(21・24・25・28～30・35・39～77・79・87・91・92・98～117・119・121～152)であった。

特に今回検出された縄文時代後期の遺構・遺物については、市内における検出例では希薄な状況の中、西原大塚遺跡内では、本地点の南側に隣接する第207地点の調査により、すでに縄文時代後期の遺構・遺物が検出されていたことから、今回の調査においても検出される想定はできていたものである。

本地点の調査区内には、やや黒味を帯びた遺物包含層が調査区内に広がっており、186Jの他に土坑、ピットからも縄文時代後期前葉の堀之内1式土器が安定して出土する状況であった。

ここでは、市内で2例目となる後期前葉の堀之内1式期の186Jについての基本構造について若干まとめることとする。この住居跡については、当初から住居跡としての認識はなく、調査途中から柱穴の配置が円形に回ることに気付いてからの判明であった。そのため、住居構造の詳細は、例えば住居跡の覆土については遺物包含層との分別が難しく、柱穴についても結論的には住居跡に伴うものと伴わないものを明確に分別できているとは言えない。

住居構造について、平面形は円形と思われる。規模はピット配列から、直径は9.0m前後を測る。炉跡はピット配列中央やや東寄りから検出され、規模は長軸1.95m・短軸1.56mの巨大なものがある。中央付近が深さ54cmとピット状に深くなっており、壁際は一段浅く、20cm程の深さでテラス状に平坦になっており、立ち上がりは被熱によりよく赤化していた。柱穴は検出されたピットのうち配列から80本を本住居跡のものとした。埋裏は炉跡東側から検出され、土器は堀之内1式期の深鉢(第12図1)で、正置状態で埋められていた。掘り込みの規模は、長軸46cm・短軸39cm・深さ36cmを測る。

また、推測であるが、柱穴の配列については、おそらく186Jに伴わないピットも存在するものと判断し、今回は平面形として円形と思われるものと表記したが、第5図の平面図を見ると住居南西部にもピットが存在し、その配列が住居の張り出しにも考えられる。そうすると、平面形としては、円形ではなく柄鏡形して捉えらなければならないが、今回はその結論を保留とする。

最後に市内における縄文時代後期の遺構検出例を示し、まとめにかえることにする。

#### 縄文時代後期前葉(称名寺式期)

①田子山遺跡第31地点 ※平成6年度調査(未報告)

184号土坑から称名寺1・2式土器が共伴。



②中野遺跡第85地点 ※平成25年度調査（未報告）

4号住居跡は称名寺1式期の柄鏡形住居で敷石を伴う可能性あり。土器・石器が出土。

縄文時代後期前葉（堀之内式期）

①西原大塚遺跡区画整理事業（33Ⅰ地点）（佐々木・内野・宮川 2009）

67号住居跡は堀之内1式期の住居跡で土器・石器が出土。

②西原大塚遺跡第204地点 ※平成26年度調査（未報告）

遺物包含層・土坑・ピットから堀之内1式土器を中心に出土。

③城山遺跡第79地点 ※平成25年度調査（未報告）

詳細は不明だが、土坑・陥穴・ピットから堀之内式土器が出土。

④西原大塚遺跡第216地点（本報告）

住居跡・土坑・ピット・遺物包含層が検出された。

186号住居跡は堀之内1式期で土器・石器が出土。

縄文時代後期中葉（加曾利B式期）

①西原大塚遺跡区画整理事業（34Ⅱ地点）（佐々木・内野・宮川 2009）

99号住居跡は加曾利B1式期の住居跡で土器・石器が多量に出土。

---

## 第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の調査成果

---

### (1) 601号住居跡出土の敷石について

601号住居跡で出土した敷石を肉眼観察した際、敷石の上下両端部および側縁に橙色付着物、下端部にはさらに白色付着物が認められた。これが何であるかを調べるために蛍光X線による分析を試みることにした。分析の結果、橙色付着物は粘土分が多い物質であり、白色付着物についても粘土質のものと判断された。敷石の石材は砂岩であることから、これらの付着物が石材由来のものではないことは理解でき、外部から付着した粘土であるとみてよいだろう。

では、なぜ敷石の端部や側縁部に粘土が付着しているのでしょうか。まず、敷石の状態であるが、正面上部の一部分と、縁辺を全周して敷打痕が認められる。また、上下両端部には、端部からの短い縦方向の剥離面が認められ、それらの剥離面は裏面の整形時のものと思われる横方向の大きな剥離面を切っている。さらに、正面上端部右端の縦方向の剥離面は右側縁の敷打痕を切っている。これらのことから、敷石裏面を整形後、上下両端、左右側縁を敷打により使用し、上下両端においては、敷打の衝撃により端部から縦方向の剥離が生じた、という使用状況が考えられる。そして、粘土が付着している面は上下両端部、側縁の敷打面・剥離面であることから、敷打の対象物は粘土である。すなわち、粘土を「敷く」行為があったと考えられる。粘土にあたる物とは何か。粘土と言えば、土器が挙げられる。土器を「敷く」行為とすれば、土器を敷き壊すことが想定されるが、なぜ敷き壊す必要があったのか。そこで考えられるのが、土器製作時に土器胎土の混和材として利用される土器細粒（駒見 1999、小林 2004）である。土器細粒はシャモットとも呼ばれている（小出他 2012）。土器の胎土に土器細粒を混和させる製作技術は、弥生時代後期～古墳時代前期にみられるものである（小出他 2012）。601号住居跡出土の土器においても、壺形土器（第32図2・5・7、第33図18・20・27～31）、高環形

土器（第32図9）、甕形土器（第32図11～13・15、第33図33・34・第34図35・36・39）で土器細粒が認められ、西原大塚遺跡内でも土器細粒を混和材とした土器製作技術が存在する。以上の検討から、601号住居跡出土の敲石は、土器を細かく敲き潰し、土器細粒を生成した道具と推定されよう。

小出氏は土器細粒研究の課題のひとつとして「集落内における石皿・叩き石・磨石等生産用具」の解明を挙げている（小出他 2012）。601号住居跡出土の敲石は、住居西側の床面直上からの出土であり、本住居跡に伴うものと考えられる。弥生時代後期～古墳時代前期の所産であると共に、土器製作時の道具立てを示し、土器製作を集落内で行っていたことを指摘できる資料である。また、敲石の上下端部が使用により剥離していることは、硬質なものと同様の結果と考えられる。土器を敲打するだけでは剥離面が生じることは考えにくく、土器を細かく砕くために、石皿や台石などの硬質なものの上に土器を置いて敲打したと推測される。このことから、弥生時代後期～古墳時代前期の石皿や台石などといった礫石器の出土に注目することも重要であろう。

これまでに弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡から出土した石器はあるが、当該期に属する石器かどうか、その位置付けが難しい状況であった。それは弥生時代後期～古墳時代前期の石器がいかなるものか不明瞭であったことも一因しているが、その背景には、弥生時代イコール金属製品の使用という先入観により、石器は縄文時代の所産という考えが強く、過去の報告の多くの石器についても縄文時代のものとして取り扱われてきた可能性がある。

しかし、今回、弥生時代後期～古墳時代前期の601号住居跡から出土した敲石により、当該期における石器の利用が確実になったと言える。このことは、石器から金属製品への推移という歴史的な動向を考える上で、これまで認識されていなかった資料の発見の積み重ねによる慎重な判断が必要であることを示唆している。今回の資料の発見により、今後、弥生時代の石器についても再度考え直す手がかりを与えてくれたことは大きな成果である。

最後に、上記のように石皿や台石の存在も推測されていることもあり、今後は、弥生時代後期～古墳時代前期の石器に注目し、調査段階においては、石器の出土状況を土器等の遺物同様に記録していくことが必要とされる。そして、石器の使用痕跡を詳細に観察し、弥生時代後期～古墳時代前期の石器であるかを慎重に論ずべき時期に来ているものと考えられる。

## (2) 4号掘立柱建築遺構について

今回検出された4号掘立柱建築遺構は、8本の柱穴が八角形に配置された特殊タイプである。こうした特殊タイプの掘立柱建築遺構は、市内においては西原大塚遺跡内のみで検出されており、現在までに六角形・八角形の2タイプが確認されている（及川 2009）。

現在、今回の4号掘立柱建築遺構を含め、西原大塚遺跡では、以下の1～4号掘立柱建築遺構の4棟が検出されている。

- ① 1号掘立柱建築遺構：西原大塚遺跡第8地点（尾形・佐々木 1990）：八角形タイプ
- ② 2号掘立柱建築遺構：西原大塚遺跡第67地点（尾形・深井 2007）：六角形タイプ  
区画整理第130地点（佐々木・内野・宮川 2009）
- ③ 3号掘立柱建築遺構：西原大塚遺跡第169地点（徳留・尾形 2012）：六角形タイプ
- ④ 4号掘立柱建築遺構：西原大塚遺跡第216地点（本報告）：八角形タイプ

ここでは、これらの4棟の掘立柱建築遺構が集落内における住居跡の軒数との割合を考えてみるこ

にする。これについて、東京都渋谷区鶯谷遺跡（坂上 2009）では、住居跡27軒で4棟という割合で掘立柱建築遺構が検出されている。この報告書をまとめた坂上氏によれば、東京都板橋区や北区では100軒～300軒以上で1～8棟というように検出率が低い例と多摩ニュータウン№200遺跡のように72軒で10棟というように比較的に検出率が高い例があるとし、この違いの要因がどこにあるのか見当を要する課題としている。

そこで、西原大塚遺跡における掘立柱建築遺構の検出率を考えてみることにする。現在、本遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡は、令和2年3月25日現在で、620軒（註1）を超えている状況である。つまり、この住居跡620軒に対し、上記の検出された掘立柱建築遺構4棟だとすれば、およそ150軒に1棟の割合となる。これは、坂上氏が指摘する検出率が低い例と一致するものである。今回、西原大塚遺跡において検出された4棟の掘立柱建築遺構の位置関係を示していないが、1棟1棟の間隔が200～270m離れており、それらがおおよそ南北にややジグザグに分布して状況である。このジグザグの状況は、見かけ上では、例えば低地からの距離に関係するように立地条件によるものと思われ、西原大塚遺跡では台地の地形の曲線に合うように対応している感がある。また、検出された掘立柱建築遺構の周辺には、他に同様の掘立柱建築遺構は存在することはないと判断できることから、やはり、掘立柱建築遺構の検出率は相当に低いものと結論付けても間違いではないであろう。

このように集落内において、住居跡と掘立柱建築遺構が共存するものの西原大塚遺跡におけるこの掘立柱建築遺構の検出率の低さから考えれば、掘立柱建築遺構の役割として、当時の集落内の人達全員に供給する食糧を保管する施設と考えるのはまず有り得ない。このことから、現時点では、この掘立柱建築遺構については、一般的な食糧を保管するための倉庫ではなく、集落内における特別な意味をもつ施設と考えるのがごく自然であろう。

---

### 第3節 中世以降の調査成果

---

#### (1) 中世以降の遺構・遺物について

中世以降の遺構は、土坑13基（766～775・778・779・784 D）・ピット43本（1～20・22・23・26・27・31～34・36～38・78・80～85・88・89・92・93・95 P）が検出された。

ここでは、本地点から検出された遺構のうち、特に遺物が出土したことにより、時期がある程度特定できた遺構から中世以降の時期設定を行うことにする。

遺物の出土した遺構については、土坑では、766 Dから人骨に伴い銅銭6枚、771 Dから鉄製品1点（釘）、772 Dから陶器1点（蓋）・土器1点（焙格）、773 Dから陶器1点（皿）、775 Dから陶器1点（皿）、8 Pから陶器1点（土瓶蓋）・土器1点（皿）が出土している。

時期の特定につながる資料については、土坑墓である766 Dから、人骨に伴い銅銭6枚（六文銭）が出土している。銅銭の種類は、1が開通元寶（初鑄 唐621年）、2が天聖元寶（初鑄 北宋1023年）、3～6が寛永通寶（古寛永）で、1・2の2枚が渡来銭、3～6の4枚が寛永通寶（古寛永）である。近世（17世紀前半）の所産のものと考えられる。

次に773 Dから出土した陶器1点（皿）は、14世紀の瀬戸の灰軸皿で、775 Dから出土した陶器1点（皿）は、15世紀後半の瀬戸の志野皿である。

また、8 Pからは陶器1点（土瓶蓋）・土器1点（皿）が出土しているが、土瓶蓋は益子焼で近世の19世紀後半、土器皿は19世紀以降の年代が与えられる。

以上から、本地点から検出された中世以降の遺構を出土遺物から区分してみると、1期：中世（14世紀）、2期：中世（15世紀後半）、3期：近世（17世紀前半）、4期：近世（19世紀後半）と大きく時期区分が可能である。

## （2）周辺における中・近世の様相について

ここでは、本地点の周辺から得られた発掘調査の成果を参考にすることで、特に前項（1）で区分した1期～3期中・近世（14～17世紀前半）の様相を考えてみることにする。

### 1期：中世（14世紀）

平成30年度に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第213地点（尾形・大久保他 2019）から中世（15世紀中）に地盤整備ないし天地返しのような人為的な造成工事が行われた痕跡が発見され、造成工事前の15世紀より古い段階では、12世紀中頃の中国製の青磁瓶や14世紀前半の中国製の磁器鉢が出土している。また、遺構としては、751・752・763 Dの4基の地下式坑が該当する。

### 2期：中世（15世紀後半）

同じく西原大塚遺跡第213地点では、中世（15世紀中）の造成工事後の15世紀後半には、757 Dのように見込み「玉取獅子文」が描かれた中国製磁器皿が発見され注目されるものである。8 Wの井戸跡からも中国製の磁器皿・陶器皿・瓶・盤、朝鮮製の三島手の陶器皿、瀬戸の大皿などが出土し、15世紀後半の年代が与えられる。

### 3期：近世（17世紀前半）

本地点から350m程北東に位置する中道遺跡第26地点（佐々木・尾形 1996）から、人骨と銅銭を伴う土坑2基が検出されている。1基は36枚の銅銭を出土した28 D、もう1基は6枚の銅銭を出土した29 Dである。28 Dの36枚の銅銭は、1枚が永楽通寶、35枚が新寛永通寶（文銭）、29 Dの6枚は古寛永通寶であった。野澤 均氏によると29 Dは28 Dよりも古式の様相を呈している感もあるが、新旧関係を論ずるだけの資料に乏しいこともあり、両者の年代を江戸時代前半期としている。また、墳墓の構造については、平面形が円形で、底面がほぼ平坦になってことなどから、早桶状の施設を想定している。そして、これらの2基の墳墓について、「江戸時代前半期の農村地域における家墓的性格を持つ墳墓と考えられそうである」としている（野澤 1996）。このことから、本地点の766 Dについても野澤氏の見解と同様に時期は近世（江戸時代前半期）で、墳墓としてまとまった集中域をもたないことから、家墓的性格を持つ墳墓と考えられるものである。

以上、特に1・2期（14世紀～15世紀後半）の中世については、西原大塚遺跡第213地点の例を示したが、最新では今年度に発掘調査が実施された、西原大塚遺跡第220地点（大久保・尾形 2020）・第224地点（尾形・大久保・成島・西川 2020）がある。この2地点は本地点から100mほど北西に位置する比較的に近接な地点で、第220地点からは、15世紀後半の井戸跡、北西方向に走向する道路状遺構、段切状遺構が発見され、第224地点は、第220地点の北側に隣接し、第220地点と同一の道路状遺構と段切状遺構の続きが発見されている。

このように本地点周辺では、中世の特に15世紀前半から中頃にかけて、段切状遺構ないし天地返しのような人為的な造成工事が行われていることが判明しつつある。市内では中野遺跡第49地点（尾形・

深井・青木 2004)・第95地点(徳留・尾形・青木 2017)・第102地点(大久保・尾形他 2019)においても段切状遺構が発見され、土坑墓・火葬土坑・ピットなどが検出されている。おそらく、市内全体で見ても、台地斜面地の造成の時期については、現段階で15世紀前半～中頃のほぼ同時期に行われていることで一致する見方である。これらは偶発的な事象ではないものと推定されるが、今後はこうした事象が歴史的にどのような出来事に対応するかを検討する必要がある。

【註】

註1 西原大塚遺跡内における埋蔵文化財の保存措置においては、盛土保存により発掘調査を実施していない住居跡や未調査箇所を含め、遺跡全体では1000軒ほどにのぼると想像される。

【引用・参考文献】

- 大久保聡・尾形剛敏 2020『西原大塚遺跡第220地点 西原大塚遺跡第222地点 西原大塚遺跡第227地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第75集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・佐々木保俊 1990『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子 2007『志木市遺跡群Ⅰ5』志木市の文化財第37集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子・青木 修 2004『中野遺跡第49地点—東京電力式変電所の埋蔵文化財発掘調査報告—』志木市遺跡調査会調査報告第7集 志木市遺跡調査会
- 尾形剛敏・大久保聡・深井恵子・青木 修 2019『西原大塚遺跡第213地点 中野遺跡第102地点 中野遺跡第104地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第72集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡・成島一也・西川忠春 2020『西原大塚遺跡第224地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第74集 埼玉県志木市教育委員会
- 及川良彦 2009『掘立柱建物跡概観—亀甲形をどう見るか—(赤市時代の東京都事例を中心に)』『扶桑』田村晃一先生喜寿記念論文集(青山考古第25・26号合併号)
- 小出輝雄他 2012『(8) 馬場小室山遺跡の弥生式土器から見た「見沼文化」—「見沼シャモット弥生」研究の意義—』『一般社団法人日本考古学協会第78回総会 研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会
- 駒見佳容子 1999『上ノ宮遺跡出土の弥生土器について』『上ノ宮遺跡発掘調査報告書(第2次)』浦和市遺跡調査会報告書第261集 浦和市遺跡調査会
- 小林寛子 2004『土器細粒を含む土器の分布について』『あらかわ』第7号 あらかわ考古談話会
- 坂上直嗣 2009『第3節 弥生時代』『鷲谷遺跡』住友不動産株式会社 西松建設株式会社 大成エンジニアリング株式会社
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1996『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2009『西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 埼玉県志木市遺跡調査会
- 徳留彰紀・尾形剛敏 2012『西原大塚遺跡第169地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第47集 埼玉県志木市教育委員会
- 徳留彰紀・尾形剛敏・青木 修 2017『市場裏遺跡第23地点 城山遺跡第87地点 西原大塚遺跡第207地点 中野遺跡第95地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第68集 埼玉県志木市教育委員会
- 野澤 均 1996『第13章 中道遺跡第26地点の調査 第3節 小結』『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 埼玉県志木市教育委員会

[付 編]

自然 科学 分析



# I. 灰物質の材質分析

藤根 久・竹原弘展 (パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

西原大塚遺跡第216地点の調査では、縄文時代の186号住居跡の炉の覆土中で、灰と思われる白色塊を含んだ層が検出された。ここでは、これらの白色塊の顕微鏡観察と蛍光X線分析を行い、材質について検討した。

## 2. 試料と方法

分析試料は、186号住居跡の炉の灰質物2試料である(第27表)。なお、比較試料として、現生の樹木灰化試料3試料と、現生の草本灰化試料1試料を用いた。現生の木本材幹および草本茎は、マツル炉を用いて灰化した(図版25-3、4)。

分析No.	遺構	試料	堆積物の色調
1	186号住居跡の炉跡	24層	灰黄褐色(10YR 5/2)、白色塊混じり土、炭少量含む
2		25層	灰黄褐色(10YR 4/2)、白色小塊・ローム混じり土、炭少量含む

第27表 分析試料とその特徴

比較する現生の木本材幹には、スギ(*Cryptomeria japonica* D.Don, 山口県産)、ヤマダマ(*Morus australis* Poir., 岩手県産)、ヤマハノキ(*Alnus shirsuta*(Spach)Turcz.ex Pupr.var.*hirsuta*, 岩手県産)を用いた。また、現生の草本茎には、アサ(*Cannabis sativa* L., 群馬県産)を用いた。

分析では、白色塊の顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。

偏光顕微鏡観察は、白色塊を水で溶いてプレパラートを作製した。

蛍光X線分析は、典型的な白色塊を取り出し、マイラーフィルムを張った試料ホルダに入れて測定した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析計(エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製、SEA1200VX)を使用した。装置は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム(Rh)ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器(Vortex)である。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV(一次フィルタ無し・Cl用)・50kV(一次フィルタPb測定用・Cd測定用)の4条件で、測定時間は各条件500~1000s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物としてノンスタンダードのファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による定量分析を行った。

## 3. 結果

炉24層の灰質物(分析No.1)中には、最大約10mm角の白色塊が含まれていた。また、炉25層の灰質物(分析No.2)中には、最大約4mm角の白色塊が含まれていた(図版25-1a・2a)。

灰質物中の白色塊を偏光顕微鏡で観察したが、いずれの白色塊もイネ科植物の葉身などで見られるファン型あるいは垂鈴型の珪酸体は見られなかった。また、その他の形状を示す珪酸体も見られなかった。白色塊を構成する粒子は、半透明の灰色の微細粒子であり、直交ニコルにおいて偏光が見られた



## 1. 灰物質の材質分析

(図版25-1b, 1c, 2b, 2c)。

白色塊の蛍光X線分析では、酸化カルシウム (CaO) の含有率が、炉24層の灰質物 (分析No.1) で59.51%、炉25層の灰質物 (分析No.2) で48.96%と非常に高い値を示す。その他には、酸化ケイ素 (SiO<sub>2</sub>) が13.62%と17.55%、酸化鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が9.54%と11.98%、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が9.45%と13.31%などで、高い (表2)。

一方、現生植物の灰化試料では、酸化カルシウム (CaO) が25.28~43.88%、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O) が20.67~53.82%で高い。その他には、酸化マグネシウム (MgO) が2.56~15.41%、酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が2.13~32.92%なども高い (第28表)。

試料	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	PbO	SnO	Cl	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	FeO	NiO	CuO	ZnO	Br	RbO	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	BaO	Total
No.1の白色塊	2.97	9.45	13.62	2.47	-	-	0.81	59.51	0.50	0.41	9.54	-	0.04	0.02	-	0.01	0.45	-	0.02	0.17	99.99
No.2の白色塊	3.09	13.31	17.55	2.73	-	0.07	0.74	48.96	0.56	0.46	11.98	0.01	0.06	0.03	-	-	0.33	-	0.03	0.10	100.01
スギ幹材	15.41	-	6.69	2.13	1.47	-	41.00	30.12	0.68	1.41	0.88	0.04	0.05	0.02	-	0.02	0.03	-	0.03	-	99.98
ヤマグワ幹材	7.45	-	1.98	14.74	0.51	0.08	30.41	43.88	0.17	0.10	0.55	0.03	0.04	-	-	0.01	0.05	-	-	-	100.00
ヤマハンノキ幹材	10.83	-	3.80	32.92	0.72	0.06	20.67	30.15	0.27	0.13	0.37	0.01	0.04	0.01	-	-	0.01	-	-	-	99.99
アサギ	2.56	-	2.12	11.34	1.89	2.54	53.82	25.28	0.06	0.04	0.24	-	0.02	0.01	0.03	0.01	0.03	-	-	-	99.99
最小値	2.56	9.45	1.98	2.13	0.51	0.06	0.74	25.28	0.06	0.04	0.24	0.01	0.02	0.01	0.03	0.01	0.01	0.00	0.02	0.10	
最大値	15.41	13.31	17.55	32.92	1.89	2.54	53.82	59.51	0.68	1.41	11.98	0.04	0.06	0.03	0.03	0.02	0.45	0.00	0.03	0.17	

第28表 灰質物中の白色塊と現生植物灰化試料

## 4. 考察

白色塊の成分は、いずれの試料も酸化カルシウム (CaO) が特徴的に多い。

ニレ科のケヤキ (*Zelkova serrata* M.) の幹材は、組織内にシュウ酸石灰 (CaC<sub>2</sub>O<sub>4</sub>) の結晶もつことが知られている (島地・伊藤 1996)。シュウ酸石灰は、他にもアカネ科 (*Rubiaceae*) やクスノキ科 (*Lauraceae*) のクロモジ属 (*Lindera*) などに含まれている (島地・須藤・原田 1976)。こうした樹木灰はカルシウム含有率が高いと考えられる。

現生植物の灰化試料では、ヤマグワ幹材において酸化カルシウム (CaO) が43.88%、スギ幹材やヤマハンノキ幹材においても30%程度検出されている。

ただし、現生植物の灰化試料では、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O) や酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、酸化マグネシウム (MgO) が高い値を示すが、白色塊中ではこれらの元素の割合は高くない。また、白色塊中で酸化ケイ素 (SiO<sub>2</sub>) や酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が比較的高めの割合で検出されているが、現生植物の灰化試料では低い。

以上の化学組成の特徴から、今回の白色塊は植物灰であるとは断言できない。

白色塊の顕微鏡観察では、微細結晶が特徴的に含まれていたが、土壌起源と思われる夾雑物も含まれており、酸化ケイ素や酸化アルミニウムは土壌成分のケイ素やアルミニウム由来と思われる。

なお、貝殻は、おおむね炭酸カルシウムからなるが、貝片の痕跡はない。

今後は、試料の灰質物の純化 (沈降法による細粒分抽出など) や、その他の現生植物の灰化試料の測定など、検討すべき課題が多い。

### 引用文献

- 島地 謙・須藤 彰司・原田 浩 1976『木材の組織』p.202 森北出版。  
 島地 謙・伊藤隆夫 1996『図解木材組織』p.176 地球社。

## II. 西原大塚遺跡第216地点から出土した炭化種実

バンダリ スダルジャン・山本 華 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

埼玉県志木市幸町に所在する西原大塚遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に立地する、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。ここでは、第216地点の縄文時代後期や弥生時代末～古墳時代前期の遺構から得られた炭化種実の同定を行い、当時利用された種実について検討した。なお、同一遺構から出土した試料を用いて樹種同定も行われている（樹種同定の項を参照）。

### 2. 試料と方法

試料は、縄文時代後期の787号土坑の覆土と、弥生時代末～古墳時代前期の601号住居跡出土の土器内から採取された覆土の水洗済み試料2点である。なお、787号土坑の覆土の試料には、現地でも取り上げられた試料も一部含む。

堆積物試料の採取から水洗までの作業は、志木市教育委員会によって行われた。水洗前の土壤重量を第29表に示す。種実の抽出、同定および計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数が困難な分類群は、記号(\*)で示した。同定された試料は、志木市教育委員会に保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核のみ1分類群、草本植物ではヒシ属炭化果実とササゲ属アズキ亜属炭化種子、イヌタデ属A炭化果実の3分類群の、計4分類群が見いだされた。状態が悪く、科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群を、同定不能炭化種実とした。炭化種実以外には、炭化した子囊菌がみられた（第29表）。

以下に、得られた炭化種実について遺構別に記載する（同定不能炭化種実を除く）。

787号土坑：ヒシ属が多く、オニグルミとササゲ属アズキ亜属がわずかに得られた。

601号住居跡：イヌタデ属Aがわずかに得られた。

次に、得られた分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（米倉・梶田2003）に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

完形ならば側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に浅い縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖るものが多い。内部は二室に分かれる。残存高4.0mm、残存幅4.0mm。

採取位置	遺構		
	787号土坑	601号住居跡	
時期	覆土	土器内の覆土	
	縄文後期	弥生後期末～古墳前期初	
分類群	乾燥重量 (g)	4691	966
オニグルミ	炭化核	(3)	
ヒシ属	炭化果実	(***+)	
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子	(1)	
イヌタデ属A	炭化果実		1
同定不能	炭化種実	(5)	(7)
子囊菌	炭化子囊		(5)

第29表 西原大塚遺跡第216地点から出土した炭化種実  
\*1-9\*\*10-49\*\*\*50-99\*\*\*\*100以上  
 括弧内は検出数

(2) ヒシ属 *Trapa* spp. 炭化果実 ミソハギ科

破片であるが、完形ならば不整三角形で、先端が尖った角が4方向にのびる。萼片が肥厚してできた腕の破片のみが産出した。先端は尖るが、残存していない。残存長8.3mm、残存幅10.1mm(図版26-2)、残存長8.2mm、残存幅10.6mm(図版26-3)。

(3) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna subgenus Ceratotropis* spp. 炭化種子 マメ科

完形ならば上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。長さ4.4mm、幅2.9mm。

(4) イヌタデ属 *Persicaria* sp. A 炭化果実 タデ科

上面観は三角形、側面は広卵形。先端はやや突き出し、着点は残存していない。表面には微細な網目模様がある。残存長1.4mm、幅0.9mm。

#### 4. 考察

西原大塚遺跡第216地点の縄文時代後期の787号土坑と弥生時代末～古墳時代前期の601号住居跡出土の土器内から出土した炭化種実を同定した結果、縄文時代後期の787号土坑では、野生種でも食用にされた可能性のあるオニグルミとヒシ属、ササゲ属アズキ亜属が得られた。オニグルミは、食用にならない核の破片が産出しており、食用となる子葉を取り出したのちに、燃えた残滓が残った可能性が考えられる。

ササゲ属アズキ亜属は、日本列島で縄文時代に栽培化された可能性のある植物である(小畑2008)。小畑(小畑2008)に示された現生種と大きさを比較すると、今回のササゲ属アズキ亜属炭化種子は野生種の大きさである。また、那須(那須2018)に示された野生種の大きさの上限値(長さ7.0mm)よりも小さかった。周辺地域では、山梨県中谷遺跡、大月遺跡、東京都下宅部遺跡でも同じ時期からアズキ亜属が検出されている(松谷1997、佐々木・工藤・百原2007、中山2015)。ヒシ属は、近傍の溜池状の湿地から採取され、利用されたと推定される。子囊菌は、炭化材などに伴って住居内に持ち込まれた可能性がある。

#### [引用・参考文献]

- 松谷暁子 1997「大月遺跡から出土した炭化植物について」山梨県埋蔵文化財センター編『大月遺跡』115-117 山梨県教育委員会。
- 中山誠二 2015「中部高地における縄文時代の栽培植物と二次植生の利用」『第四紀研究』54(5) 285-298。
- 那須浩郎 2018「縄文時代の植物のドメスティケーション」『第四紀研究』57(4) 109-126。
- 小畑弘己 2008「マメ科種子同定法」小畑弘己編『権東先史古代の穀物3』225-252 熊本大学。
- 佐々木由香・工藤雄一郎・百原 新 2007「東京都下宅部遺跡の大型植物遺体からみた縄文時代後半期の植物資源利用」『植生史研究』15(1) 35-50。
- 米倉浩司・梶田 忠 2003「BG Plants 和名一学名インデックス (YList)」<http://ylist.info>

### Ⅲ. 西原大塚遺跡第216地点出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡の第216地点で出土した炭化材の樹種同定を行なった。

#### 2. 試料と方法

試料は、縄文時代後期の114号ピットから出土した炭化材1点と、弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の601号住居跡から出土した炭化材3点の、計4点である。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柃目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスバツタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)にて鏡鏡および写真撮影を行なった。

#### 3. 結果

同定の結果、114号ピットの炭化材は広葉樹のクリ、601号住居跡の炭化材3点は広葉樹のコナラ属クヌギ節(以下、クヌギ節)であった。同定結果を第30表に示す。

試料No.	出土遺構	遺物No.	種 類	樹 種	時 期
1	114号ピット		炭化材	クリ	縄文時代後期
2	601号住居跡	炭1	炭化材	コナラ属クヌギ節	弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭
3	601号住居跡	炭2	炭化材	コナラ属クヌギ節	弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭
4	601号住居跡	炭3	炭化材	コナラ属クヌギ節	弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭

第30表 西原大塚遺跡第216地点出土炭化材の樹種同定結果

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

##### (1) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版27-1 a-1 c (No.1)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

##### (2) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版27-2 a-2 c (No.2)、3 a-3 c (No.4)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

#### 4. 考察

縄文時代後期の 114 号ピットから出土した炭化材は、クリであった。燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。クリは堅硬な材で、薪炭材としても多く利用されている（平井 1996）。また、埼玉県内で確認されている縄文時代後期の炭化材でも、クリが多く確認されており（伊東・山田編 2012）、傾向は一致する。

弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の 601 号住居跡の炭化材は、いずれもクヌギ節であった。焼けた建築材などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。クヌギ節は堅硬で、割裂性の良い樹種である（伊東ほか 2011）。埼玉県内で確認されている弥生時代末～古墳時代前期の住居跡でも、クヌギ節が多く確認されており、傾向は一致する。

#### [引用・参考文献]

- 平井信二 1996『木の百科—解説編—』642p 朝倉書房。  
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』238p 海青社。  
伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』449p 海青社。

## IV. 601号住居跡の赤砂利層覆土の砂礫分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

西原大塚遺跡第216地点の調査において、弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の601号住居跡の覆土中から赤砂利層が検出された。この赤砂利層については、以前の調査においても検出されており、基質の蛍光X線分析が行われ、赤砂利層が受熱したことが推定されている(菱田 2009)。今回は、この赤砂利層および近辺の堆積物について砂礫分析を行い、赤砂利層の赤化の要因について検討した。

### 2. 試料と方法

分析試料は、601号住居跡の赤砂利層下層部2試料(第30図G-G'断面5層相当 断面南半部が分析No.1、北半部が分析No.2)、赤砂利東側壁溝覆土(第30図G-G'断面6層相当 分析No.3)1試料、赤砂利北側壁溝覆土(分析No.4)1試料、赤砂利層上層部(第30図G-G'断面4層相当 分析No.5)1点の、合計5試料である(第31表)。

各試料は、乾燥試料100g程度について、4φ(0.063mm)以上の篩を1φ間隔で用いて湿式筛分け

分析No.	遺構	時期	試料	堆積物の色調
1	601号住居跡	弥生時代後期末葉 ～古墳時代前期初頭	赤砂利層下層部(断面南半部)	にぶい・黄褐色(10YR 5/3)、礫混じりローム質土
2			赤砂利層下層部(断面北半部)	にぶい・黄褐色(10YR 5/3)、礫混じりローム質土
3			赤砂利東側壁溝覆土	灰黄褐色(10YR 4/2)、黄色土・礫混じりローム質土
4			赤砂利北側壁溝覆土	灰黄褐色(10YR 4/2)、礫混じりローム質土
5			赤砂利層上層部	にぶい・黄褐色(10YR 5/3)、礫混じりローム質土

第31表 分析試料とその特徴

を行った。さらに、0φ篩以上の残渣(砂礫)について、実体顕微鏡を用いて砂礫の岩石組成を調べた。

### 3. 結果

分析試料は、いずれも礫混じりローム質土である。

筛分けでは、いずれの試料も-1φ(2mm)以上の碎屑起源の礫が含まれていた。また、0φ(1mm)においても、ローム起源以外の碎屑物が特徴的に多く含まれていた。なお、-1φ以上の礫では、円礫が目立ち、垂角礫や垂円礫を伴う(第32表、図版28)。ただし、極粗粒砂(0φ)では垂角礫が目立ち、垂円礫を伴う。なお、砂礫の含有率(%)は、分析No.1が最も高く、分析No.2や分析No.5におい

分析No.	処理重量	-4φ (16mm)	-3φ (8mm)	-2φ (4mm)	-1φ (2mm)	0φ (1mm)	1φ (0.5mm)	2φ (0.25mm)	3φ (0.125mm)	4φ (0.063mm)	合計	砂礫の 含有率(%)
1	99.76	5.64	4.03	5.07	2.14	1.44	1.59	3.16	6.75	3.24	33.06	33.14
2	102.52	0.00	0.00	0.85	1.88	1.66	2.06	3.52	8.05	6.21	24.23	23.63
3	101.48	0.00	0.00	0.18	0.08	0.24	0.21	0.80	2.35	2.19	6.05	5.96
4	87.59	0.00	2.15	0.00	0.33	0.17	0.27	1.06	2.80	4.21	10.99	12.55
5	96.80	0.00	0.00	0.75	0.83	0.94	1.22	2.58	6.30	4.69	17.31	17.88

(単位: g)

第32表 処理重量と各篩残渣重量

でも高い(第32表)。

次に、極粗粒砂(0φ)および礫(-1φ以上)について岩石種を調べた(第33表)。以下に、同定した岩石種の特徴を述べる。

石英・長石：透明または白色の結晶面をもつ単体鉱物である。多くは、極粗粒砂(0φ)で見られた。

片岩：黒色と白色が縞状または雲母類が層状に配列する粒子である。

砂岩：主に黒色、黒灰色を呈する砂粒質の集合体である。

泥・シルト岩：黒色、黒灰色の細粒質で光沢がない粒子である。

チャート：黒灰色、赤褐色、白色、オリーブ色などを呈し、光沢がある。

凝灰岩：全体的に白色を呈し、砂質であるが、基質は白色物からなる。

玄武岩：黒色や赤色を呈し、発泡質の粒子が多い。

安山岩：黒灰色、暗灰色の斑晶質の粒子である。

ディサイト：灰色、淡褐色の斑晶質で発泡する粒子もある。風化した黒色スコリアを含む。

流紋岩：白色・灰白色で光沢があり、流理または斑晶質の粒子である。

深成岩：白色を呈し、石英や長石が複合し、黒色鉱物(雲母類または輝石類など)を伴う。

分析No.	岩石組成(0φ篩残以上)												合計
	石英・長石	片岩	堆積岩類				火山岩類				深成岩	不明	
			砂岩	泥岩・シルト	チャート	凝灰岩	玄武岩	安山岩	ディサイト	流紋岩			
1	40	10	101	27	155	1	22	2	52	43	5	7	465
	8.6	2.2	21.7	5.8	33.3	0.2	4.7	0.4	11.2	9.2	1.1	1.5	100.0
2	50	2	86	39	149	17	42	13	48	60		9	515
	9.7	0.4	16.7	7.6	28.9	3.3	8.2	2.5	9.3	11.7	0.0	1.7	100.0
3	8		14	6	14		1	1			2	2	48
	16.7	0.0	29.2	12.5	29.2	0.0	2.1	2.1	0.0	4.2	4.2	0.0	100.0
4	1		17	3	18	4		1	2	4		4	54
	1.9	0.0	31.5	5.6	33.3	7.4	0.0	1.9	3.7	7.4	0.0	7.4	100.0
5	26		37	16	79	3	15	1	37	29	3	5	251
	10.4	0.0	14.7	6.4	31.5	1.2	6.0	0.4	14.7	11.6	1.2	2.0	100.0

(上段：個数/下段：%)

第33表 岩石組成

全体的にチャートと砂岩が多く、泥・シルトのほか、流紋岩などの火山岩類を伴う。なお、玄武岩やディサイトは、発泡質の砂粒が目立つため、富士火山噴出物のスコリアである可能性が高い。

#### 4. 考察

赤砂利層と、その近辺の礫混じりローム質土について節分けを行い、砂礫の岩石種について調べた。その結果、分析No.1や分析No.2、分析No.5において、砂礫が多く含まれていた。

これらの砂礫は、碎屑起源のチャートや砂岩が多い。また、-1φ以上の礫では、円礫が目立ち、亜角礫や亜円礫を伴うため、河川成の礫(または段丘礫)と考えられる。なお、極粗粒砂(0φ)は、発泡質の玄武岩(ディサイト質)を含んでおり、ローム層起源の粒子も認められた。

なお、赤砂利層の基質の蛍光X線分析では、鉄分が多く含まれており、それが熱を受けて酸化することで赤味を帯びたとされている(菱田 2009)。

今回の砂礫分析に用いた-1φ篩残渣礫の観察では、チャート礫や砂礫において本来の河川成の礫形

態を示す円礫状のものが大半を占め、受熱に際して形成される破片状を呈する破砕物は見られなかった（図版29-1b・2b・5b）。なお、砂岩の表面には、粒子状の赤色部あるいは砂岩礫中の赤化基質部が見られたが（図版29-1a・2a・5a）、これらの赤色部は、表面に付着したものではなく、礫中の風化に伴って赤化したと考えられる。

以上のことから、礫表面にみられる赤化部は、給源礫層中の鉄分や風化に伴う鉄分の赤色化である可能性が高い。なお、赤砂利層の基質において鉄分が多いことが前回報告で確認されているが、鉄分の高い含有量が必ずしも受熱による赤化の原因とは断定できない。受熱の痕跡は、調査時における赤化に伴う硬化層の確認等も判断材料となる。

なお、仮に熱を受けたとしても、礫湿じり土壌であり、受熱温度が高温でなかったか、あるいは長時間でなかったために、礫が破砕する状況には至らなかったと考えられる。

#### 【引用・参考文献】

菱田 量 2009「西原大塚遺跡出土の暗赤褐色堆積物について」『西原大塚遺跡第3分冊』115-119 埼玉県志木市遺跡調査会



## V. 敲石の敲打面付着物の成分分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

西原大塚遺跡第216地点の調査では、弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の住居跡から敲石が出土した。この敲石の打面等には、土器粒が付着していると考えられている黄橙色の粒状付着物が見られた。ここでは、この黄橙色の粒状付着物の成分について検討した。

### 2. 試料と方法

試料は、601号住居跡から出土した砂岩製の敲石(第34図40)の敲打面に付着する粒状付着物である(第34表、図版30-1~8)。

分析No.	遺物	分析対象	遺構	遺物No.	石材	付着物の特徴
1	敲石	敲打面付着物	601号住居跡	107	礫混じり硬質砂岩	黄橙色(10YR 8/6)と灰白色(10YR 8/2)、1m以内の粒状等に付着

第34表 敲石打面付着物の詳細

試料について、蛍光X線分析装置による元素マッピング分析を行った後、黄橙色の粒状付着物について点分析を行った。

測定には、X線分析顕微鏡(株)堀場製作所製XGT-5000Type II)を用いた。元素マッピングの測定条件は、X線導管径100 $\mu$ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間5.000secである。点分析は、X線導管径100 $\mu$ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP(ファンダメンタルパラメータ)法で定量分析を行った。

### 3. 結果および考察

敲石は、礫混じりの硬質砂岩製である。付着物は、粒状あるいは斑状であり、両端の敲打面(図版30-1のa、b)および側線部にのみ見られた。敲打面aには、灰白色付着物も見られた。これらの付着物は、夾雑物を含まない均質な付着物と考えられる。

測定は、X線照射が容易である敲打面bの黄橙色付着物について行った(図版31)。

測定した結果、含有率の高い順に、酸化ケイ素( $\text{SiO}_2$ )が49.61~54.71%、酸化アルミニウム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )が21.37~23.24%、酸化鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )が17.86~21.27%、酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )が2.53~2.91%、酸化カリウム( $\text{K}_2\text{O}$ )が0.94~1.32%、酸化カルシウム( $\text{CaO}$ )が0.79~1.15%、酸化リン( $\text{P}_2\text{O}_5$ )が0.63~1.13%、酸化イオウ( $\text{SO}_3$ )が0.58~0.89%、酸化マンガン( $\text{MnO}_2$ )が0.09~

点No.	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	e <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	合計
No.1	21.37	54.71	0.63	0.58	1.16	1.06	2.53	0.10	17.86	100.00
No.2	22.63	49.61	0.83	0.89	1.32	0.79	2.57	0.09	21.27	100.00
No.3	23.24	50.86	1.13	0.66	0.94	1.15	2.91	0.12	18.99	100.00
敲小値	21.37	49.61	0.63	0.58	0.94	0.79	2.53	0.09	17.86	
敲大値	23.24	54.71	1.13	0.89	1.32	1.15	2.91	0.12	21.27	

(単位:重量%)

第35表 黄橙色の粒状付着物の点分析

0.12%であった(第35表)。

いずれの元素も、誤差(2σ)において有効な分析値であった。ただし、酸化マグネシウム(MgO)と酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)は、大気中での測定のため感度が悪く、計算からは外した。なお、鉄のマッピング図において輝度の高い部分が多く見られるが、付着物以外に黒色頁岩類の分布に対応している(図版31)。

敲石の石材は、石英・長石類、チャート、黒色頁岩類(礫に多い)からなる砂岩であるが、硬質で、風化面は見られない。この石材の特徴から、両端部の敲打面および側線部に見られた黄橙色または灰白色の付着物は、石材に由来する物質ではないと状況的に理解される。

化学組成では、酸化アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が20%以上検出されており、粘土分が多いと理解される。また、20%程度含まれている酸化鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)は、付着物の赤味成分と考えられる。

黄橙色の敲打面付着物は、赤味が強いものの、粘土分が多いと判明した。なお、赤味は強いものの、赤色顔料ほど鉄分は高くない。

敲打面aの灰白色の付着物は、良い条件で試料台にセットできなかったため測定していないが、赤味がないため、鉄分は低く、黄橙色付着物と同様の粘土質と考えられる。

## VI. 西原大塚遺跡第216地点766号土坑出土人骨

中村 賢太郎 (パレオ・ラボ)  
梶ヶ山 真里 (国立科学博物館)

### 1. はじめに

埼玉県志木市幸町に所在する西原大塚遺跡の第216地点の発掘調査において、近世の766号土坑から人骨が出土した。以下、人骨の所見を記載する。

### 2. 人骨所見

保存されている骨の部位は、頭蓋骨（頭頂骨、側頭骨、後頭骨、上顎骨）、下顎骨、右肩甲骨、左上腕骨、右上腕骨、左大腿骨、右大腿骨、右脛骨である。人骨の保存部位には重複が無く、一体分と考えられる（図版33）。部位ごとの特徴は第36表に示した。

頭蓋骨は数センチ四方の骨片で、保存状態は良くない。しかし、頭頂骨片、側頭骨片、後頭骨片が保存されている。頭蓋骨の矢状縫合の癒合はそれほど進んでいない。右上顎には第3大臼歯が保存されており、年齢はそれほど若い個体ではない。保存されている歯の咬耗は、象牙質が露出しているものも確認できる。咬耗程度はプロカのⅠ～Ⅱに相当する。側頭骨の外耳孔は小さい円形を呈する。右肩甲骨は小さい。上腕骨は華奢で細い。左大腿骨の骨体周は78mmであり、骨壁は厚くない。骨体後面粗線はほとんど発達していない。

性別の判定のための寛骨や頭蓋骨の形態が確認できず、正確な性別判定は困難であるが、保存されている人骨の一体分であり、形態の特徴から、壮年女性と推測される。

部位	左右	特 徴	番号
頭蓋骨	—	頭頂骨、側頭骨、後頭骨、縫合は癒合が進んでいない、外耳孔小さい、外後頭隆起は発達していない	骨2
上顎歯	左	I2	歯
上顎歯	左	C	骨(イ)
上顎歯	左	P1	骨3
上顎歯	左	P2	歯
上顎骨	左右	M1・M2	骨2
上顎骨	左右	左I1、右I1・I2・C	骨3
上顎歯	右	P1	歯
上顎歯	右	M1	歯
上顎歯	右	M2	骨(ロ)
上顎歯	右	M3	歯
下顎骨	左	I1	骨1
下顎歯	左	I2	骨1
下顎歯	左	P1	骨1
下顎歯	左	P2	歯
下顎歯	左	M1	歯
下顎歯	左	M2	歯
下顎歯	右	C	歯
下顎歯	右	P1	歯
下顎歯	左右不明	M	歯
肩甲骨	右	関節窩、小さい	骨1
上腕骨	左	骨体遠位部、華奢	骨3
上腕骨	右	骨体	骨4
大腿骨	左	骨体、骨体周78mm、骨壁厚くない、後面粗線は発達していない	骨6
大腿骨	右	骨体	骨6
大腿骨	右	骨体遠位部	骨4
脛骨	右	骨体	骨5

第36表 人骨所見

图 版





1. 確認調査風景



2. 調査区近景



3. 表土剥ぎ風景



4. 基本土層 A-A'



5. 186号住居跡（北から）



6. 186号住居跡（西から）



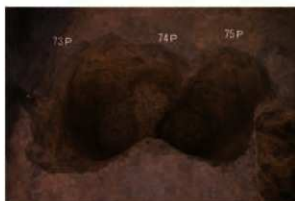
7. 186号住居跡埋壙



1. 186号住居跡炉跡



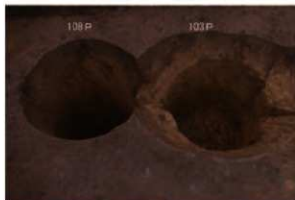
2. 186号住居跡炉跡被熱断面



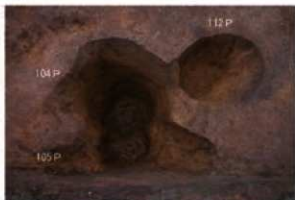
3. 73・74・75号ピット



4. 98号ピット遺物出土状態



5. 108・103号ピット



6. 104・105・112号ピット



7. 110号ピット遺物出土状態



8. 131号ピット



1. 135号ピット



2. 143・139・138号ピット



3. 776号土坑



4. 777号土坑



5. 780号土坑



6. 781号土坑



7. 782号土坑



8. 783号土坑

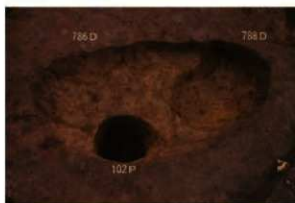




1. 785号土坑



2. 786号土坑遺物出土狀態



3. 786・788号土坑



4. 787号土坑遺物出土狀態



5. 787号土坑



6. 789号土坑



7. 790号土坑



8. 791号土坑



1. 792号土坑



2. 793号土坑



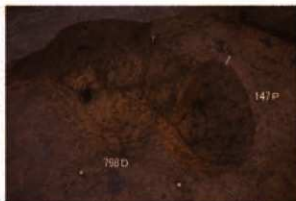
3. 794号土坑



4. 795号土坑



5. 796号土坑



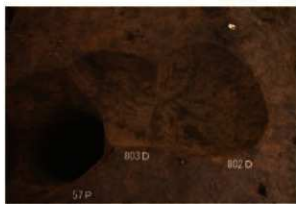
6. 798号土坑



7. 800号土坑



8. 801号土坑



1. 802・803号土坑



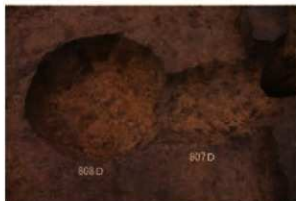
2. 804号土坑



3. 805号土坑



4. 806号土坑



5. 807・808号土坑



6. 17号炉穴



7. 18号炉穴



8. 150号ピット



1. 601号住居跡遺物出土状態



2. 601号住居跡遺物出土状態



3. 601号住居跡遺物出土状態



4. 601号住居跡遺物出土状態



5. 601号住居跡遺物出土状態



6. 601号住居跡遺物出土状態



7. 601号住居跡遺物出土状態



8. 601号住居跡赤色砂利層検出状態



1. 601号住居跡貯蔵穴



2. 601号住居跡炉跡



3. 601号住居跡



4. 601号住居跡



5. 601号住居跡床下 P 6



6. 602号住居跡遺物出土状態



7. 602号住居跡遺物出土状態



8. 602号住居跡遺物出土状態



1. 602号住居跡炉跡



2. 602号住居跡貯蔵穴



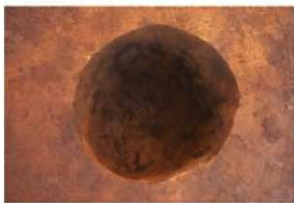
3. 602号住居跡



4. 602号住居跡



5. 4号掘立柱建築遺構



1. 4号掘立柱建築遺構 P 1



2. 4号掘立柱建築遺構 P 2



3. 4号掘立柱建築遺構 P 3



4. 4号掘立柱建築遺構 P 4



5. 4号掘立柱建築遺構 P 5



6. 4号掘立柱建築遺構 P 6



7. 4号掘立柱建築遺構 P 7



8. 4号掘立柱建築遺構 P 8



1. 766号土坑人骨出土状态



2. 766号土坑



3. 767・768・769号土坑



5. 771号土坑



4. 770号土坑



6. 772号土坑



7. 773号土坑





1. 774号土坑



2. 775号土坑



3. 778号土坑



4. 779号土坑



5. 784号土坑



6. 8号ビット



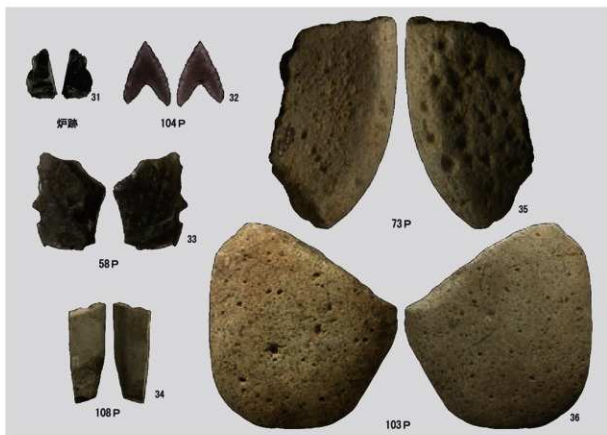
7. 調査風景



8. 調査風景



186 号住居跡出土遺物 1



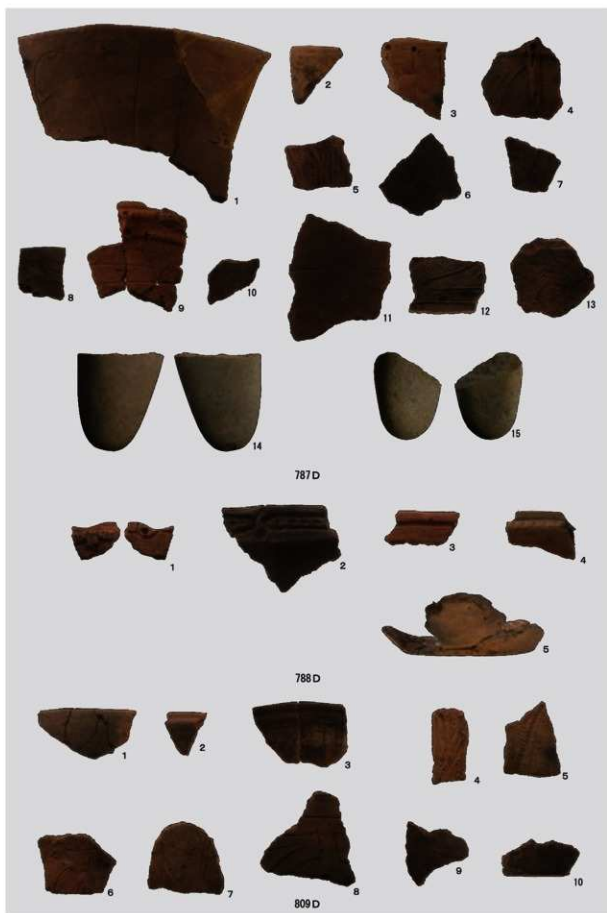
1. 186 号住居跡出土遺物 2



2. 土坑出土遺物 1



土坑出土遺物 2



土坑出土遺物 3



1. 土坑出土遺物 4



2. ビット出土遺物



遺物包含層出土遺物 1

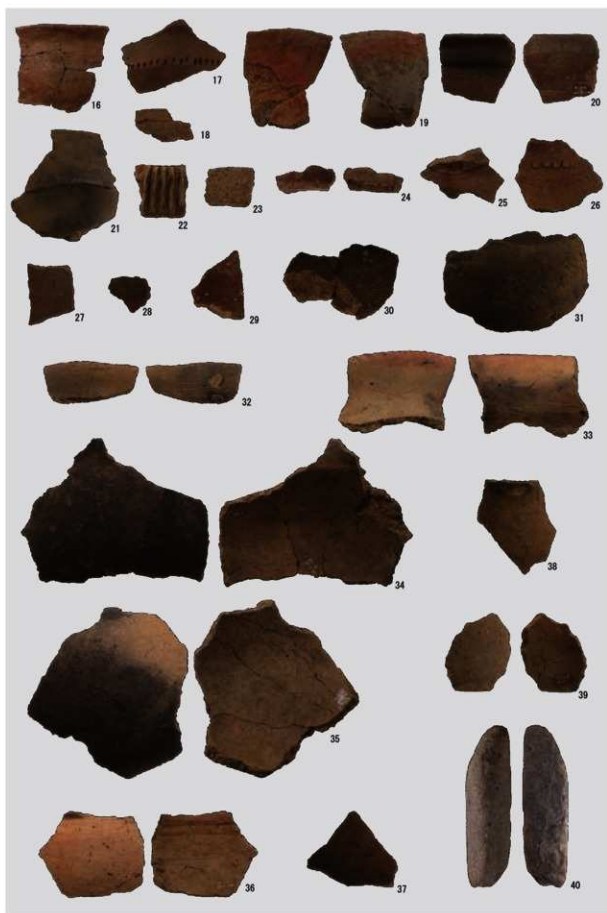


1. 遺物包含層出土遺物 2



2. 601 号住居跡出土遺物 1





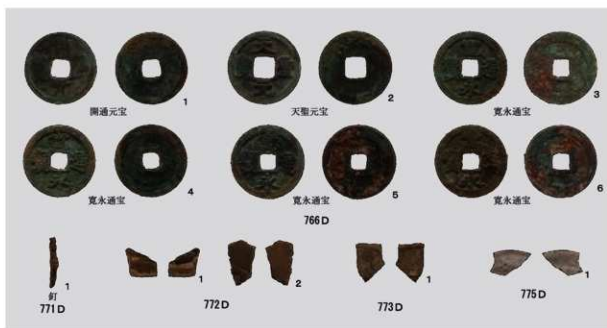
601号住居跡出土遺物 2



1. 602 号住居跡出土遺物



2. 4号掘立柱建築遺構出土遺物



1. 土坑出土遺物



2. 8号ピット出土遺物



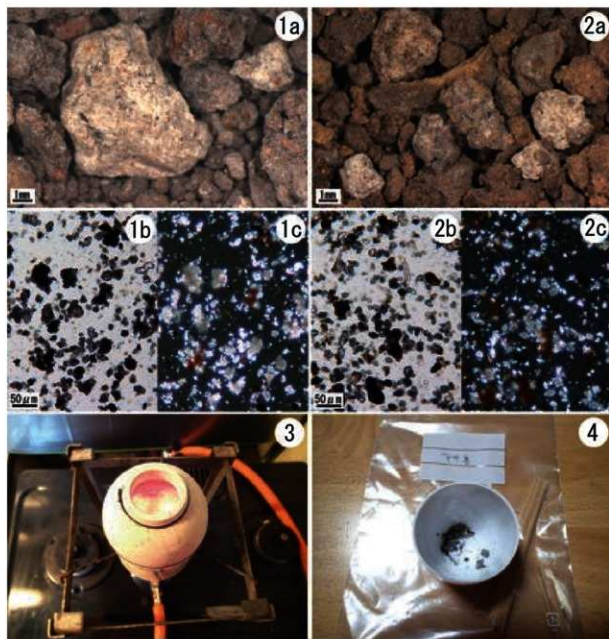
3. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



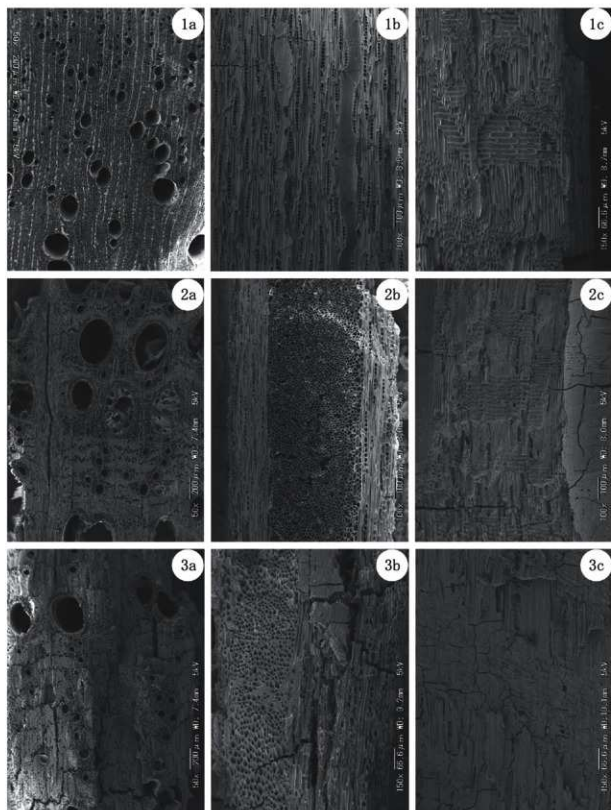
1a. 186 号住居跡 13 層中の灰物質 (分析 No. 1)    2a. 186 号住居跡 25 層中の灰物質 (分析 No. 2)  
1b. 灰物質の偏光顕微鏡写真 (分析 No. 1, 平行ニコル)    1c. 同 (分析 No. 1, 直交ニコル)  
2b. 灰物質の偏光顕微鏡写真 (分析 No. 2, 平行ニコル)    2c. 同 (分析 No. 2, 直交ニコル)  
3. マッフル炉を用いた現生植物の灰化    4. 現生植物の灰化 (アササ)

分析試料と灰物質の偏光顕微鏡写真及び現生植物の灰化



1. オニグルミ炭化核 (787号土坑、覆土)、2・3. ヒシ属炭化果実 (787号土坑、覆土)、  
4. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (787号土坑、覆土)、5. イヌタデ属A炭化果実 (601号住居跡、土器内の覆土)

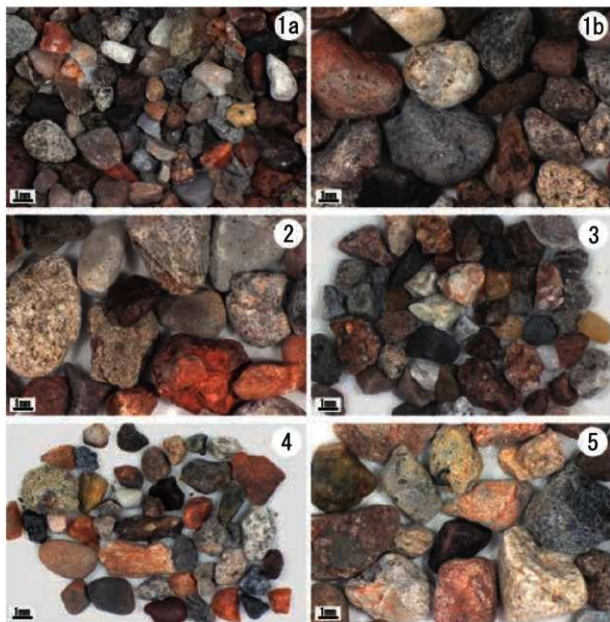
西原大塚遺跡第216地点から出土した炭化種実



1a-1c. クリ (No. 1)、2a-2c. コナラ属クヌギ節 (No. 2)、3a-3c. コナラ属クヌギ節 (No. 4)

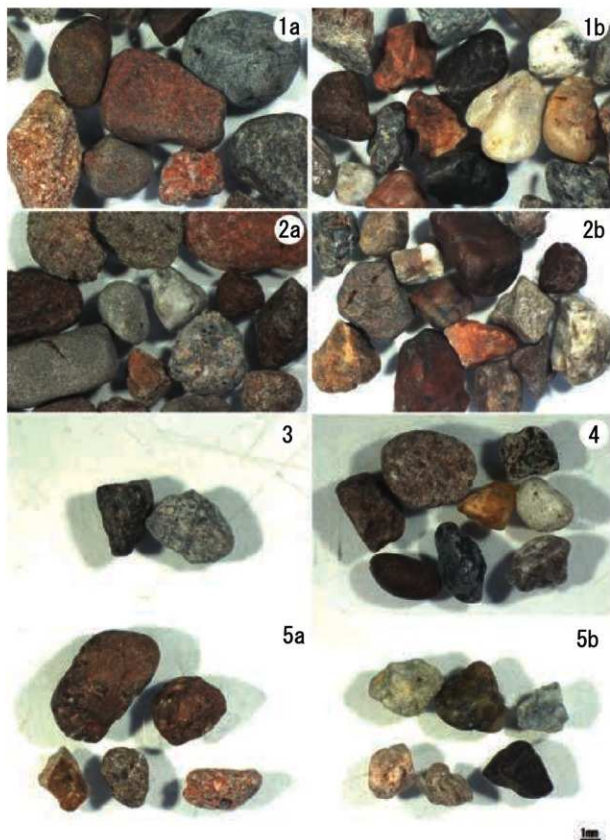
a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面





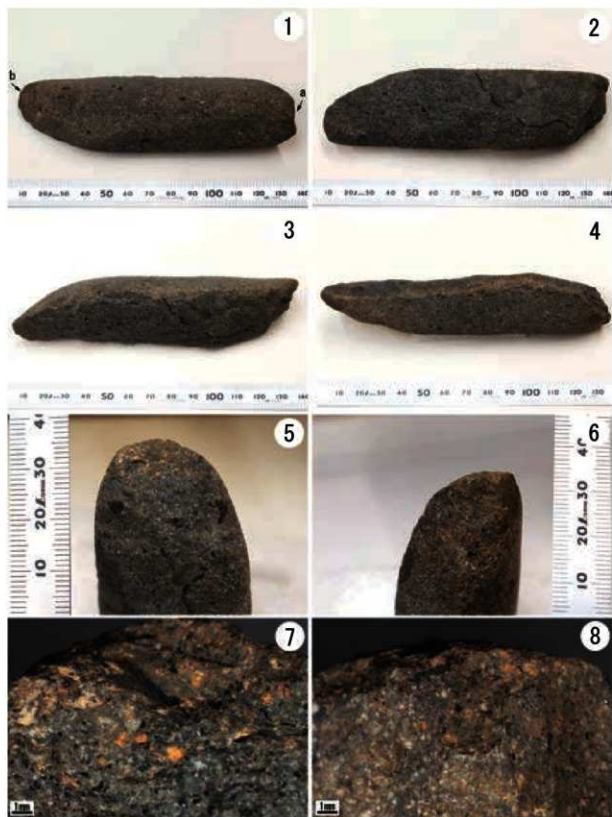
1a. 分析 No. 1 (-1φ 篩残渣) 1b. 分析 No. 1 (0φ 篩残渣) 2. 分析 No. 2 (-1φ 篩残渣)  
3. 分析 No. 3 (0φ 篩残渣) 4. 分析 No. 4 (0φ 篩残渣) 5. 分析 No. 5 (-1φ 篩残渣)

赤砂利層及び近辺の覆土中の砂礫の実体顕微鏡写真



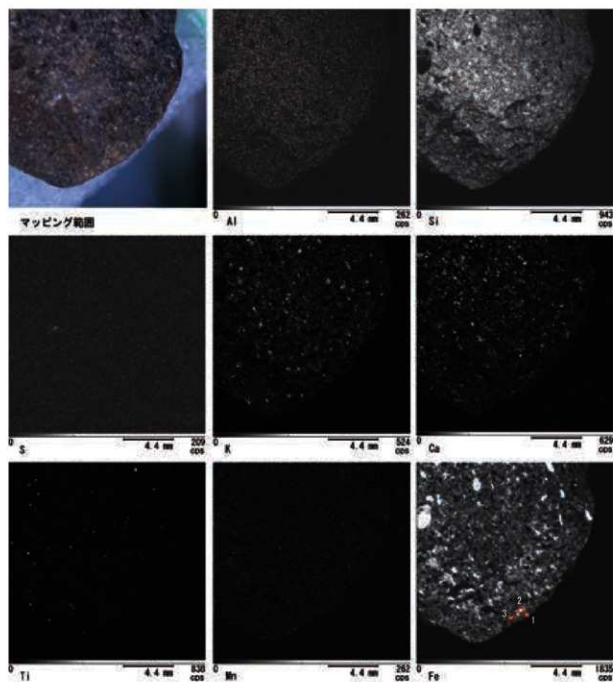
1a. 砂岩 (分析 No.1) 1b. チャート (分析 No.1) 2a. 砂岩 (分析 No.2) 2b. チャート (分析 No.2)  
3. 礫 (分析 No.3) 4. 礫 (分析 No.4) 5a. 砂岩 (分析 No.5) 5b. チャート (分析 No.5)

覆土中の礫の実体顕微鏡写真



1. 正面 2. 背面 3. 敲打面 a 4. 敲打面 b 5. 敲打面 a 6. 敲打面 b 7. 敲打面 a の拡大 8. 敲打面 b の拡大

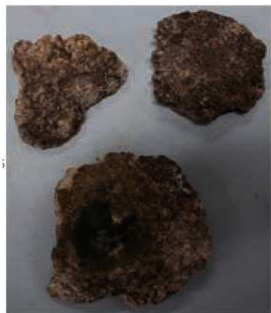
敲石と敲打面の黄色付着物の顕微鏡写真



[元素記号]

Al : アルミニウム、Si : ケイ素、S : イオウ、K : カリウム、Ca : カルシウム、Ti : チタン、Mn : マンガン、  
Fe : 鉄 (数字は点分析 No. を示す)

敲打面 b の元素マッピング図



頭蓋骨



上顎骨



下顎骨



右肩甲骨



右上腕骨



左上腕骨



右大腿骨



左大腿骨



右脛骨

5cm

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	にしはらおつかいせきだい216ちてん まいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書名	西原大塚遺跡第216地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第76集							
著者氏名	尾形剛敏 大久保 聡 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗園1丁目1番1号 TEL048 (473) 1111							
発行年月日	令和2 (2020) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡) (全体面積)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西原大塚遺跡 (第216地点)	志木市幸町 2丁目6190・6191	11228	09-007	35° 49' 03"	139° 33' 00"	20180619 ～ 20181006	373.94 (479.72)	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西原大塚遺跡 (第216地点)	集落跡	縄文時代  弥生時代後期～ 古墳時代前期  中世以降	住居跡 土坑 ピット 住居跡 掘立柱建築遺構 ピット 土坑 土坑墓 ピット	1軒 31基 104本 2軒 1棟 5本 12基 1基 43本	土器・石器 土器・石器 土器・石器 土器・石器 土器 なし 陶器・土器・鉄製品(釘) 人骨・銅銭6枚 陶器・土器	縄文時代では、後期前葉の堀之内1式期の住居跡が検出され、市内では2例目となる。出土遺物も良好であった。 弥生時代後期～古墳時代前期では、掘立柱建築遺構が市内では4例目となる。601 Yからは粘土付着の使用痕がある巖石が出土し注目される。 近世の766 Dは人骨と六文銭が出土した。		
<b>要 約</b>								
<p>西原大塚遺跡は、縄文時代中期の環状集落や弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡を主体とする遺跡である。今回は第216地点の調査成果を収録している。</p> <p>本地点では、縄文時代後期の住居跡1軒・土坑31基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡2軒・掘立柱建築遺構1棟、中世以降の土坑12基・土坑墓1基などが検出された。縄文時代では、後期前葉(堀之内1式)の住居跡1軒(186 J)が検出され、市内での検出例は2例目となった。また、弥生時代後期～古墳時代前期では、掘立柱建築遺構1棟(4 T)が検出されたが、検出された柱穴8本の配置が八角形となる特殊タイプであった。掘立柱建築遺構については、市内で4例目となり、すべて西原大塚遺跡内に限定されるものである。中世以降では、近世の土坑墓1基(766 D)が検出され、人骨と共に六文銭が出土した。</p>								

志木市の文化財 第76集

## 西原大塚遺跡 第216地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 埼玉県志木市教育委員会  
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号  
発行日 令和2(2020)年3月31日  
印 刷 株式会社白峰社